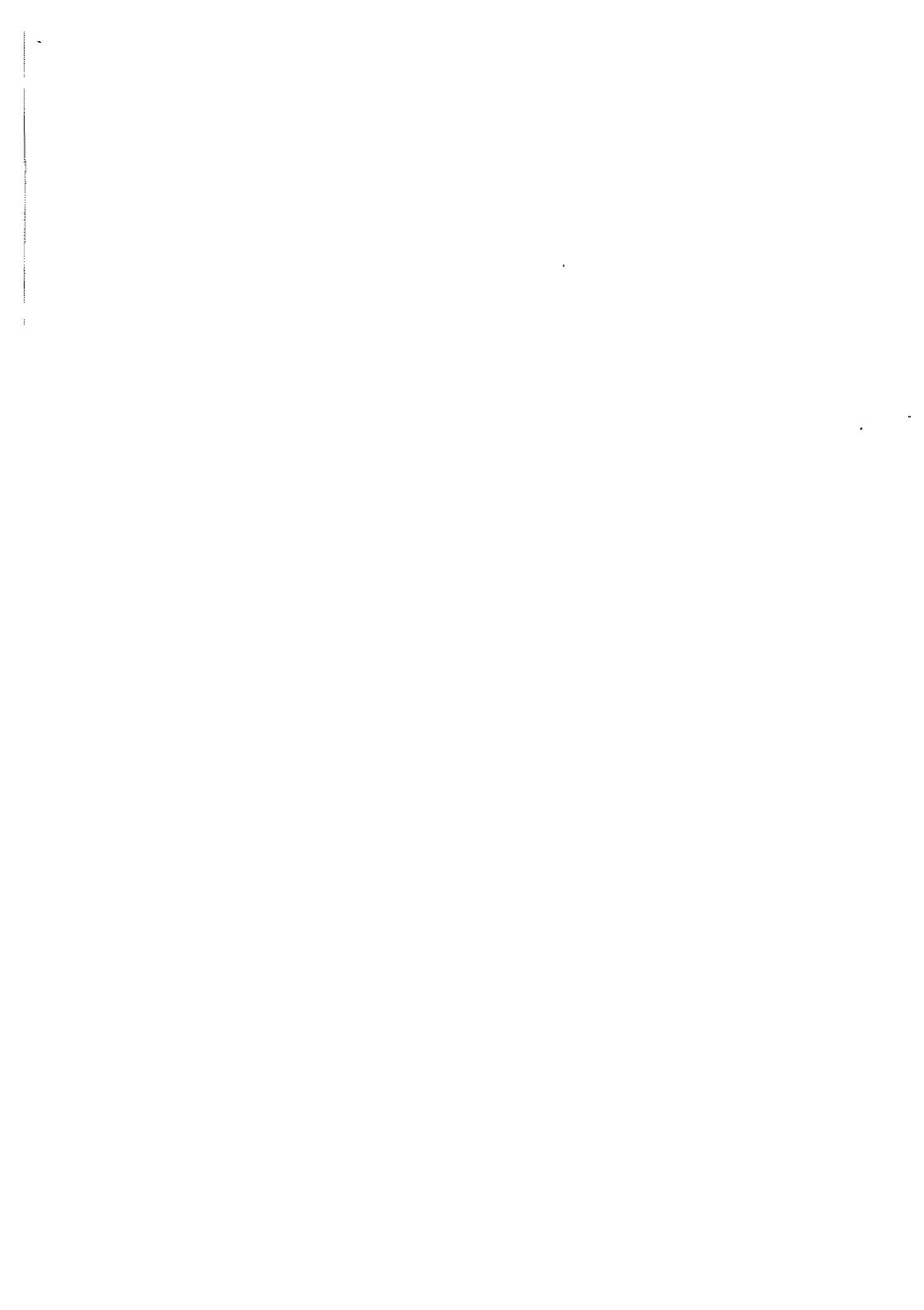




連続フォーラム「チョゴリときもの」

在日韓国・朝鮮人～子育てと学校教育～

財団法人 京都市国際交流協会



はじめに

いつの時代、世界のどんなところへ行つても子育ては人間だけでなく、生きとし生けるものの永遠の課題である。子どもを立派な人間に育てたいという思いは民族をこえて親にとつて共通した思いである。」とはいうまでもない。

今日、世界は国境をこえて異なった民族が住みあうことは「くふつうこととなつた。

そのとき、さまざまな歴史のひずみの結果、民族的マイノリティとして母国を離れてくらす家族と子どもたちがその社会でどのように受容されているか、受容する社会であるか、否かが問われる。

今回、お話をいただいた在日の保護者の方がたが育てられている子どもたち、また大勢の大人の前で臆することなく話してくれた高校生たちは、心身ともにそこやかに、そして民族的マイノリティであることを率直にうけとめ、日本社会に生きている。

この子どもたち、高校生たちの明日への思いに私たち日本人市民はどうこたえていくか。答えは簡単なようだが、そのために踏みだしてゆくべき第一歩をあらためて問われたのが今年のフォーラムから提起された課題ではなかつたか、と思つてゐる。

京都芸術短期大学教授 仲尾 宏

目 次

「チョゴリときもの」～在日韓国・朝鮮人～子育てと学校教育～

第一回「幼児と就学前の子を持つ保護者」

第二回『小・中学校に通う子を持つ保護者、その1』

第三回『小・中学校に通う子を持つ保護者、その2』

第四回『高校生の思い』

139

93

51

7

表紙の写真 京都市東山区円山公園のしだれ桜
裏表紙の写真 京都市国際交流協会前庭のベニヤマ桜

第一回『幼児と就学前の子を持つ保護者』

パネリスト

金慶子氏（在日三世・主婦）
（キムヨンジヤ）
（ヘンデ）

幸代氏

（在日二世・主婦）
（キムヨンデ）

コーディネーター

仲尾 宏氏（京都芸術短期大学教授）
（キムヨンデ）

一九九九年二月十二日実施



第一回『幼児と就学前の子を持つ保護者』

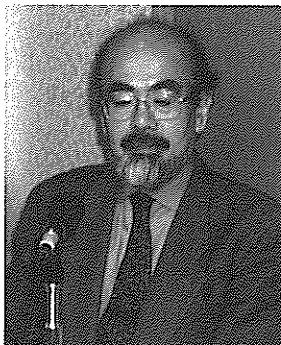
第一部

司会 それでは連続フォーラム『チョゴリときもの』を開催させていただきます。この『チョゴリときもの』は一九九一年に初めて開催し今年で第六回目を迎えます。今までのテーマなどを簡単にご紹介しますと、一九九二年は、京都市国際交流会館がオープンして三周年目で、その記念事業として、また、そのときはまだ『チョゴリときもの』というタイトルはできてなくて、【在日韓国・朝鮮人は今—その生活と意見】ということで開催しております。

第二回目からこの『チョゴリときもの』というタイトルをつけておりまして、毎年テーマを決めております。第二回目のテーマが、若い世代の方を中心としましてお話しやすくというところで、『新しい時代に向かう日本人、そして韓国・朝鮮人』というテーマで開催しております。第三回目は次の年に開催しておりますけれども、在日としての誇りを日本社会にアピールすることを目的としました『在日韓国・朝鮮人の誇りと未来』ということで開催しております。次に、日本社会での問題点などを中心としてお話をいただきました『日本に生きる在日韓国・朝鮮人』というテーマで開催をしております。そして五回目、昨年度でしたが、変わりつつある日本社会の関係の中で、その世代間の思い、などをお話しやすく『在日韓国・朝鮮人—その世代と意識』ということで開催しております。

今年は第六回目として、在日の子どもの成長過程を当てて開催します。『子育てと学校教育』といいうテーマで、三月まで四回に分けて開催する予定です。今日はその第一回目のフォーラムとしまして、『幼児と就学前の子を持つ保護者』ということでお話いただきます。

パネリストは、まず金幸代（キム・ヘンデ）さんで、在日二世の方です。もう一人の方が在日三世の金慶子（キム・キヨンジャ）さんです。そのお二人にお話いただくことになつております。コーディネーターとしては、第一回目から続けて務めていただいております仲尾宏先生にお願いします。それでは早速お話をください」とします。お願いします。



仲尾 宏氏

仲尾 基さん、こんにちは。いま『チョコリときもの』の歩みについて、会館の鄭（チヨン）さんからお話をございました。私もそのご紹介の通り、最初からコーディネーターをさせていただいておりますが、毎回非常に感動深いお話をいただいてます。つまり、在日の方々が、直接京都市民を目の前においてお話をされる唯一の機会、といつてもいいかと思います。そういうことで、お越しになる方も毎回、このように椅子に座りきれないぐらいの盛況が続いております。本当にありがとうございます。

ところが、いつも一番前の席はなかなか埋まらないんですね（笑）。コンサートとかお芝居でしたら前の席はたいへん高い席ですが、ここは無料ですので（笑）、どうぞ後ろの方、前にいい席がございますから前のほうにもお詰め合わせください。

前置きはそれぐらいにしまして、今年は『子育てと学校教育』です。できるだけ本人の声を聞きたい、ということでアイデアから出発したんですが、高校生の方はお話をいただけるということはわかつていたんですが、小学校、中学校、あるいは就学以前の方については、直接皆さん、大人の前でお話をするということはちょっと無理だ、ということに気が付きました。それで保護者の方に、子どもさんの代弁を

兼ねて、子育ての思い、というものをお話いたぐどということになりました。

今回は、児童と就学以前の子育て、というテーマです。日本の社会にはもちろん幼稚園があります。保育所もあります。ところで、京都市内にはいま三つの朝鮮第一・第二・第三初級学校がありまして、そのいずれにも幼稚園が併設されております。その他、舞鶴にもありまして、舞鶴の学校にも幼稚園が併設されているそうです。朝鮮中・高級学校あるいは韓国学園のほうは中学生以上ですので、そちらには幼稚園はございません。ですから民族学校立の幼稚園としては、市内の三園と舞鶴の一園、ということにならうかと思います。

お二人のお子様はそれぞれ、日本の保育所へ行つたり、民族学校立の幼稚園へ行つたり、お子さんによつていろいろと子育ての仕方が少しずつ違うようになりますが、そういうところを、なぜそうなったかというところも含めて、就学前の子どもを持つ在日の親の立場で今日はお話ををしていただきます。

まず最初に金慶子さんからお話をいただき、続いて金幸代さんにお話ををしていただきます。幼稚園そのものについては、のちほど金慶子さんがスライドを持って来てくださいましたので、お話を聞いたあとでスライドで幼稚園の模様などもお聞かせいただこうかと思います。それでは金慶子さん、お願いします。

金慶子 アンニヨンハシムニカ。ただいま紹介にあづかりました金慶子と申します。どうぞよろしくお願いいたします。

今日第一回目は、『児童と就学前の子を持つ保護者』というテーマだそうですが、なにぶん子育ての経験と言いましてもまだ未熟で、どれくらいお話をきるかわかりませんが、子どもの姿などを通して感じた思いなどを述べさせていただきたいと思います。



金 廣子氏

私は現在、六歳と四歳の娘を持つ在日朝鮮人三世です。子どもたちは京都北区にある京都朝鮮第三初級学校の附属幼稚園に通っています。いつも元気一杯、楽しく通っています。

私も主人も民族教育を受けて、大学までの過程を朝鮮学校で学びました。ですから、子どもたちに民族教育を、という考えはごく普通のことです。何の違和感もありませんでしたし、子どもたちも生まれたときから、ごく自然な形で民族的な家庭教育を受けたと言えます。

たとえば、生まれてから最初に覚えた言葉というのが「オンマ」という言葉なんですが、これは日本語で「お母さん」という意味です。これも、教える、教えないというよりも、家庭でそういうふうに使つてましたので、自然に覚えた言葉です。続いて、「アッパ（お父さん）」「アンニヨン（こんにちは）」というような言葉を覚えて出し、名前も朝鮮語読みで呼んでましたので、日常会話の中にちらほら母国語が入るといった感じで、知らず知らずの間に子どもが耳にした言葉というのが、朝鮮語まじりの日本語、といった感じでした。

「ねんねしよか」とよく言うんですけども、チャジャン、チャジャンというのは「ねんね」という朝鮮語なんですが、「チャジャンしよか」になつたり……。「おっちゃん」という言葉も「アンジャ」といったようなくらいで、ほとんどが朝鮮語まじりの日本語、といった家庭環境の中で子どもが育っています。食べるるものやはり、一世から受け継いだ食文化がありますので、スープとかチヂミ（韓国風べた焼）、サムゲタン（かしわのスープ）といったようなものが、もう離乳食から出てくるといった、そういうふうな感じです。

お祝い時っていうのが、朝鮮式でしたら、とりあえず派手で大きくして、というような感じになるんで

す。子どもの一歳の誕生日なんかは、セツトンチョゴリという朝鮮の民族衣装があるんですけど、それを着せて、お客様もたくさん呼んで盛大にお祝いする。近所の方にも来てもらつてお祝いをしてもらう、というようなことをしていました。子どもは何が何だかわからないのですから、緊張したりという感じだったんですけど、今、ビデオとか写真とかでそのときのことを見せるとき、すごく喜んでいますね。近所の方にもお祝いの赤飯やお餅、朝鮮料理なんか持つていって食べてもらつたりして喜んでもらいました。

私は京都市の山科に住んでいたんですけども、同じマンションの住民の方にもよくしていただいて、朝鮮人ということを何一つ隠すことなく暮らしています。近所の方も子どもの名前を朝鮮名でちゃんと呼んでくれますし、隔てなくお付き合いさせてもらつてます。ですから子どもたちも、身近な部分でイヤな思いをしたということもなく、生まれてから乳児期は、とても自然な形で民族的な要素を身につけて、家の中で「朝鮮の子」として育つてきたという感じです。

でも、子どもたちに変化が現われたのは乳児期に入つてからなんです。うちの子どもたちは、私が主人の親のほうがしている家業を手伝うということから、一歳過ぎから保育園のほうに預けていたんですけども、日本の社会に出たというか、初めて集団生活をしたというのが保育園からなんですね。早くから経験してますので、どうなるのかな、という不安もあつたんですけども、保育園に行くときも名前は本名で送りましたし、先生方や園の父母の方にも、朝鮮人であるということを最初に告げました。朝鮮名でいくと、やっぱり不思議がられるので、朝鮮人ですよ、在日三世ですよ、この子たちは四世ですよ、というのを話の傍ら告げておいて接するようにしてましたので、別に、朝鮮人だからどうこういうことでイヤな思いをしたことは一度もなかつたです。

家では「オンマ」と呼んでいて、私に話しかけるときは園内でも「オンマ」なんんですけども、子ども

が保育園に行きだしてちょっと違うなと思ったのは、言葉の使い分けをするようになつたな、という」となんです。家の中で、生まれたときからずっと朝鮮語まじりの日本語、という形で育つてましたので、日本語だけの生活というのを、保育園で初めてすることになるんですね。先生や友達には、「お母さん、来はつた」とか言つて、家では使わない言葉を保育園では使うようになつてきたということなんですね。もう一歳過ぎから送つていたので、一歳の子がどうやって使い分けをするのかな、と。ちょっと片言の言葉を覚えたぐらいの子が、なぜ使い分けができるのかな、というのが私にとつては不思議だつたんです。

特に下の子は顔見知りがひどくて、保育園に預けた当初は一ヶ月ぐらい泣きっぱなしという感じで、それもひとつ心配はあつたんですけど、泣きっぱなしになった子が、泣きながら呼ぶせつぱつまつた言葉が、「お母さん」なんです。家では「オンマ」なんです。生まれてこのかた「お母さん」て呼んだことのない子が、必死で泣きながら出た言葉が「お母さん」なんですね。いま思えば、一歳ぐらいの子に民族の違いがわかるはずは絶対になくて、ここではそう言わなきやいけないんだ、と自分なりにそういうのを感じ取つていつたんでしょうが。みんながそう呼んでるのに、自分一人「オンマ」とは言いづらかったというか……。「お母さん、もう迎えに来るからね」とか、「お母さん、ちゃんとしてるか心配してること」とか、その「お母さん」という言葉を先生とか友達から聞くと、ああここでは「お母さん」と言うんだ、というような感じですよね。

私は一歳の子が何を感じてるんだろうって少しひっくりしたのと、やっぱり少し不安を感じました。子どもなりに何か傷ついてる部分があるのかなあつていうのが。知らず知らず使い分けを覚えてしまつたということが、子どもにとつて幼児期に、日本社会といえばおかしいんですが保育園で、初めて日本の方の中に入つてそういうことを覚えたのかな、ということですね。

上の子は五年間、下の子は三年間、山科の万因寺保育園というところに通っていたんですけど、私も日本の先生やお母さんとお付き合いができるよかったです。幼稚園のときから私は民族教育を受けまして、大学までの過程をずっと朝鮮学校で過ごしてますし、そのあとも教員を七年間しまして、そのあと結婚して家業に入つたという形なんで、ほとんど朝鮮人社会の中で育つたみたいなもんなんですが、子どもを育てるようになつて初めて、保育園に送りながら日本のお母さんたちや先生とかとお付き合いができるようになつたんです。それこそ私のほうが、朝鮮人ということをはつきり前面に出して付き合えば、相手方もすつきりしてるように、すぐ付き合いやすそうにしてもらつてました。ですからそういう面では、お互い、話せばわかつてもらえるというか、隠せば隠すほど都合が悪くなるというか、一つ隠せば二つ隠すようになつて、二つ隠せばもう十隠すようになるっていう感じで、何でも大っぴらにしておけば、わからないことは聞いてもらえるし、私もわからないことは聞けるし、といふ感じで保育園に子どもを預けた五年間というのは、とても私にとっていい経験になりました。

上の子が卒園まであと一年というところで朝鮮の幼稚園に編入させたんです。その理由は、学校からは朝鮮学校に、というのが頭からあつたんです。保育園が朝鮮の学校にあればたぶん保育園も朝鮮の民族教育を、となつたと思うんです。今のところ保育園はないので、仕事を持つての親としては、自然的に日本の保育園に行くと思います。

ただ、学校になれば民族教育を、となるので一年前ぐらいには朝鮮の幼稚園に入れておかないと、小学校一年から言葉が、授業から全て朝鮮語でするので、友達も初めて、先生も初めて、言葉もわからないうでは可哀相すぎるなあと思いまして、ちょっと遠いのを覚悟して一年前に入れました。そのときに下の子も一緒に三年保育に入れて、今は朝鮮の幼稚園に通つてます。

保育園を卒園一年前に編入させるということで、やはり保育園の友達とか先生方とかがとても残念に

思つてくれて、「仲良くしてたのに」という感じで、「最後まで一緒にいられたなら……」という言葉をかけてもらつたりしたんですけど、私も答へに戸惑つてたんですよね、親御さんにどういうふうに言うべきかと。「朝鮮語がわからないと子どもが可哀相なので……」という言い方ぐらいしかできなかつたんですけど、「子どもは子どもで、ちゃんと子ども同士で言つてるんですよ。子どもの間では、上の子に、「ヨンヘちゃん、なんで他の幼稚園に行くの?」って聞く子がいて、聞かれたうちの子はどう言つたかというと、「ヨンヘはな、朝鮮の子やねん。みんなと言葉の違う国の子やねん。英語の人とかいろいろいるやんか。ヨンヘは朝鮮語をしゃべるとこの子どもやねん。だからその幼稚園に行つて朝鮮語を習うねん」って言つたそうなんですね。すごくわかりやすいというか……(笑)。それで園の子どもたちは、「すういなあ、がんばつてな!」と。卒園するときにはいろいろお土産とかもらつて、寄せ書きも書いてもらつたんです。「朝鮮語がんばつてな」とか書いてある。それが五、六歳の子が書くことなのかなあというぐらい、そういうふうなことが書いてありました。それをまた担任の先生が私に言つてくれて、何かジーンとくるものがありました。乳児期とか家庭教育で「朝鮮の子」というのをわかるように育てて、保育園行きながらもそういうふうに育てて、ああ育て方間違つてなかつたな、と思いました。

朝鮮の幼稚園に通い出してもう一年が経つんですけども、子どもたちは本当にいつも楽しそうなんですよ。朝は七時過ぎにお弁当を持って行くので、二時間ぐらいかけてバスに乗つて行くんですね。幼稚園の子にとつて二時間かけてというのはすごく大変なことです。でも日中は満喫して帰つてきますので、よく疲れないなあと思うんですが、子どもはそれなりに逞しくなつていくみたいですね。距離が遠いといふことがとても心配だつたんですけども、子どもたちの姿を見ると、そんなものへツチヤラという感じなんですね。あとでスライドが出ますので、子どもの様子なんかはまたそのときに話したいと思います。

冬場は朝がつらくて、ちょっとグズつたりとかもしますが、絶対に「休む」とは言いませんね、楽しくてたまらないという感じで。

朝鮮語もやはり小さい頃は覚えるのが早くて、「一人娘が家でおまま」とをするときとか幼稚園(つぐ)をするときとかは、もう朝鮮語なんですよ。家でも、朝鮮語まじりの日本語じゃなくて、朝鮮語だけでも話してもほとんど聞き取つてしまいります。一年という短い期間なのに、すごいなあという気がします。今までには子どもに内緒の話をするときは、主人とほとんど朝鮮語でしゃべるんですね、子どもに聞かれないと笑)。でもそれが今はもうできないんです。ほとんどわかつてしまうので(笑)。

このごろよく家で主人とも話すんすけれども、ウリユーチウォン(幼稚園)に行くようになつて一段と子どもが明るくなつたなあつていう感じがします。それはなぜか、というのを親なりに考えてみると、保育園でも本當によくしてもらつて、友達とも仲良くして、いま形にはないんですけどいろんなところで差別という問題はあると思うんですが、子どもたちの中でそういう差別というのは、うちの子は全然経験してないんですね。本當によくしていただいたんですね。

その子どもたちなんすけど、やっぱり最初の言葉の違いというか「ちょっと違うな」というのから始まつて、抱いた不安というか、家庭と園とが違うんだという子どもの不安が、朝鮮の幼稚園に送るようになつて安心感に変わつたような気がします。家庭と幼稚園とがつながつてているという安心感……子どもなりに、大切なものを感じ取つていてるんだなあと私も思います。幼稚園ではいま母国語を基本として、いろんな朝鮮の文化とか民族の心とか、そういうものを中心に学んでいいみたいで、そういう家と園とが一緒というのが安心感につながつていてると思います。

今日このようにお話をすることでいろいろ思い出したんですけど、誰もが「自分の子を育ててみて初めて親の気持ちがわかる」と言いますけれども、まさしく私もそうで、在日朝鮮人として異国の地で生ま

れて育つていく子どもに民族教育を、と思う親の気持ちが本当によくわかるようになりました。私も最初から民族教育を受けたというのもあるんですけども、また私をそういうふうに育てくれた両親にはもう、ただただ感謝しているという感じです。

私の両親は民族教育を受けていません。一九四〇年代に日本で生まれた在日二世です。四〇年代といえば戦争中ですよね、まだ。私のハルベ（お祖父さん）は、韓国の南、慶尚南道の出身で、土地とか仕事を当時の日本軍に奪われて、働き口を探して日本へ渡ってきたと聞いています。それが十六歳のときです。九州の鉱山を点々としながら、爆弾を仕掛ける「発破（はっぱ）師」という仕事がありますよね、それをやつてたようなんです。そのときから生活は言うまでもなく苦しいもので、私のアボジ、お父さんが生まれたときもとても悲惨なものだつたらしくて、親戚を頼つて京都のほうに来て、いまだ京都に住んでいるということです。

私たちの両親が育つたときは朝鮮人差別というのが目に見えてわかるような時代で、人間として扱つてもらえなかつたという時代だったそうです。京都市南区の東九条で私は育つたんですけど、南区にある東和小学校にうちの父は通つていました。そのときもやはり差別を暴力で受けて、教員も友達も目の敵にした、というそういう時代ですね。学校に行つても勉強らしい勉強はさせてもらえず、ケンカばかりしている毎日で、それではいけないということで、自分なりに独学してソロバンの資格を取つたそぐなんです。そのソロバンがきつかけで、高校に入學するときに特待生で入れてもらえて、卒業するときに日本の銀行が決まつてたらしいんですけど、国籍が朝鮮ということで日本の銀行では雇つてもらえないくて、そのあと銀行の朝銀に就職が決まつたということを聞いています。

屈辱ばかり味わつたアボジなんですけど、社会に出て、朝銀に勤めるようになつてから朝鮮の人たちと深く接する中で心のゆとりを感じて、民族に触れ、また祖国を知るようになつて、自分の子どもには

絶対に民族教育を、と心に決めたそうなんです。私が長女んですけど六人兄弟で、六人とも全部朝鮮学校に通いました。父は朝銀に少し勤めていたということもあって、母国語はそのときに覚えたり、親から習つたりとかしていたのもあって読み書きはできるんですけど、母は日本の学校しか出てないので、読み書きどころか言葉自体全然しゃべれなくて、そういう親が子どもを朝鮮学校に入れるということはすごく大変だったと思うんですね。

あのころオモニ学校というのが各地域にあって、週に一～三度、私のオモニも朝鮮語を習いに夜出かけて行つてました。近所に住む朝鮮語を知らない母親たちがほとんど行くので、その間、朝鮮学校に行つての子どもたちが一ヵ所に集まつて、一緒に夕ご飯を食べようということになつて、カレーとかスープとか親が作つておいたものを一軒に集まつてみんなで食べて。その間アボジたちはといふと、路地に長椅子を出して将棋を差したり、というようなアットホームな感じのところで私は育ちました。私が宿題をしているときに、オモニも一緒にノートを開けてオモニ学校の宿題をしたり、名前を書いたり、他の近所のオモニと話すときも、片言の朝鮮語を一所懸命使つていうというオモニの姿を今も思い出します。

私がいま子どもを民族学校に送るときの状態と、私の親が私たち兄弟を民族学校に送つたときの状態というのは全然違うんですね。私は民族教育を受けて、その中で育つてそれがいいと思つたというのと、私の親が日本の学校に通いながら差別を受けて、まあ日本の学校に通つたから差別を受けたんじやなくして、その時代がそうだったというのもあるんですが、そういうところで育つて朝鮮語を知らずに子どもを民族学校へ送つたというのとでは、子どもを育てるときの難しさというのが違つたと思うんです。宿題でわからないことがあつても親に聞けないんですけど、字が読めないので。それで近所にいる朝鮮語がわかる人のところまで持つて行って宿題を教えてもらつたりとか、そのたびにやっぱり辛い思いをしたと思つんですね。

うちの親は「子どもを民族学校に入れる」とで民族を取り戻した」とよく言つてます。自分たちがそういう教育を受けてないから、子どもを入れることによつて自分たちも成長したし、また変わつた、とよく言つてます。そんな両親から伝えられた民族教育を本当に私は誇りに思つてますし、自分の子どもも、これからもつともつと朝鮮学校で学び、いろんな夢に向かつて頑張つてほしいなと思つています。

親がわが子を持つ愛情の中で一番大切なものは、人間として真の生きがいを教えることだと思つんですね。何を生きがいとするか、ということが一番大事だと思うんです。そのために、どの学校へ通わせて、どのような教育を受けさせるか、ということがとても大切なことになると 思います。五十年間続いた民族教育というのは、まさしくそういう親の心を一心に背負つたものであつたと思います。

現在、民族教育に対してもいろいろ意見もありますし、いろんな運動を通して改善もされていますけども、日本の政府の対応というのは未だ何の変わりもない不当なもので、根本的な解決がなされてないでモグラ叩きみたいな状態で、ひとつ解決すればまた次が出てきて、という感じなんですね。

私はここにお集まりの方が、より多くの理解と支援をくださつて、切実に求められる待遇改善といふか民族教育を守るために、また力を貸していただければと思います。長くなりましたが以上です。ありがとうございました。

仲尾 ありがとうございます。それでは続いて金幸代さんにお願いいたします。

金幸代 こんにちは。どうぞよろしくお願ひいたします。

現在、私は京都朝鮮第一初級学校の小学校一年生の息子ヒヨンスと、幼稚園年中組の娘アユがおります。私は金慶子さんと同じ京都の朝鮮学校で学んだのですが、彼女とは家庭や地域環境が違つたためか、

子どもに民族教育を選んだことが正しかったという強い確信は持てずになりました。



金 幸代氏

私は小学校二年生から朝鮮学校に編入したんですが、それは父親の反対を押し切つて、母親ひとりの意見で私を朝鮮学校に入れました。私は弟と一人兄弟なんですが、私は朝鮮の学校に、弟は日本の学校にずっと通いました。私は、母親が父親の反対を押し切つて朝鮮の学校に入れたということを、小学校二年生ですから既に意識していく、学校ではそうではないんですけど家にいると、たとえば、テストの点数が悪かっただ良くなないことがあると、私が責められるのではなく、母親が責められたり、朝鮮学校のせいにされたりといふことが私自身すごく辛くて、窮屈な思いをしていたということを、いま振り返つて思い出します。

常々、父親が日本の学校のほうがレベルが高いんだというようなことを私がいる前で言つもんですから、いつしか私も朝鮮学校に通いながら民族教育を受けているんですが、父親のそういうた価値観というか、日本の学校のほうが教育レベルが高いのかな、というような考えが自分の中にも共存するようになつていました。そうした教育を受けた私です。

話は飛びますが、知り合つた夫は日本の学校へずっと通つていた在日の人です。夫は大学のときに朝鮮文化研究会、朝文研で民族意識を持つようになったと言つていきました。そのような私と夫の間に生まれた子どもを育てるとなつたときに、教育の話題というものは必ず何か話の終わりには出てきて、「それどうする」という話で、「学校や」「どつちや」というふうに、朝鮮の学校に入れるか、日本の学校に入れるか、という話が毎日のように常に頭にあって、子どもが生まれた時点からそれがもうノイローゼというか答えを出せなくて、いくら話をしてもキリがない。「ここはいいけど、ここがなあ」というのが

常にあつて、学校を作れるものなら作りたいなあという現実逃避したことばかり言つてた時期もありました。

それで、朝鮮学校に入るか日本の学校に入るかということはもう置いておこうということになつて、どこの学校に入れるというより、「どんな人間に育つてほしいか」を考えようということで、日本の学校に通つていた夫と民族教育を受けた私とがいろいろ話をしていく、こういう職業に就いてほしいといふのも違うなあという、まあ消去法みたいな感じで、それで「アイデンティティーを持つた知恵のある人」というのに二人が納得した感じなんですね。では、どんな環境がそれに適しているんだろう、といふうに考えて、いろいろ考えたんですが、やはり朝鮮の学校やなあという答えを出しました。

民族教育はやっぱりアイデンティティーを持つためには不可欠やなあということで決めたんですが、学校前の幼稚園児とか保育園の年齢のときには、朝鮮人学校に行つてしまふと朝鮮人社会にどっぷり浸かってしまうという今の状況ですから、日本の子どもたちや日本の社会に触れさせたほうがいいだろうということで、日本の保育園に送つていきました。

それで現在小学校一年生の息子の入学の手続へとなつたんですが、朝鮮学校のほうで入学前に体験入學というのが二回ほどありました。そのとき同時に、附属で幼稚園もありますので、幼稚園の体験保育というのもやつていたんです。それで息子と娘、二人とも連れて体験入学に行つたんですが、幼稚園に入った瞬間から、娘のほうが活気に満ちた子どもたちの中に自然に溶け込んで、あまりにも自然に溶け込んだので私も驚いたんですが、娘は甘えん坊で私にベッタリくつついていたのが、どこに行つたんだろうという感じで、園のほうの先生も、「ずっと通つてた子みたいですね」とおっしゃるぐらいだったんです。で息子のほうも自然と溶け込んでいて、別に違和感を感じていないうござつた。

そのときに給食（幼稚園のお母さんが当番制で行つてある月に2回の給食の日があります）のカレー

ライスと一緒にいただいて、そこにキムチもありました。うちの子どもたちは家でもキムチなどを食べていたので遠慮なくみんなと同じように食べていました。その時点では息子の入学は決めていたんですけど、娘のほうは入学まではずっと保育園に送るつもりだったんです。それで娘のアユに「朝鮮の幼稚園はどう?」と聞くと、「行きたい」。「でも今の住吉保育園を辞めないと行かれへん」と言うと、「辞めたくない。両方行きたい」と言つて（笑）。これは子どもに決めさすのは酷だなあと思いました。「学校からは民族教育」という答えを出してたんですが、「幼稚園……早いなあ」どうしよう……とまた問題がドンときてしまつて……。でも本人はメチャクチャ溶け込んでいて、喜んでいたんです。

それで園のいろんな話を聞いていると、先ほどの第三小学校の附属幼稚園でもそつみたいですけど、月に一回必ず遠足やお寺参りとか、園外へ遠足のようなものを実施されてたり、毎月お誕生会をして父兄の方が協力してお誕生パーティをしたり、給食をお母さん方が当番制で作つていて。そういういろんな行事とか細かい話を聞いていると、父兄と園の先生方が一所懸命に子どもたちのために良いことをどんどんやつていこう、という熱意が伝わってきて、何か「いいかもしけんなあ」というのと、もう一つは、朝鮮の小学校はどうしても運動会とか行事が日曜日とかになりやすくて、保育園のほうもそうなりがちなので、そういうのが重なつてどちらかを選ばないといけないとなつても……ということで、ほんとに五分五分という感じで、息子の小学校入学と同時に娘も朝鮮の幼稚園に入園することになります。それで九八年の四月に入つて、もうすぐ一年が経ちます。

結論から言うと、思つていていたよりも良かったかな、と感じています。最近の出来事なんですが、大根は朝鮮語で「ムウ」というんですけど、一年生の息子のほうは「大根って朝鮮語で何やつた?」とは聞きますが、娘のほうは「ムウラゴイルボンマルムオツ?」っていうふうに、「ムウって日本語では何やつた?」ということを朝鮮語で私に聞くんですね（笑）。エッ?と思つて、はじめこの子は何かこんがらがつ

てるのかなと思つたんですけど、ああなんか二歳ぐらい違うとだいぶ言葉の吸収というものが違うんだな、と初めて発見したんです。小学校一年から入った息子は、はじめは外国語を学ぶように一つ一つ覚えていつてるような感じがあつて、でも五歳の娘アユのほうはバイリンガルというか、両方を同時に吸収していつてる感じを受けました。

私は民族教育を受けましたが、最近特に母国語、朝鮮語をもっと上手になりたい、一世の祖母達が使っていた慶尚道の言葉をもっと知りたいとか思つて、いろんなところに朝鮮半島の映画や演劇を見に出かけるんですが、言葉って文化だなあとしみじみ思うんです。直訳できないことって本当にたくさんあって難しいなあと思つてたんです。たとえば、日本語の「わび」「さび」とかを朝鮮語でどう言つたらいいのかわからなし、朝鮮語の「アイゴー（注釈）」というのは、その微妙なニュアンスで訳す人のセンスにかかるつてるなあとを、すごく身にしみて感じていたので、もしかしたら私の娘アユは私よりもそういう感覚が鋭くなるのかなというような、ちょっと嬉しい気持ちもありました。

いま一年を振り返つてみると、送る前に民族教育を選んだことが正しいという確信が持てなかつたんです、一年前よりも少し持てたかなというような現在です。金慶子さんのような民族教育の確信というのがなく、それは私の生活全体が全てそうだと思うんですが、本当に子どもと一緒に一つ一つ確認していくつてるというか、育つていつてるという感じです。

私は十年間、在日コリアンの劇団で芝居をしていましたが、今にして思えばそれはある意味で、在日コリアンとしての自分自身の生き方を追求する過程だった気がします。その追求は限りなく続くでしょうが、今は子どもと共に一歩一歩、歩んで行つてるという感じです。以上です。

(注釈) 「アイゴーの意味」

- ① 非常に痛いとき、悲しいとき、驚いたとき、力のいるとき、憤慨したとき、くやしいときなどに出る言葉。ああ…、あ、あら、ひやあ…、まあ。
- ② 泣く声、哀号 (アイゴウ)。喪家で哀悼を現わす哭声。

仲尾 ありがとうございました。お二人とも子どもさんの様子も勿論ですが、親としての思いを非常に率直に、ありのままにお話いただきましたので、もう私がまとめる以上に皆さんの心を打つたことがあります。

さて、その子どもさんの勉強している現場ですが、金慶子さんが朝鮮第三小・中学校の附属幼稚園の模様をスライドで持ってきていただいてますので、スライドを見せていただきましょう。では、説明を

金慶子さんお願ひします。

金慶子 スライドは生活風景を映したもので、去年写したものだそうです。学校のほうから借りてきました。

これは植物園①に遠足に行つたときのものだと思います。これは動物園②へ親子遠足に行つたときのものです。

仲尾 あの、子どもさんはどーに映つてますか？

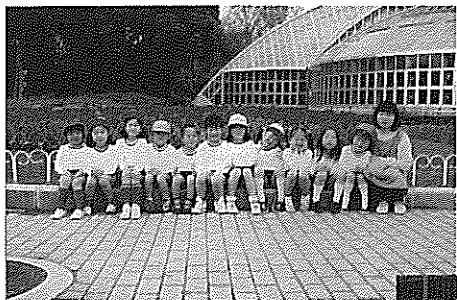
金慶子 これは去年のなので、うちの子どもは映つてないんです (笑)。

仲尾 残念ですねえ（笑）。

金慶子 すみません（笑）。これは宝ヶ池③へ行つた写真です。幼稚園の子どもたちは外へ課外活動で出るというのがすごく多くなりまして、彼らが幼稚園に行つていたときは全然違つて、ショットちゅう外に出ています。何かというと先生が学校のスクールバスで連れて出て、毎日が遠足みたいな感じですね。……これは給食④の時間だと思います。子どもたちもすごく表情がいいんですね。明るい感じで、目がしつかりしていますね。これは運動会⑤の風景です。これは梅小路公園⑥へ年長さんが行つたときですね。今年はうちの子どもも行つてきました。

これは学校内⑦で写しています。これは学芸会⑧のようです。今度の日曜日に子ども会館のほうでも学芸会がありますので、もし時間があれば見に来てください。……これは夏⑨に写したものですね。……これはお誕生日会ですね。月に一回、お誕生日会⑩というのをしていまして、小学校のほうもそうなんですけど、朝鮮学校では給食というのがないんです。ちゃんとした援助がまだできていないので、全部お弁当持ちになるので、子どもたちはいつも冷たいご飯を食べています。スープもないのに、週に一回はお母さんたちが学校へ行つて給食を作つたり、月に一回はお誕生会をするのでその給食を作つたりします。これはスケート⑪のときですね。冬場に二～三回スケートの教室があつて、ちゃんとインストラクターの先生も付いて、スケートを習つたりもしています。ただ学校内に設備が整つてないので、プールとか、スケートとかに連れて行くのに、ほとんど実費で全部行つています。プールなんかは月に二回ほど決めて、踏水会のほうで見てもらつてます。

いま子どもたちはいろんなことをさせてもらつてるんですが、みんな学校と親の負担ということになつてゐるんです。どれだけかかるうが、やれることはいっぱいやつてほしいなと思つていてます。



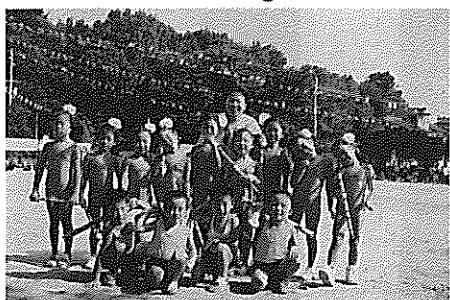
①植物園



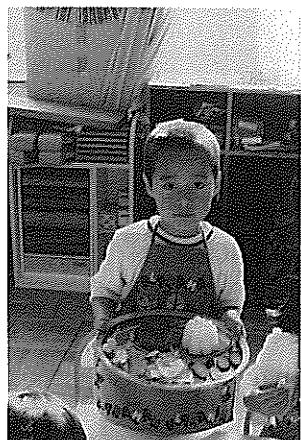
②動物園



③宝ヶ池



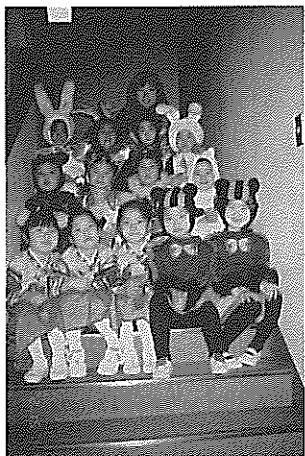
⑤運動会



④給食



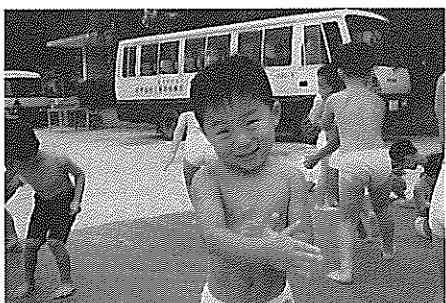
⑥梅小路公園



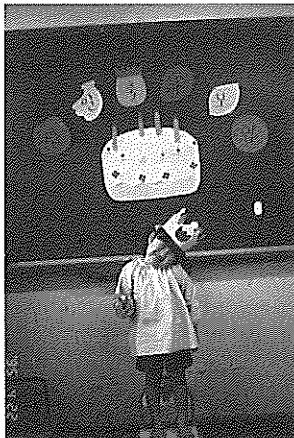
⑧学芸会



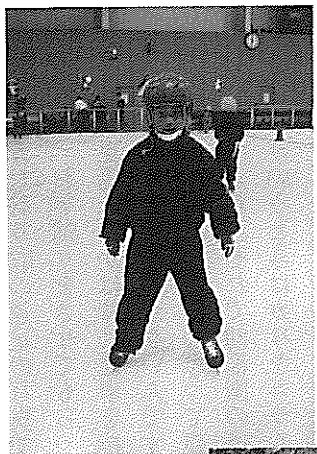
⑦学校内



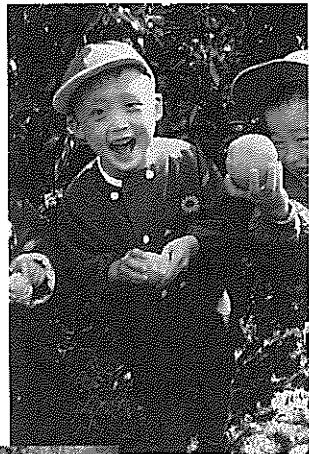
⑨夏



⑩お誕生日会



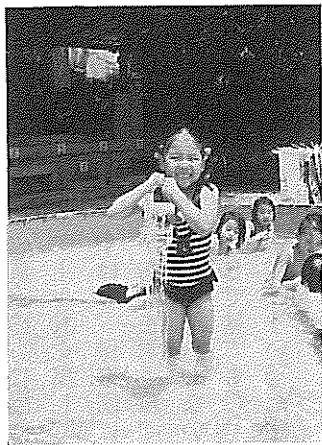
⑪スケート



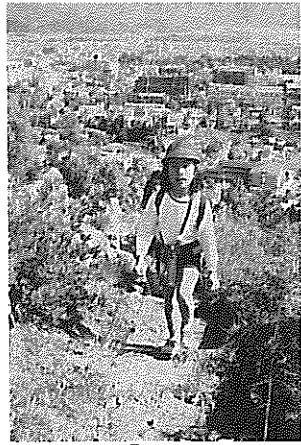
⑫みかん狩り



⑬お芋掘り



⑭ビニールプールで



⑮登山

これはミカン狩り⑫の遠足の写真です。これは秋のお芋掘り⑬です。これは近所の農家の方に協力してもらつて、お芋掘りをさせてもらつてゐるんです。……これは学校内でビニールプール⑭を出しての水泳です。夏場なんかは特に仕事を持つてるお母さんたちが、私もそうだつたんですけど、保育園に送つてれば夏休みというのがないんですけど、幼稚園に送り出すと一ヶ月半ほど夏休みがありますよね。でも、朝鮮の幼稚園で教育をと思って親御さんたちは送るので、結局、夏休みのあいだ見てもらわないといけないですよね。それで幼稚園のほうが制度も作つてくれて、ほとんど夏休みもなしで見てもらつています。そういうときはカリキュラムのとおりに教育するのではなくて、プールとか、こういつた感じでしてもらつてます。

これは登山⑮ですね。いろんなことをさせてもらつてますね、以上です。同じような写真ばかりですみません（笑）。

仲尾 どうもありがとうございました。雰囲気がよりよくわかるように思いました。ハングルもちょっとこちよこ出てきましたしね（笑）。

いま既に今日の予定のうちの五十分がすんでしまいました。ここからあとは、皆さん方のご質問やご意見、そういうものと一人のパネラーの方とのお話し合いということになりますが、例によりまして、お手元にお配りしております質問票にお書き込みいただいて、休憩時間の間、なるべく早めにお書きいただき、そしてそれを整理して、それによつてお二人との対話を続けたいと思います。特にどちらでもなければ指名は要りませんが、金慶子さんにとか、金幸代さんとにかくいうように指名をしていただきても結構です。それでは今ちょうど一時五十分ですから、三時五分まで十五分間の休憩の間にこの質問票をお出しします。それではよろしくお願ひします。

司会 いまお話のありましたように、三時五分に第一部の質疑応答に移りたいと思います。」意見箱をこちらの前に置いておきますのでお入れください。よろしくお願ひします。

第一部

質疑応答

司会 それではこれより第一部を始めさせていただきます。

皆様からのご意見・ご質問を基にしまして、質疑応答または意見交換を行いたいと思います。それは先生、よろしくお願ひします。

仲尾 それでは再開いたします。今回は九通の質問並びにご意見もいただきました。ご意見については、かなり長いものもございましたし、それについても全部紹介をさせていただきます。まず最初にこういう質問がありました。

「幼稚園、保育園の先生方もお一人と同じ民族の方ですか。」と「う」とです。民族学校の先生方、つまり朝鮮学校の先生は全員朝鮮人の方です。日本人の先生はおられません。「また日本女性、男性でも、先生の資格を取れば教育者になれるのですか。スチール写真を見て、子どもたちの幸せな大らかな笑顔で今日の研修を受けてなぜかホッとした。同じ子どもを持つ親として。」

こういうご感想とご質問です。ここでのお尋ねは、民族学校の先生の資格はどういうことなのか、ということです。今少し控え室でお伺いしてたんですが、東京に「朝鮮大学校」という民族学校の大学

があります。それと「研究院」という大学院もあります。そこにはまた二年制の師範学部というのがありますまして、日本で昔「師範学校」と呼んでいたもの、今の日本で言うと教育大学ですね、その教育大学にあたる師範学部を卒業すれば全国各地の民族学校の先生になつていくコースが開けている、ということでした。日本の学校の日本人の大学生が、教育学部あるいは一般的の大学で教職課程を取つて教員の免許資格を取りますが、それはあくまで日本の学校の先生になるための資格として、民族学校の先生の資格とは全く別のコースです。まず民族学校へ行けば、先ほどもお話にありましたように、全て授業は朝鮮語で行われますから、自由自在に駆使できなければダメなんですね。日本人でも最近、朝鮮語を勉強して一所懸命やつておられるプロの方もいらっしゃいますけども、そういう方はむしろまだ非常に少数ですし、やっぱり民族教育ですから、その民族の先生が教えられるということをされております。それがこの方に対するお答えです。

その次ですね。お三人の質問ですが、だいたい民族学校の中身に関する質問で、いずれも主として金慶子さんへのご質問ですので、これはまとめて金慶子さんにお答えいただきます。

二、「今日は本当にありがとうございます。金慶子さんが民族教育に支援を、と語られていましたが、私たちで何ができるか教えてください。」

こういうご質問。その次。

三、「民族学校の運営確保について、特に資金面について、国や地方自治体から補助はないに等しく、すべて保護者、学校関係者の犠牲に成り立つていると聞いています。その実態および苦労についてお話ししてください。」

その次も同じく金慶子さんにとってことで、関連質問ですが、

四、「金慶子さんにお伺いします。金慶子さんのおじいさん、お父さんは、民族差別の甚だしかった時代に、日本社会の中で大変苦労されたという話を聞きました。しかし三世である金慶子さん以降は、日本・韓国の経済成長のお蔭で、平和ムードの中で日本の保育園、さらに民族学校で子どもの教育に安心感を持つて臨んでおられるとのこと。結構なことだと喜んでおります。ただ、母国語に不自由させないため二時間もかかる民族学校へ子どもさんを通わせている。さらに非常に数多くの戸外活動に実費がかかっているという話。日本の学校のような府や市の補助がないので、かなりな経済負担になると思います。ざつくばらんに言って、一人の子どもさんの教育費は、一ヶ月どの程度必要ですか。」

「こういう質問です。ですから関連していると思いますのでお答えいただきますが、その前に日本の自治体からの補助金について、私の知っている限りでまずお答えをしておきます。

民族学校である朝鮮学園・韓国学園は、いずれも学校教育法では「各種学校」ということになつてます。各種学校については、日本の学校教育法第一条に定めるような、日本の小学校・中学校に対するような援助は国も自治体もしておりません。ただ、京都府も京都市も、教育助成金なり何なりという形で、私立の学校としての範囲で、たとえば京都府ですと私立の学校に京都府が補助金を出してますが、それと同じように扱つて、同じレベル、率での補助金を出しております。京都市のほうもやはり一定の補助をしております。但しその金額は、学校運営からいきますと非常に微々たるものなので、つまり本来の一校にあたる日本の小学校・中学校が国から受けている助成制度が、全く適用されておりませんので、そういう点で非常に困難があるということです。

それから、たとえば学校の建て替えることですけれども、日本の私立学校ですと、校舎が古くなると

国が五〇パーセント、残りは私学振興財団というところから、金利付きですが低利でお金を借りて、それで建て替えるということになります。ところが民族学校の場合は、まず国からの補助金というのがゼロですから、私学振興財団の金利付き助成金が五〇パーセント、プラスあとは保護者からの寄付に頼らざるを得ない、という形になつております。唯一、神戸の被災のときにだけ例外的に国が五〇パーセントの補助金を出しましたけれども、それはあくまでも例外ということになつております。

以上が、日本の文部省ならびに自治体の援助の実情です。それでは、いまの「質問に併せてお願ひいたします」

金慶子 今、仲尾先生のほうからお話をありましたが、そのとおりなんです。いま不便に思つていることの一つは、大学の受験資格の問題なんです。今のところ私は、子どもがまだ幼稚園なので、面と向かつてそういう問題に直面しているわけではないんですけど。ただ、育つていく過程で親がやはり子どもに希望も持つて、いろんなこともさせてやりたいし、日本に、異国の地に住んでいるということが負い目にならないように、私たちが子どもを育てる時代がもつと良くなるようにと思えば、いろんなことをやはり改善してほしいなと思うんですね。

いま大学の問題というのが一つの大きな問題になつてまして、私立大学とか専門学校とかそういうところへは、門を叩いて行けばほとんど朝鮮学校の卒業者でも高校の卒業資格があるとして認められて受験することができるんです。私立大学の試験が受けられるんですけど、唯一受けられないのが国立なんです。それは文部省の許可がないとダメなんです。大学院のほうは、京都大学もそうですし、このあたり新聞などで報道されてたんですけど九州大学のほうも大学院のほうは認めていつてるらしいんです。その理由としては、その学生自身が大学卒業またはその大学院に入学するだけの能力がある、知識を持つ

てはいる、というのに適しているからということなんだそうです。でも、そのまま高校を卒業して国立大学に入るというのではなく、まだ許可が下りてないんです。その理由としては、高校として認めてないということにあると思うんです。朝鮮学校を高校として認めてない。高校卒業の資格がないということなんですね。ですから今、日本の大学、特に国立を受ける場合は大検というのを取るんですけど、大検を取る場合に中学卒業という証明が要りますよね。その中学卒業というのも証明が出ないんです。結局そうなると通信教育で他の高校に通つて、そこで高校を卒業したという資格を取つて大検をとるという形で、二重、三重に負担がかかってるんです。

昔からそうなんんですけど、九五年に横浜のドイツでしたか、民族学校は許可が下りたそうなんです。それは本国の高校卒業の資格を得ているから、ということだそうなんですけど、日本にドイツの学校というものはそこ一ヵ所だけであつて、朝鮮学校というのは全国、北海道から九州まであるんですね。その大学まで備えている学校で、これだけ五十年という歴史を持つついて、カリキュラムも十二年制で幼稚園からやつていて。それなのになぜ、ということなんんですけど、文部省の回答は、「国交がない。国交がないために、どういう教育をしているかわからない」という答えなんだそうです。

国交がない、どういう教育をしているかわからない、という文部省の答えに対しては、では文部省の誰か、民族教育ではどういうことをしているのかを見にきたことがあるのか。それもないんですね。

去年、大阪の朝鮮初級学校のほうに、国連の委員会から派遣された人が見にきたということを聞いたんです。国連の人権委員会では、民族教育に対する日本の対応がいろいろ問題になつてしまつて、日本人で外国に住んで日本の教育を受けてられる方たちは、その国でちゃんととした保障を受けてるんですよ。なのに日本では、民族教育というのを蔑視してますか、特に朝鮮学校に対しては他の感情があ

るような気がします、私自身。

差別というの、自立つてないというよりも、意見にも「だいぶ改善されたんじゃないですか」というのがあるんですけども、そうじゃないんです、やっぱり。いまに残つてます。それは、特に学校問題では文部省からの根本的な解決というか、戦後処理の問題もありまして、なぜ、日本にこれだけの朝鮮人が住んでいるか。日本に住みながら、もう三世、四世、今は五世の時代になつてゐるんですね。五世まで続いた民族教育というのは、これからもまだ続くんですが、奇跡的なものがあると思うんですね。これだけ何の援助もなくして、本国から先生が来ているわけでもないんですよね。自分たちで先生を育てあげて、教員として育てて学校に送つて……。そういう中で、教科書ももう三回ほど変わつてゐるんですけども、やっぱり時代が変われば日本に住んで永住していく人も増えるので、その中で、日本の国に対応できるようにということで教科書もだいぶ変わってます。日本の大学を受けても、それなりの能力も持つてますし、なんら問題はないと思うんです。だから考え方の違ひっていうか、まだそこに差別があるというか、特に朝鮮学校に対して許可を出せば、民族学校の保障に対してはもう全部解決するようなものだと思うんです。

何が引っ掛かつてゐるかというと、やっぱり朝鮮学校に対しての保障ができないということだと思います。他のアメリカンスクールとか中国学校とか、ああいうところに許可を出すのはそんなに難しいことじやないと思うんです。ただ、そこに（許可を）出せば（朝鮮学校は）もう黙つてしませんよね。これだけ数も多くて歴史もある学校なのに、ということで。そういうところが、民族学校の保障がいまだ改善されていないという根本的な問題だと思います。

一ついま大学の問題をあげましたし、もう一つは助成金の問題ですね。いまのところ、私もはつきり金額というのはわからないんですけど、だいたい年間で一人当たり八千円程度とか聞いてるんです。高

校生ならば、日本の高校に通う子どもたちの十分の一ぐらいで、小・中・高生になりますと八分の一ぐらいの助成金しか出でていない。学校に対する援助金というか、(校舎を) 建て直すとか、運営費とか、そういうものもほとんど出でません。全部自分たちの寄付とか、あとは保護者の月謝とか、そういうもので賄つてます。ですから運営自体は本当に大変だと思います、何の保障もないのです。それで税金は税金で払つてますしね(笑)。だからもう、保障は受けずに払うものは払つて、という感じです。

それともう一つは、損金扱いがされないという寄付金の問題なんです。日本の学校では学校に寄付する場合は損金扱いですよね。それが損金扱いされないんです。だから親御さんにとってはすごく負担だと思います。寄付をしても損金扱いではない。その上、学校に月謝は払つて、給食がないので毎日お弁当を持つて行く……それを十二年間するんですね。だから「子ども一人育てるのにいくらかかりますか」という質問もあつたんですけど、小学校、中学校までは私はわからないんですけど、いまのところ幼稚園の子どもとして、一人当たり月謝が一万円弱かかるつてますし、そこにスクールバスの交通費、それに冬場だつたらストーブ代とか諸々がついてきますので、一人一ヶ月三、四万円はかかるつてます。食費まで入れると五万円ぐらいはかかるんじやないですか。それで二人、三人となつてきますと、学校に送るだけでもう大変な感じです。以上です。

仲尾 ありがとうございました。こんどは金幸代さんに質問がきております。

五、「金幸代さんのお父さんが、朝鮮学校に転校することに反対されたのはなぜでしょうか。お父さんは朝鮮人なのか日本人なのか、どちらでしようか。金幸代さんが自分の子に」、日本の学校か民族学校かとても迷われたようですが、それぞれの教育のプラス面、マイナス面を率直に聞かせていただけたら

と思います。」

〔こうじょう〕質問です。

金幸代 私の父は在日一世です。私が朝鮮学校に転校するきっかけとなつたのは、七〇年代に在日同胞の帰国運動というのが活発に行われていて、私の母の兄が北朝鮮に帰国をしました。それをきっかけに、母が、日本にいても朝鮮人として育つてほしいという気持ちで、私を民族学校に入れたと思います。父親は、自分たちが帰国するなどとは夢にも思つていませんし、日本で永住するつもりですから、朝鮮学校の教育が帰国を前提とした者が受けるものという感覚で受けとめていたと思うんです。日本で住んでいくのに授業がほとんど朝鮮語だから漢字も覚えられないんじやないかとか、ですから、帰国するんじやない、日本で住んでいくんだから朝鮮人として帰国する為の教育を身につけるよりも、日本の社会でどう生きていくかという考え方で、日本の学校のほうがよいと思つていたんじゃないかと思います。

私が自分の子どもを日本の学校か民族学校か迷つていた時に大阪市の鶴橋の生野というところには在日朝鮮人がたくさんいます。朝鮮市場や国際市場があつて、ハングルの看板もあります。そしてたしか小学校のときだつたと思うんですが、学校の半分近くが在日の子で、本名で通つている子もたくさんいて、クラスで「私はキム・ヘンデ」と言つても、「ああ、そうなん」というふうにみんながわかっている状態、そういう状態だつたら、もしかして私も自分の子どもをその学校に入れたかもしれません。今となつてはちよつと矛盾があるかもしませんが、

私がいま住んでいる地域の公立学校は決してそうじやないんです。アイデンティティの問題で本名を名乗つてほしいと思つてるので、本名で自分の子どもがいま日本の学校に通つた場合に、なんどとか、ちょっと変わつてゐなあとか、恐らくそういう状況だと思うんです。私も自分が小学校のときに、

学校以外では通名を名乗つたりしていたので、すぐ自分に矛盾があり、朝鮮人イコール、マイナスイメージというのがあって、それは本当に残念なことだし、なくしていかなければならないと自分では思っています。

私自身が初対面の日本の方に、こういう場でないときに、「キム・ヘンデです」というのは勇気が要ります。そんな自分が、自分の子どもに本名で日本の小学校へ通わせるということは、ちょっと抵抗を感じました。

日本の学校について言えば、大学なんかは専門知識も豊かだし、レベルも高いですし、いろんな面で豊かなものを吸収できるし、いろんな人との交流もあるということで、そういう面ではやはり魅力を感じています。そんなところです。

仲尾 ありがとうございました。あと、この方は「金慶子さんには民族学校を選ばれた理由をもう少し聞かせてほしいと思います。」ということが続いておりますが、このご質問については、今から読み上げますもうひとり別の方の質問に関わって、お答えをいただいたらと思います。次の方のご質問は指名はございませんので、お一人に一言ずつお答えいただきたいと思います。いまのものと少し中身が重なつております。

六、「民族学校についてですが、特に義務教育段階においては、民族ことに別の学校に通うのではなく、日本人と朝鮮人が同じ学校で学ぶことにより、互いに良い教育効果が得られるのではないかと思いますが、どのようなものでしようか。」

「この質問については、いまの金幸代さんのお答えの中に少しあつたと思いますが、まあこの質問です

から、またこのご質問に対する回答ということで、お二人ともお答えいただけたらと思います。但し、この方も「もちろん、そのためには公立学校における条件整備も必要だと思いますし、民族学校でも日本人、日本国籍を有する朝鮮民族を含めて、を受け入れる取り組みなども必要だと思いますが、互いの子どものためにもいいのではないかと思います。」

この方のご意見は要するに、日本の学校に朝鮮人が学ぶ、あるいは民族学校でも日本国籍を有する朝鮮民族も含めて、つまり帰化という形で日本国籍を持つている子ども、あるいはダブルの子どもたちも、ということだと思いますが、受け入れる取り組みも必要だと思いますと、こういうようにおっしゃっています。そのことにつきましてお二人に少しずつコメントをいただきたいと思いますが、まず金慶子さんからお願ひします。

金慶子　はい。質問の中に、日本国籍を持つていて朝鮮民族、つまり帰化をしたとか、母親のほうが日本の方でお父さんが朝鮮人とか、その逆の場合もありますが、そういうふた子どもさんが民族教育を受けるというのは今現在あります。日本籍を持ちながらも自分のお父さんが朝鮮人である、お母さんが朝鮮人である、というので選択して子どもさんが朝鮮学校に来るというのは今もあります。私の知っている方でも、日本籍をずっと持っていて、高校を卒業するときに「どうしても朝鮮籍が取りたい」と願い出た人もおりました。両親が日本の方で、どうしても日本人にしかならないのに「朝鮮人になりたい」というのは絶対無理ですけども（笑）。日本に来て、何らかの理由で籍を失つて日本籍になつたとか、片方がどうだとかというのは、親御さんの希望もあり、それはできます。

あと「民族学校で、日本の学校に通いながらでも、朝鮮の子どもと日本の子どもとが一緒になつて民族教育ができないか」という質問、教育効果が得られないか、ということだったんですけど、それは私

は無理だと思つてます。それは環境がどうとかじゃなくて、日本の教育は、立派な日本人を育てるための日本の教育であつて、民族学校の教育というのは、立派な朝鮮人を育てるための教育なんですね。ですから歴史にしても文化にしても、ごちやまぜにして教育をするといふのは不可能だと思いますし、たゞ異国之地に住んでいる、というのが私たちの現在持つてゐる条件というだけであつて、選んで日本人にならうとか、他の国人の人間ににならうとかしてゐるのではないので、民族教育を受けるというのは、民族学校が存続するというのが第一であつて、それを合併してしまおうといふのは私はおかしいんじやないかなと思います。

ただ両面で、日本の子どもさんと民族学校に通う朝鮮の子どもさんが、お互いにわかり合うというのは、お互いを認め合つてこそ初めて友好関係ができるのであつて、「国籍は関係ない」とか「民族は関係ない」とかいう言葉を若い人の中でよく聞くんですけども、私は大いに関係があると思います。「民族」というのがなければ、「自分」というのが存在しないと思うんですね。特に自分の国に住んでいる人は、「民族」というのは改めて感じることはないと思うんです。日本の方が、生まれたときから日本人で、日本に住んで、「私は何国人なんだろう」なんて思うことはないと思うんですけど、やっぱり異国之地にいるからこそ民族教育というのは必要であるし、続けていかなくてはいけないものだと思ってます。

私の近所にも日本の方もおれば韓国から来た人もいらっしゃるんです。韓国から日本の在日韓国人のほうにお嫁に来たという人がいて、私が朝早くから子どもをバスに乗せて行きますので、たまに会つたりとかすると「こんなに朝早くから」とよく言われるんです。韓国からお嫁に来たその方は、「自分のところの子どもは本名で日本の学校に送つてるよ。お母さん、若いのに古い考え方持つてるね」って私に言われるんです（笑）。で私は「教育に古いも新しいもないよ。何か勘違いしてるんじゃないの」って言つたことがあるんです。それは何かというと、私たちの（立場の）在日朝鮮人というのは、自分たちのルー

ツ、一世のハラボジ、ハルモニ、つまりおじいさん、おばあさんから始まっていると思つてゐるんです。「故郷は?」とよく聞かれるんですけども、故郷は結局、おじいさん、おばあさんの、一世が生まれ育つた場所が私たちの故郷になつてゐるんですけど、行つたこともないし、話で聞くぐらいのものであつて、それが故郷と言えるのかと思うときもたまにあるんですけど……。私にとつて故郷は、いま「学校」なんです。「故郷は?」と地名で聞かれると、おじいさんたちが日本に移つてきたときのところなんですけど、思い出というの、自分の言葉を使つて文化を覚えて、温もりを覚えて……思い出して「よかつたなあ」と思うところが故郷になつてゐるんですね。それが、何らかの形で「みんな同じようになればいいじゃないか。日本に住んでいるから一緒になればいいじゃないか」っていうのは、ちよつと違うと思ひます。教育には本当に、新しいも古いもないと思ひますし、守るべきことは守るべきだと思つてます。

いま特に社会環境というか、家庭・社会・学校で自分の子どもを教育するといつたときに、よく日本の学校に通つてられる親御さんにも話を聞いたり、いろんな青少年の問題でテレビとかでも取り扱われていますよね、子どもたちに「キレル」子が多いとか……。そういう報道を聞いてましても結局、学校と家庭と社会と、というプロセスがいま崩れているんじゃないかな。自分の子どもをどういう大人に育てようとしているのが、というのがはつきりしてないと思うんですね。私は民族学校を出しますので、最初から家庭と学校しか教育の場がなかつたんです。社会というのは別の社会であつて、だから三位一体にはなつてなかつたんですね。でも社会から学ぶのは何かというと、日本の社会でいいものを取り入れて、自分がこの異国の方に住みながらでも「朝鮮人としてどう生きるのか」というのがあつたから社会に負けなかつたというか、日本人になろうと思わなかつた。日本人がいい悪いとかそういう問題ではなくて、自分の中の「民族」は捨て切れない、ということです。それで私の子どももそういうふうになつてほしいと思うし、先ほど私が親のことを話したように、私の親はいろんな差別もありましたが、「民族を

失っていた」ということをよく言つんですよ。それは何かというと「自分がどういうふうにして生きていくべきいいのか」というのがはつきり持てない時代で、日本にいるから日本人になつてしまつのが、帰国するのか、またそういう問題じやなくて、じゃあ日本にいるんだつたら日本にいるで、どういうふうに生きればいいのか、というのがはつきりしてないときだったので、民族教育を受けさせた親の気持ちというのが、すごくよくわかるんです。民族教育を受けさせて、はつきりしたことを自分がつかめば、その上で、どういう仕事を選ぶか、どういう人生を選ぶか、というのはその子がこれから持つていくものであつて、親が道を敷いてあげるのはその「気持ちの問題」だと思う。民族教育を私が選んだのは、民族心を忘れない子どもに育てたい、ということが第一です。以上です。

仲尾 ありがとうございました。では金幸代さん、お願ひいたします。

金幸代（質問を再読）私はこの方のご意見の中で、「公立学校における条件整備」という部分が、どのようなことを含んでおられるのかわかりませんが、私は、現状ではなくこの社会が変わつた状態でなら、いいと思います。私は日本に永住するので、日本人と朝鮮人が同じ学校で学ぶことは良いと思います。但しその条件整備という部分が、どのようなことを含んでいるのかということで答へは変わるのでが、在日が在日として扱われるという条件です。だから今の日本の教育をそのまま一緒に受けるというのではなく、朝鮮学校で受けている教育も日本の学校で受けている教育も、プラスした内容の教育を受けられるのであれば、私はここに書いておられるとおり「教育効果が得られる」と思います。しかし、とてもそれは現状とは遠いような気がします。以上です。

仲尾 ありがとうございました。いまのご質問の方の条件整備ということで、金幸代さんは一つの留保条件を付けられました。それはもう少し私なりに解釈しますと、やはり日本の学校へ行つて本名を名乗り、そして本名で別に差別も受けない、学校の先生も「この子は日本の子どもではなくて、朝鮮文化を背負っている子どもだ」ということを認識して取り組まれる、そういう学校の雰囲気がないとダメだ、というような点がまず中心ではないかと思います。

それから、いろんな朝鮮文化、あるいは朝鮮語などについての教育を日本人の子どもにも学ぶ機会をもつと作らないと、そういう雰囲気づくりはできないと思うんですね。そういったことが条件整備の中に入つてるんだとすれば、今おっしゃったように「それでもかまわない」というのが金幸代さんのご意見かと思いますが、そのように解釈してよろしいですか？

金幸代 学校自体というよりも社会。学校に通つているのは子どもであつて、その親というのは社会ですから、条件整備も当然ですが、その社会が同時に変わらないとちょっと厳しいと思います。

仲尾 おっしゃるとおりですね。日本の学校というのも日本の社会の一部ですから、日本社会が、在日本の朝鮮人という存在をそのまま受け入れて、そして二つの民族の文化の違いとその存在をお互いが認めていく社会であれば、ということですね。

金幸代 はい。

仲尾 わかりました。といつゝことで、この方にはそういうお答えをまとめとしてお返ししたいと思い

ます。

次は地域の子どもさんとのお付き合いの質問です。これもお一人に一言ずつ答えていただきます。

七、「民族に誇りを持つて子育てをしていらっしゃるので、とても素晴らしいと思します。子どもさんたちもそんな両親を見て、安心して韓国人としての日本を認め、のびのびとしておられるようです。私の子どものクラスにも、韓国人のお友達がいますが、子どもは本名でそのお友達を呼んでいますし、面白いことに昨日たまたま、『〇〇は韓国におうちがあるんや。毎日、韓国から飛行機と新幹線に乗つて保育園に来てるんや』と言つて笑わせてくれました。子どもにとっては国籍の違いなんて何も関係ないみたいですね。七時におうちを出られるとか。でも、それでも喜んで毎日通われるなんて、素晴らしい園なのかなと感じました。スライドを見ても楽しそうで、生き生きしていました。ただ、全て実費というのは大変だと思います。子どもさんたちのお友達ですが、園の友達とは帰宅してからはそれぞれが遠くて遊べないとと思うのですが、おうちにいるときは、おうちの近所のお友達がおられるのですか。休みの日もお友達と遊びたいと言われるんじゃないかなと思いますが……。」

「ということで、地域での子ども、それは在日の子どもであるか日本人の子どもであるかを問わず、そのあたりどうなんでしょうかというお尋ねだと思いますので、また金慶子さんからお願ひいたします。

金慶子　これは私のところは、いま通っています幼稚園からはすぐ遠いので、幼稚園の近くに住んでいるといふか京都市北区のほうには朝鮮の方がたくさん住んでいて、近くにも同じ幼稚園に通っている友達同士がいるというケースがあるんですけども、うちの場合はほとんどいないんですね。たまに

「誰々トンム」と言つて、幼稚園に通つてゐる「トンム（友達）のところに遊びに行きたい」とか、「バスを途中で降りてもいいか?」とかよく言つんですけども（笑）。まあ近所にはいないのでちょっと淋しい面はあります。でも、帰つてきて公園なんかに遊びに行つたりとか、保育園のときの友達とかが近所にいますし、あと住んでいるところのマンションのお子さんとかは普通に本名で、というか名前も家で呼んでいるように呼んでもらつて普通にさせてもらつてます。別に、日本の学校に通つてゐるからとか、朝鮮の幼稚園に通つてゐるからというのは子どもの中にはないような気がします。

ところが、小さい間は何も隔たりがなくとも、だんだんと隔たりが出てくるんですね。それはなぜなのかな、とよく思つてゐます。学校で習つてることが違つて言えば違つかも知れないんですけど。まあ同じ学校に通つていないうのと、もう一つは、だんだんわかつてくると、大きいお子さんなんかだと家でもいろんなことを聞くと思うんですよ、「あそこの子は『こんな名前や』」とか。すると小さい頃は何もなくても、だんだんそういうことが知識として頭の中に入つてくると、遠ざけるというようなことも出でますので、それは子どもに責任があるんじゃないなくて、私は大人に責任があると思うんですね、子どもさんがそういう感情を持つというのは。未だにまだそういうのが残つてゐるところはあると思います。

私たち朝鮮民族だけじゃなくて、今はいろんな外国から来ておられる方がたくさんいらっしゃいますよね。私のところのマンションにはフィリピンから來てる人も住んでらして、まさしく日本の学校にそのまま通つてゐるんですね。普通のようによく過ごして、普通のようによく学校に行つて……なんんですけど、だんだん日本の子に見えてくるんですよ、やつぱり。日本の学校に通つてて、日本人のよう。で、名前はそのままフィリピンの名前でいつてられるんです。名前が本名でいつてあるから、ではその子はちゃんとした民族心を持つてゐるのかなと思えば、そうじゃないんですよ、やつぱり。家の中では何か祀つたりと

かして、よくお香の匂いがしたりとか、そういうことをされてるみたいなんですけども、その子自身はそういうことを絶対言葉に出さないし、自分がフイリピン人であるということに対し意識がないみたいなんですね。その子はもう小学校三年なんんですけど、逆に、私のところの子どもは幼稚園なのに、自分が朝鮮人であるということを大っぴらに言うんですよ。それは保育園を途中で編入するときも、子どもたちに言うときに、「私は朝鮮の子やねん。朝鮮の言葉をしゃべる学校に行くねん。な、アメリカの、英語をしゃべる人とかいっぱいいるやん。そんな人はみんな英語をしゃべったはるやん。自分も、朝鮮人やから朝鮮語を習いに行くねん」と。

「言葉だけを習いに行くんじゃなくて、特に学校内で、文化の引き継ぎというか心の引き継ぎというのには、その民族の者しかやつぱり教えられないんですね。いくら勉強したところで、心底教えられるといふことはないと思うので。だから学校内でそういうことを学んでほしいと思っているんです。でも家庭に帰ってきて友達と接するときというのは普通です。もうほんとに友達同士で遊んでます。以上です。

仲尾 ありがとうございました。では今度は金幸代さん、お願ひいたします。

金幸代 うちも、学校や幼稚園から帰つてきたら近所の子どもたちと遊んでおります。私の町内は子どもがとても少なくて、同い年の子どもがおりません。一つずつ違つたりとか、現在四年生はいなかつたりとかで十人未満ぐらいで、子どもが少ないのでほんとにどうしたらいのかなあと悩みの種なんですね。それで私の家でも、地域の学区運動会とかには積極的に参加してるんですけど、小学生のリレーなんかでも、子どもがいなくて出場できないとかいう状態で、在日の子どもが日本人と遊んでいるということを勿論なんですが、ほんとに子どもが少ないということを実感として感じています。

休みの日はやはり近所の友達とも遊ぶのですが、そういうように同じ年の子どもがいないので、学校の友達と遊びたいから「誰々ちゃんのおうちに行きたい」とかこともありますし、お友達のお母さんと連絡を取り合って、遊びに行ったり、来たりしております。

仲尾 ありがとうございました。お一人のお話を聞いておりまして、「一つ感じた」とがござります。

一つは、やはり民族的なアイデンティティーというものは親から子に伝わっていく。親が伝えなければ伝わらないだろう、という気がいたしますね。今日のお二人のお話を聞いていたら、お二人とも、いろいろ迷われたことも含めて、子どもに朝鮮人としてのアイデンティティーを残そうというお気持ちがよく伝わりました。私たちはなかなかそういうことに気が付かないですね。私も幼児の頃からを振り返つてみると、たとえば親が日本舞踊に関心があると娘もやっぱり関心が出てくる。あるいは能や狂言、将棋に关心があれば、子どもも親と一緒に将棋をしたり、あるいは能や狂言に興味を持つていくことが多いと思うんですね。だから気が付いてないけど、やっぱり親から子に日本人としてのアイデンティティーを受け継いできた、というふうに私もいま改めて話を聞きながら思いました。ですから朝鮮民族の方が、国籍は韓国籍であれ朝鮮籍であれ、その思いを子どもに伝えたいというお気持ち、これがやっぱり民族学校へ、あるいは幼稚園へ、あるいは子どものときから朝鮮語で話しかけていくことという、何気ない家庭教育の中にその芽がまずある、というようなことを改めて感じました。

それからもう一つは、先ほど金慶子さんが言われたように、もしこの地域や子どもの世界の中で異なる民族性を持つ人々、つまり具体的には在日の方々に対してもどもが差別的な目で見たり、そういうことを言つたりするのはやっぱり大人の責任であると。日本人の大人の社会がそういうことをしているので、それがやっぱり子どもの世界に投影するのではないかということですね。そういうことの大切

さも改めて感じました。そういう点で金幸代さんが言われたように、日本の社会が変わっていく中で、在日の教育のあり方も変わっていくかも知れない、と言われたのがたいへん示唆的でございました。

あと一つ、実はご意見がきております。これは今日のテーマと直接関わりがないといふふうに本人もおっしゃってるんですが、せつかくですから紹介をさせていただきます。

一つは、「自身のご家庭の教育について書いておられるお父さんからです。

八、「私の子ども（日本人の中学一年生、男子）は、小学校五年のとき引っ越して小学校を変わったのがきっかけとなつて、ずっと不登校状態です。」この三年間、「学校でいじめがあつたのだろうか」とか、「復帰してもついていけるだろうか」とか、「中学は不登校のまま卒業できたとしても、就職できるだろうか」とか、親なりにいろいろと心配してきました。今では、子どもの人生は子どものものだし、学校だけが人生を教える人間を成長させてくれるものではないと思い、子どもが自分の内面から変化し成長するのを待とう、子どもが親の手助けを必要とするなら、人間としての、労働者としてのアイデンティティーを持つために、いつでも助けられるようにしておこうと思うようになりました。」

「こういう感想を、今日のお話を聞かれて、」のようにレポートしていただいております。

もう一つは、この方は外国人登録法の改正の問題について紹介をしていただいております。これは私も存じております、実は今から五年前に、一九九八年度中に外国人登録法をいい方向に改正しなければいけないという、そういう国会の付帯決議が付けられた改正がありまして、それがこの三月に通常国会に上程されます。そこでこの内容を紹介していただきてるんですが、ちょっと読ませていただきます。その改正の要点ですね。

九、「一、非永住者の指紋を全廃して、署名と家族事項を登録とする。永住者と同じ。」

つまり、いまの在日の方については激しい反対運動の中で指紋押捺がなくなつたんですが、それと同じように、他の非永住者の方も指紋を全廃する、と。それから一番目。

「二、永住者・特別永住者の切り替えを五年から七年に一回する。」

いま在日の方は五年なんですが、それを七年ごとの切り替えにする。それから、

「三、住所変更などの変更登録の本人申請主義を、同居の家族の代理申請を認める。」

四、永住者・特別永住者の職業・勤務先の登録を廃止する。」

いまはこういうことになつてゐるんですね。仕事を変わら、会社を変わるたびに区役所へ外国人登録の変更をしなくてはいけないということになつてゐるんです。

「五、都道府県の関与を廃止し市町村の法定受託事務へ変更する。六、登録原票の内容を本人だけでなく弁護士等へ条件付きで開示する、というものです。法務省はこれで指紋問題に決着をつけると言つてますが、在日韓国・朝鮮・中国人問題、日本の占領・戦後補償問題や外国人労働者問題がなくなるわけではありません。外国籍住民の地方参政権問題も含めた眞の内外人平等の社会をつくるのであって、国をつくるのではありません。その内外人平等社会をつくりあげるために総連も民団も、その他の運動団体も意見を交わし、統一して運動しないと、日本国法務省は外国人の中にも意見の違ひがあるとして、逃げる根拠を与えてしまいます。」

こういうご紹介をいただいております。私が思ひますのは、この外国人登録法改正問題といふのは、外国人登録法そのものが破綻してきている。それは指紋押捺の問題です。つまり、あの指紋押捺といふのは、「本人の同一性を確認するために」ということで法務省はやつてきたわけですね。ところがもう特別永住者については廃止している。ということは、指紋押捺ということだけが本人の同一性確認の手段

ではない、ということはつきりしてきているからなんです。だからそれを全廃しようというわけですね。

ところがそれで問題がないかというと、一番大きな問題は、常時携帯義務がある。ラミネートカードに写真を貼って、住所その他が記録されている。それをいつも持つていなければいけない。というのは結局、不審尋問や何かで誰何（すいか）したときに、外国人であつたらその外国人が本人であるということを確かめるために、ということなんですけど、これはやはり潜在的な犯罪者扱いであるわけですね。それが一番大きな問題。そして、この外国人登録法に違反する、たとえば登録事項の職業やなにかを今まで書くようになっていたわけですが、それをいちいち仕事を変わるたびに届出に行くのを忘れていたと、それは刑事罰の対象になるんですね。つまり前科一犯。確か一年以下の懲役もしくは禁固でしたか、それから罰金二十万円以下という非常に厳しい罰則です。特に常時掲載義務は免許証と同じように、いつもいつも二十四時間持つていなければ常時携帯義務違反で刑事罰の対象になるという非常に厳しい内容を持つてゐるんですが、その点についての改正は全然触れられていない。というところから、やはりこの外国人登録法の本来の狙いといつていい外国人の潜在的犯罪者扱い、捜査のための資料としてするという、そういう非人権的な性格は今度のこの六点の改正によつても改まらないと思うんですね。そういうところのことも含めてコメントをいただきたいと思います。

これからいろいろ新聞やテレビでも追い迫るこの問題について国会上程前後に、あるいは審議状況の中の模様が報道されていきますので、ぜひ皆さんもご関心を持っていただきたい。そういう弾圧的な法規をなくしていくことも、日本の社会を変えていく一つの大きなポイントではないかと思います。

それではちょうど時間になりました。今日は学齢前の、就学前の子どもさんの親御さんのお話を聞きましたが、次回は学齢以後、小学校・中学校の子どもさんを持たれている保護者の方の思いを、二回に

わたってお聞きする」とにいたしますので、またござつておいでください。どうも今日は長い間ご清聴ありがとうございました。

司会 ありがとうございます。今年の第六回『チョゴリときもの』は、全国在日朝鮮人教育研究協議会京都、全朝協京都と呼んでいますけど、そちらのご協力をいただいて開催しております。そちらからのご案内で、皆さんのうしろのところに案内を掲示しておりますので、お帰りの際にご覧いただけますようよろしくお願ひいたします。

次回は二月二十六日、再来週ですが、『小・中学校に通う子を持つ保護者、その1』として開催する予定でございます。これは「その1」と「その2」に分けまして、二月二十六日の「その1」では、そこの保護者であるお母さんがご出演されます。三月十二日は「その2」が開催されますが、この日はお父さん方がご出演されます。それぞれの立場でお話していただけだと思います。最初の受け付けのところに次回の受け付けの名簿がございますので、お帰りの際、またご記入いただきますようよろしくお願いします。それでは本日の一回目のフォーラムを終わらせていただきます。ありがとうございました。

第二回『小・中学校に通う子を持つ保護者、その1』

パネリスト

朴金許氏（在日三世・主婦）

福美エス氏（在日二世・主婦）

禮秀ヒビキ氏（在日一世・主婦）

コーディネーター

仲尾宏氏（京都芸術短期大学教授）

一九九九年三月二十六日実施



第二回『小・中学校に通う子を持つ保護者、その1』

第一部

司会 お待たせいたしました。それでは開催いたします。先日の『幼児と就学前の子を持つ保護者』の方のお話に続きまして、本日は『小・中学校に通う子を持つ保護者、その1』ということでお話をいただきます。本日はお母さん方の中から三人の方にお越しいただいております。まず本日のパネリストの方をご紹介しますと、まずお一人目の方が許福美（ホ・ボンミ）様でございます。その次の方が金禮秀（キム・イエス）様でございます。さらに次の方が朴姝姫（パク・ジュヒ）様でございます。コーディネーターの先生はいつもお願いしております仲尾宏様です。それでは先生、よろしくお願ひします。

仲尾 皆さん、こんにちは。今日はまだ少し後からお越しになるような気配ですけれども、できるだけ前のほうへお詰めください。今、司会の方からお話がありましたように、『子育てと学校教育』の二回目です。今日来ていたいている方々は、子どもさんがそれぞれ小学校、中学校、あるいは高校へ進まれた方であります。それで、今日の三人の方ですが、少しバラエティーがあつたほうがいいと思いまして、いわゆる民族学校へ通われている方、つまり朝鮮学園や韓国学園へ子どもを進ませている方と、それから子どもさんによつて民族学校へ行つたり日本の学校へ通わせている方、それから日本の学校へだけ通わせている方、そういうようにバランスをとりましてお越しいただきました。

それぞれのお子さまにかけた思い、それからどのようにしてそれぞれの学校で学校生活になじんでもられるか、あるいは学校と先生との関わりでどういう問題が保護者の目から見ればあるのか、そんなと

「るをお話していただこうと思つております。

最初は、一番向こうにいらっしゃる許福美さんからお話をいただきます。お話の中に出でくると思ひますが、許さんの場合はお子さんが二人とも民族学校へ行つていらっしゃるお母さん、オモニで、在日の三世の方でいらっしゃいます。それではよろしくお願ひします。



許 福美氏

許 こんにちは、よろしくお願ひします。今回『小・中学校に通う子を持つ保護者』というテーマをいただきなんですが、私自身まだ駆け出しの母親なので、勉強不足、経験不足ということもありますが、私なりの思いが皆様に伝わればと願いながら話したいと思ひます。

私は小学校二年と四年になります息子が一人います。現在、嵐山にあります京都朝鮮第一初級学校に通つています。幼稚園から通わせておりますので丸八年経ちました。日本の方々に限らず、同胞の方にもよく「なぜ朝鮮の学校に入っている」と聞かれることがあります。一言で言つてしまえば朝鮮人だからということに尽きるんですが……。八年前に私が子どもを幼稚園に入園させた時と今とでは、同じ朝鮮人だから朝鮮学校、民族教育をという考え方でも、少しずつ変化してきています。八年間という年月中で子どもたちが成長していくように、私も同じ思いのオモニたちと経験を与え合いながら、考え方を深めていっていますし、もっと子どもの教育に対して真剣にいろんな方向から考えられる様になりました。まず先に私自身のことから少しお話したいと思ひます。

私は、小学校二年生の時に朝鮮学校に編入しました。そして高校三年生までの十一年間、民族教育を受けてきました。私の出身地は鳥取県なんですが、鳥取にはもちろん、その周辺にも朝鮮の学校はあり

ませんでした。従つて私は十一年間、寄宿舎生活を送りながら朝鮮の学校で民族教育を受けてきました。当時八歳の私と十歳の兄を寄宿舎に入れてでも民族教育をという両親の思い、子育てにおいての強い信念はとても尊敬していますし、見習わなくてはならないと日々思っています。

今思えば、当時からとても京都に縁があつたのか、私は京都府舞鶴市にあります舞鶴朝鮮初中級学校に編入しました。今でも舞鶴に出発する日、私と兄を目の前に置いてボロボロと泣いていた母の姿は、目に焼きついています。母としては、私たちに対して残酷な選択をしたのでは……と悩み苦しんでいたと思います。今でこそ私も二人の子どもを持ち、この時の母の切ない気持ちも理解出来るようになります。

寄宿舎生活を送つていたので、家に帰るということは年に三回の長期のお休みの時しかありませんでした。その間に、母が恋しくて泣いたこともありますし、食事が口に合わなくて最後までずっと残つて食べたという思い出もあります。けれども、学校に行くのがいやだと両親を困らせた記憶はほとんどないんです。寂しかったということもあつたんですが、朝鮮人の私が行く学校はここしかないと思つてしまつたし、学校が遠いとか近いとかは大きな問題ではなかつたと思います。何よりもいろんな友達と朝から夜まで、兄弟のように一緒にいられるという事は、私にとって大きな喜びでした。

小学校一年生から中学校まで、本当に様々な年齢の子どもたちが、二十人、三十人と生活を共にするということは本当に難しいことです。互いに助け合いながら、思いやりを持って生活しなければ成り立つていません。一年生の子でおねしょする子もいれば、思春期を迎えてすごく難しい年齢の子ども、反抗期を迎えた子どもと様々だったんですが、大きい子は小さい子の面倒を本当によくみてました。洗濯・掃除・布団の上げ下しまで全て手伝つていましたし、小さい子たちもその人たちを慕つてましたし、誰に教わるわけでもなく、そういうことを生活の中に自然に学んでいたと思います。その時の様々な経

験が今の私の支えですし、その時に支え合った友人との絆は一生大切にしていきたいと思っています。

もちろんいろんな考え方があるて、幼い子を手放すことに反対する方もいらっしゃると思います。普通であれば、側にいて両親の愛情を一杯に受けながら育つていく大切な時期に、私たちは両親と離れ寄宿舎生活をしていました。かといって愛情不足で育つてきたとは思っていません。離れていても十分に両親の愛情を感じていましたし、何よりも朝鮮人として強く生きてほしい、民族教育をしっかりと受けほしいという愛情を子どもながらに理解し、感じていたと思います。十一年間の民族教育プラス寄宿舎生活の中で、朝鮮人としての自覚もしつかり持つことができましたし、人間としても大切なものを教えられたと感謝しています。

そんな環境で育ってきた私が結婚し、子どもを授かったわけですから、もちろん子どもには民族教育をと思っていました。幸いなことに、朝鮮学校が近くにあったので、幼稚園から入れられるのはラツキーという感じにしか思っていませんでした。当時は本当にあまりいろんなことを見ようともせず、考えもなかつたんじゃないかなと思うんです。主人は小学校五年生の時に朝鮮学校に編入して、大学まで民族教育を受けていて、しっかりと自覚を持った人です。その主人が、もちろん基本的には朝鮮学校に入れるのがいいんだけど、在日として生きていく以上、日本のこともつとよく知り、日本の友人をたくさん作るのも一つの方法じゃないのかと言って、話し合ったこともあります。でも取りあえず悩んでいるよりは前に進もうということで、やはり前に進む時に自分たちにとつて基本は何かということで、子どもたちを朝鮮学校に入れることになりました。

幼稚園での生活は朝鮮語を自然に取り入れますので、半年も経てばほとんど聞き取れる程でした。ちょうどその頃、韓国から父方の叔父、私の父の弟が初めて日本に来ることがあったんですが、もちろん日本語は全然できませんでした。私は四人兄妹で四人とも民族教育を受けていたので、叔父が来るという

ことはとても嬉しかったし、言葉の心配など何もしていませんでした。叔父は多少不安だったらしいんです。食事をしている時だつたと思いますが、叔父が息子に「オソモゴラ」と言つたんです。「オソモゴラ」とは「早く食べなさい」ということなんですねけれど、そしたら息子が間髪を容れずに「食べるやん」と言つたんです。私たちはそれを聞きながら、その会話がとても可愛くて面白くて大笑いしてしまつたんですけど、当の本人たちは何のことかでんでわからなくて、叔父に「オソモゴラ」という言葉に対して「食べるやん」と、「早く食べなさい」ということに対しても「食べるやん」とこの子が言つたんだよと言つたら、とても驚いてました。それはそうだろうなと思うんです。まだ三歳ちょっとくらいだったと思います。全く環境の違う、もちろん日本と韓国ですから、国が違い、言葉も違い、全てのものが違う者同士が、民族の言葉で会話ができるという喜びはとても大きかったです。血のつながりといえどももちろんそれも大いにあると思うんですが、いろんな悲しい過去を負いながらバラバラに暮らさなくてはならなかつた私たちが、言葉を通して家族としてのつながりを取り戻せたと思つています。

子どもが幼稚園の頃は朝鮮語をしゃべり、歌を歌う姿がただ単に可愛いという気持ちだけで見ていましたが、子どもが成長していくに伴つて、私の中でも考え方方が変わつてきました。先程も少し言いましたが、そこには主人の考え方の影響もありましたし、日本という情報社会、学歴社会の中で流されていく自分というのもあつたと思います。それとやはりいろんな先輩、友人にめぐり逢い又、恵まれたおかげで、在日朝鮮人としてどう生きていくかということを常に考えるようになりました。私たちに民族教育をと強い信念を持つていた両親は、何よりも自分たちの国の歴史、文化、言葉など何も知らないといふことを恥じていました。そして子どもたちにはそんな思いをさせたくないという願いを強く持つていました。けれども時代が変わり、民族教育を受けて育つてきた私たちが親になつた今、子どもを民族

教育を通して民族心を養うだけではなく、日本の社会に対応できる在日朝鮮人に育てていきたいと信念を持つようになりました。こう言えればちよつとかつこいいんです、現実はいつも悩み、迷い、答えを探しています。今、現在もです。

主人と話すことがあるんですが、仮に自分の子どもを日本の学校に入れていたとしても、これでいいのかと日々悩み、答えを探していましたと思います。それならば、民族教育をさせ、親同士が横のつながりをしつかり持ち、同じ立場で同じ悩みを言い合い、分かち合うことができて、子どもにとつても私たち親にとつても、幸せなことなんじやないかなという話をします。

ちょっと息子のことを話したいと思います。現在、上の息子は四年生で、下の息子は二年生なんですが、各クラスともクラスメートは十五人です。小学校の他のクラスをみても、十五人から二十人ぐらいという感じで一クラスしかないのですが、クラス替えなどはありません。よく生徒数が少ないといわれますが、もちろん多いにこしたことはありませんし、私もそう望んではいるんですが、まあそれはそんなに大きい問題ではないかなと、十五人くらいだったら先生の目も行き届いていいかなというぐらいにしか思っていません。子どもにしても、一年から六年までずっと同じクラスで、同じお友達と過ごすわけですから、とても深い関わりを持つて一人一人を理解しながら上手に付き合っています。

日本の近所の子どもたちと幼い頃はよく遊んでいたんですが、今はクラブ活動をしているということもあって、日本のお友達をたくさん作るという時間は本当になくなつて、ちょっと残念には思つているんですねが、習い事を通して今は友人を作り、行つたり来たりしているという状況です。私はもつとたくさんいてもいいのかなと思つたりもするんですが、子どもにとつては、日本の友達とか朝鮮の友達とかいうような、わだかまりは全然なく、意識もしないように思うんです。純粋な気持ちで人と人としてお互いに付き合っていますので、国籍とかそういうことは後から付いてきてるんじゃないかなと私な

りに理解しています。

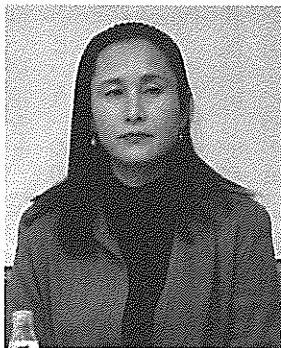
はつきり言つて、朝鮮学校全てに私は満足しているわけではありません。何よりもまずお金もかかりますし、学校としての設備も十分ではありません。親としては、もつと恵まれた環境で子どもたちを学ばせたいという気持ちもあります。けれど物質的には恵まれなくとも、それ以上にすばらしい所があると信じ、子ども達を学校に通わせていました。学校に通わせているお母さん方は、皆さんとても前向きな方が多くて、いろんな設備が整つていないうこともあって、ある時は給食のおばさんになつてみたり、学芸会といえば針仕事をしたり、ちょっとペンキが剥げてきたなどいえばペンキ塗りをしたり、バザーだといえどお店屋さん並に商品を集めてみたり、惜しみなく力を出し合い、子どもたちに少しでも良い環境をと、協力を惜しみません。全ての保護者の方々が、形はどうあれ、民族学校を守つていきたいという一つの統一した思いを持つています。

子どもを育てる上で、悩みのない母親はいないと思います。これは万国共通だと思います。私自身、欲深いと思う時があるんですが、民族学校に行かせて、これもしてあれもして、日本の友達もたくさん作つてとか思うこともあるんですが、それを意識して押しつけるんじゃなく、子どもたちが自分の中で状況に応じて対応できるように育つていってほしいと思います。そして何よりも在日朝鮮人ということを楯にとつて逃げるのではなく、在日朝鮮人ということを武器として生きていってほしいと願っています。これから子ども達が成長するにおいて、私が今想像もできないようないろんな問題が待ち受けてると思いますが、前を見て勇気を持って現実と向かっていきたいと思っています。どうもありがとうございました。

仲尾 ありがとうございました。大変あがっている、あがっているとおっしゃっていたんですが、理

路整然とお話をいただきました。

それでは一番目は、在日一世である金禮秀さんです。金さんの場合は、日本の学校へ行つてゐる子どもさんと韓国学園へ行つてらつしやる子どもさん、両方いらつしやるようですが、そのあたりのところを中心にいろいろお聞かせいただけたらと思います。よろしくお願ひします。



金 禮秀氏

金 こんにちは。ご紹介いただきました金禮秀です。本日、このような機会をいただき、今まで自分が子どもと共に過ごしてきた時間を振り返ることができるチャンスをいただきましたことを感謝いたします。最初に、私のことを簡単にお話させていただきたいと思います。

私は一九五二年、愛知県で両親のもと、一人娘として生まれました。父は、その当時大変珍しかったと思いますけれど国鉄に勤務しておりまして、その関係で通名で成長して生活しておりました。私が今まで過ごしてきた中で、自分の中での差別ということことで印象に残つておりますのは、高校二年生の頃です。アメリカでケネディ大統領になりベトナム戦争が始まつた頃ではないかと思います。クラスメートと放課後、教室で雑誌を読んでいましたら、ケネディに関する記事の中で、ベトナムへ出兵した韓国の兵士が戦死した墓前で、お母さんがひれ伏して泣いている写真があつたんです。その写真をクラスメートが見て、どうせ朝鮮人だからわあわあ泣きわめいているのだろうという発言がありました。それに対して、通名で通つていた私は言い返すことができませんでした。この度、このチャンスをいただきまして、私にとつての差別、私にとつての名前であるとか、日本人との違いで、印象深く残つてることは何だろうと思い返しましたら、今のようなことを思い出すことができました。

その後、通名を削除して本名のみで生きている夫と知り合い、結婚することになりました。私も結婚を機に本名で生きることになりました。三人の息子に恵まれまして、現在、高一と中二と小六の男の子と一緒に生活しております。「三人の子どものそれぞれのエピソード」という形でお話したいと思います。

まず、長男が幼稚園から小学校に行き始めた当時、親にとつても子どもにとつても初めての小さな集団であり、社会的な体験ということで、人と会つたり、親戚や知人と会つたりする時に、「あの人は日本人?」「あの人は朝鮮人?」という質問が度々出てくるようになりました。その都度、あの人は日本人であるとか、あの人は朝鮮人であるとかという返事をしていたんですけど、「僕は大人になつたら日本人になる?」という質問をしました。「あなたの父親も母親も朝鮮人であるから、あなたは大人になつてどうしても日本人になりたければ、戸籍上なることはできるけれども、あなたの血や民族は変わることはないと思う」というような返事をした記憶がございます。

私どもは朝鮮の名前をそのまま韓国のお音で読んでおりますので、日本人にとつてはずい分珍しい響きがあるのではないかと思います。その頃にお友達に「変な名前」と言われたということでした。たまたまその友達と私が近所で顔を合わせることがあったのですから、「お父さんが一所懸命考えた名前だから、変な名前って言わないで呼んでやつてね」と言いましたら、その相手のお子さんはとても素直に頷いてくれました。

三人の子どもが成長する中で、私もいろんな人と出会つたり、経験もさせていただきました。長男が五年、六年生の時には、担任の先生が大変真摯で熱意に満ちた方でした。やはり先生との出会いということは、学校生活、特に小学校の社会性に目覚めて多感な時期には本当に大きな存在だなど、大人に対しても信頼感を抱けるか抱けないかというのは、やはり先生の存在も大きいんじゃないかという印象が強かったです。その息子が高校の入学が決まりました時に、お友達と連れ立つてその先生に報告に行つたと

いうことは、その子にとつてその先生との出会いがずい分大きかったのではないかなという気がいたします。

それから真ん中の息子ですけれども、これはまた長男とは個性が違いまして、ずい分はつきりした子どもです。良くも悪くもストレートにいろんなことを表現してしまうものですから、小学校一年生の担任の先生はずい分手を焼かれて、すんなり言うことを聞かない子どもに映つたのではないかと思います。その先生の一年生最後の個人懇談で、私が印象に残つておりますのは、「お宅のお国の皆さんはずい分ストレートに言いたいことをおっしゃる」というような言い方をされましたので、「先生も日本人として日本の中であるとか、一方的に偏った見方をすることについて責任を負うことができるですか」と、「私は個人として見ていただきたい。そして先生という立場でやはり教育者であるならば、子どもを丸ごと引き受けることが仕事ではないのですか」というような返事をしたことがございます。

やはり子どもというのは本当に大人をよく見ていましたし、私たち大人の鏡ではないかなと思います。今、社会的にいろんな問題が出ていますけれども、子どもはストレートに反応しますし、どうして子どもがそんな風に反応しているんだらうといふようなことも、私たちもよくよく考えて、自分の中に答えを見出す必要があるのではないかと思います。

この子が三年生、四年生の時に、今度は丸ごと受け止めてくださる先生に出会うことができました。教科書の中に『さんねん峠』という韓国の民話が載つておりまして、その『さんねん峠』を音楽劇のようなものに仕立てることで、先生もずい分熱心に指導してくださいました。たまたま自分のクラスに韓国の人たちがいるということで、現在の日本で使われている同じ音の単語などを私どものほうにもお尋ねいたたり、それをまた学校の通信などに出していくなどチャンスがありました。そうしましたら保護者の方から、なぜそんなに朝鮮のことばかりやるのかといふような反発があつたというよ

なことも聞いております。

最後の息子は今現在、小学校六年生です。クラスの中で子どもが喧嘩の時に、これは最近の出来事なんですか? うちの子どもに向かって相手の子どもから、「朝鮮人」「韓国人」という言葉が出たということなんですね。それに対してうちの子は、「そ、うや。そ、うなんや」とそのまま肯定してしまったんですね。ですが? それでも、その場にいてくださいました担任の先生が、言つた子どもに対して「なぜ君は、ヒヨン(息子の名前)は隠してもいいし、いつも韓国人だとむしろエバッテルくらいなのに、韓国人だという言葉を喧嘩の中で使つたんだ」という問い合わせをしてくださいました。そうしたら、相手のお子さんが少し時間をあけてよくよく考えて、「韓国人という言葉を喧嘩の中で使つたのには差別の気持ちがあつたと思う」という答えを出してくれました。ですから、今大変にイジメとかいわれますけれども、問い合わせ返す時間というようなことを、私たちはなかなか家庭生活や子どもへの対応の中に取ることができません。先生の側でも、「自分自身にも子どもにも親にも、問い合わせ返す時間とかゆとりというのが大いに大切なかな?」と思います。喧嘩の内容云々ではなくて、子どもに問い合わせをしていただいた先生の深さというものを尊敬いたします。

この六年生の息子に、最近私は、「自分のことが好きか」という質問をいたしました。そうしましたらその子は、「好きでなかつたら生きてられへんやん」と言つたんですね。その言葉に私はとても深い感動を得ました。私たちが朝鮮人・韓国人に生まれて、名前はたまたま朝鮮人・韓国人という呼び方が、今は国事情で違いますけれども民族は一つです。ですから、これから私たちが何を大切に生きていいくのか、今私たちがここにある意義と意味を考え、そして大事に生きていきたいと思つております。
私たちもが韓国名で生きていくことは、私にとって内なる自分を大切にして、説明書きのいらぬ私であります。ですから、日本の名前を使つたり、韓国の名前を使つたりということ

ではなくて、私は一人しかいないし、私どもの息子も世界に一人ずつしかいないから、自分が好きな自分になることができるよう努めていきたいなと思っております。以上です。

仲尾 ありがとうございました。また後の質問の中で補足していただきたいと思います。

それでは最後、三番目の方は朴姉妹さんです。やはり在日二世の方で、朴さんの場合は子どもさんお三人ですが、三人共日本の学校へ行かせていらっしゃいます。それではよろしくお願ひします。



朴 姉妹氏

朴 こんにちは。ただいまご紹介いただきました朴姉妹と申します。

私の家族は、日常生活は金光という通名で生活しております。今回、このお話を引き受けるにあたりまして、前回の方のお話と今日の二人のお話を伺って、生まれ育った環境によって、在日としての生き方とか考え方というのは本当に様々であるということ、そして拙いながら私たちの今までの経験において、自分の子どもに良いと思う教育方針に従つてそれぞれの家庭が子育てをなさつているということ、そしてまた私たち親の生き方や考え方というのが、これからのお子様の人生にも大きく関わっていくということから、今改めて親としての責任を感じております。

それで少し、私自身のことをお話しします。私もそういう意味では親の影響をたくさん受けておりました。私は田舎で育つておりまして、私の両親は結婚を機に京都府下の小さな田舎町で生活を築きましたが、特にまた田舎でしたので、同じように一世で韓国籍の方という方は三軒か四軒しかいられません。本当にいろんな意味で苦労をして、辛い思いもしたようでした。

それでも私たち子どもに対しても両親がいつも申しましたことは、人と人との関わりというのは、その人の人生や、その人自身がどう生きていき、どう考えていくかということが大切であつて、最終的には人間性であるということでした。だから国籍のことに関するでは、人生を過ごせばわかるだろうが、私の両親にとつては後々にすればさほど大きな問題ではないといふうに申しておりました。

私の両親は若くて亡くなりました。その時に、私は四人兄弟の長女で、一番下の弟が小学校四年生、その次が六年生で、妹が中学二年生でした。私はその時十九歳でしたが、両親が言いました意味が、私たち子どもがその土地で成長していく間に、身を持つてその意味を知る事となります。私たちが成長する間、本当に周りの方に温かく見守られて、親切にもしていただきました。私たち兄弟がどうしてこんなに周りの方に大切にされるのかなとふと考えてみると、それはやはり、両親がその土地に生活を築き上げてきた大きなものがそこにはあつたと思います。それが多分、私たち子どもに返ってきていたのだと思うんです。ですから、今まで言い聞かされていた両親の言葉の意味というのを、両親が亡くなつて初めて、私たち自身が身を持つて感じました。

話は余談になりますが、その当時、私の両親が亡くなりました時に、お葬式は韓国式で出したんですね。おそらくその時代に韓国の風習でお葬式を出されることは、ほとんど地元の方にとつては初めてのことだつたと思います。そういうことも全て含めて、その田舎町で私たち兄弟みんな、周りの方にいろいろ温かくしていただきました。

成長していく過程で、在日韓国人であるということで全く差別されなかつたかというとそうではなくて、兄弟それぞれが一度や二度は国籍のことで嫌な思いもしたこともあつたようです。でも、私たち兄弟は、親の教えもありまして、何か気持ちの中に自信というものがあつたんですね。ですから、そういうことにこだわつて、差別をされているというふうな受け止め方をしたという記憶がほとんどありません

ん。周りの方との接し方など、心の財産というか、両親が残してくれたものの大きさというのを、すごく私たち自身が感じ取つて生活することができます。

私の主人は、中学は韓国学園に三年間行ってそちらで教育を受けまして、それ以外の小学校と高校は日本の学校で教育を受けております。そして私自身は、ずっと小学校から日本の学校で教育を受けておられます。もちろん、主人も私も韓国籍であることはオープンにした上で生活しております、それは自然体として受け止めておりました。

今現在、三人の子どもがおりまして、一番下が小学校五年生で、その上が中学一年生、そして一番上の女の子が高校一年生です。私は京都市の西院に住んでおりますので、下の二人は西院学区の公立の学校に通っております。西院学区というのは、もともと在日の方がたくさんいらっしゃいまして、子どもが就学するにあたって、韓国人だからということで差別的なことがあつたり、何か問題があるかもしれませんといふうなことを、前もつて子どもに言い聞かせたりといふようなことは一切いたしませんでした。それはどうしてかと言いますと、生まれた時からずっと、幼稚園もそうなんですが、私たちの生活そのものが韓国人であるということは、周りにはオープンにしておりましたので、改めて小学校に通うからといってそういう教育をする必要はありませんでしたし、もしも何かそういう問題が子どもたちの上で起こったとしても、子ども自身がどの程度精神的に成長している年代でそういう問題が起ころるかは全くわかりませんし、まして、そういうことを本人自身が何も感じないで成長するかもわかりませんので、それはその時にもし問題が起これば解決すればいいんじゃないかというくらいの認識しか持つておりませんでした。

それで、小学校の男の子と中学生の男の子に関しましては、公立の学校に通つております、授業の中でも歴史的な背景とか韓国と日本の関わりについては勉強してきますので、そういうことが予めわかつ

ている時には、本人が韓国を紹介したいという気持ちがすごくありますて、韓国のお金であつたり韓国のことのことを紹介できるような資料があれば、進んで子どもたちも持つて行つておりますし、友達に何か自分が知つている範囲内のことで聞かれることがあれば、教えてあげたりもしているようです。そういう面では、子どもの気持ちの中に自然にいろんなことが受け入れられているようですが、国籍に関して、今まで自分が韓国人であるからということで悩んだということは、一切今のところ聞いておりません。友達との関係でもそういうことはオープンにしておりますので、韓国のことを見かれて、子どもも自然に受け答えができるという状態で接しております。

逆に、高学年になりまして歴史的なことを勉強した時に、学校の先生のほうがすごく気を使つてくれまするということがあります。例えば勉強してきましたら、その夜に必ず先生から、「今日、実は学校でこういうふうなことで日本と韓国のこと勉強したんですけども、子どもさんはお家に帰つて何かおつしやつていましたか」というようなお電話をいただくんですね。それで、子どもに確認しましたら、子どもの意識の中ではどうだったのかと聞きますと、「今日はそういうことを学校で勉強してきたよ。でも、僕は今の時代を生きているんだから。先生が気にしていらっしゃるのは、差別的なこととかでしょ」と言つんですね。「うん、それも含まれていてかもしれないけど」と申しましたら、「もしも今度聞かれたら、先生にそんなことは何も心配しなくていいよと言つておいて」というふうに、サラッとした感じで答えております。

先生たちが神経質になられるのには、やはり家庭によって、韓国籍であるということを子どもには絶対言わないので欲しいというふうにおっしゃる方も、実際いらっしゃるようです。ですから、私のところのようにオープンにしておりますと、逆に先生のほうから「どういうふうに対処したらいいのかな」と、こちらが相談を受けることがあるんです。けれども、それはそれぞれのお家の考え方があつてしていらっしゃ

しゃることですので、先生としてもそういう場合どう接していいのかということは、すぐ悩まれているという状態ですし、考えてみるとそれは大変な問題だなと思つております。

そして今、高校に通つております娘ですが、小学校の四年生の終わりか五年生の初め頃で、友達との関係が上手くいかなかつた時に、娘はミキというんですが、「ミキちゃん、韓国人のくせに。韓国なんかまだ電気も通つてないし、遅れた国でしょ」というふうなことを友達に言われたらしいです。私の娘は、おばあちゃんに連れられて韓国のほうには何度か行つておりまして、韓国の様子そのものをよく自分の目で見て知つておりましたので、その時どう受け答えをしたかと申しますと、性格もちょっと勝気なもので、「私が韓国人であなたに何か迷惑をかけたことがある？」それに韓国に行つてみたこともないのに、そんなこと言つてたら……。今なんか日本も韓国も変わらない生活をしているし、ホテルなんか京都にあるよりもっとすごいものもあるし、知らないことを勝手に言わないでちょうどいい」というふうに言つたらいいんです。娘がそういうふうに言えたということは、やはり母に韓国に何度も連れて行つてもらつていて、自分が自分の国のことを見つけていたから、そういうことも相手に対しても言つうことができたと思ひます。

娘が最後にどう話を締めくくつたかと申しますと、まだ年齢的にも幼くて国際的という言葉はまだ本には思い付かなかつたらしくて、「こんな世界的な時代に、日本人や、韓国人やと言つてたら、あなたこれから時代に遅れるよ」というふうに言つたらいいんです。それを聞きました時に私は、主人も私も子どもに対して、例えはそういうことがあつた時にはこう受け答えをしなさいというようなことは一切言つたことがないのに、わが娘はすごいなというふうに思いました。その年齢でもそういう受け答えできたということは、今一緒におります主人の母もずっと民団と婦人会の組織の仕事をしておりますので、子どもたちも幼い時からずっとそういう姿も見ておりますので、やはりそれが言葉に表さなくても、そ

う言えるだけの子どもの自信につながっているんだなどいうふうに、改めて親として感じることもできました。

高校一年生になります現在まで、国籍のことはどうこうと友達から言われる」とはずっとなくて、「この間、「お母さん、今日は困ったわ」と言つて帰ってきたんです。「どうしたの」と聞きますと、学校でスポーツのこととか、オリンピックのことをクラスで話をしていたら、ある友達に、「ミキチヤン、あなた韓国人だったら、韓国と日本、オリンピックどっちを応援しているの?」と聞かれたらしいんです。その時に、さすがに娘も返事に困りまして、しばらく考えて、「うん、まあ、それはその時の状態によるからわからない」と言つたらしいんですけども、私はその話を娘から聞きました時に、すぐ微笑ましいなと思つたんです。そう言つた方の友達も受け止めるほうの私の娘も、自然に受け答えできるような状態であるということ、今あの子たちの年代では、もうそういうことが自然に受け答えできるような関係になつてているんだなということを、改めて親として知ることができました。

そういう意味では、義務教育の間に子どもたちは歴史的な流れやいろいろなことを勉強するんですが、日本の子どもも在日の子どもも同じ時間だけ、同じ条件で勉強して知識を得ておりますので、どちらの子どもも認識の程度は同じなんですね。ですから、大人が考える以上に、子ども同士は付き合い方が上手だなと思っております。やはりそういう面では、大人も見習わなくてはいけないところがたくさんあるんじゃないかなと思つております。そしてやはり、こういう問題の場合、娘の例を見てみましても、相手に要求するばかりじゃなくて、受け止める方側の気持ちとか接し方というのもすごく大切だと思います。その接し方によつて、相手の関わり方もずいぶん変わつてくると思ひます。

私の家の場合は、在日韓国人であるということは、自然体で家族が受け止めることができます。先日も子どもに、最近でしたら帰化さ

れる方もたくさんいらっしゃいますので、そういう話をしましたら、私の子どもは二人共、「僕たちは韓国籍のままで、これからもずっとこのままいい」と申しておりました。

今の世界的な情勢をみましても、民族紛争や宗教的なこと、食糧難で苦しんでいらっしゃる国とか様々ありますけれども、日本の国というのは、必要以上の贅沢を求めなければ衣食住に不自由することはありませんし、治安も安定していますし、そういう意味では平和な国です。ですから、情報も平等に豊かにみんな与えられておりまますし、いろいろな意味で、私たち在日であっても選択肢も広いと思うんですね。現実に就職問題などはなかなかスムーズに行かないこともあります。でも、本人の努力によって、それを勝ち取っている人たちがいるのも現実ですし、私の従兄弟の中にも、韓国籍のままで日本の企業に就職している者も何人かあります。そういう面では、周りの環境も少しずつ、いろいろなことが受け入れられる時代になりつつあると思います。そして、やはりそれぞれ私たちが自分の人生のために、前向きに努力してたくましく生きていくということを、私たち自身もまた自分の子どもにも、そうあって欲しいと願っています。

最後に、母からいつも言われる事ですが、我が家は民族教育はまず家庭からと思つております。どうもありがとうございました。

仲尾 ありがとうございました。お二人それぞれ在日の母親、オモニとして、それなりの緊張感を持つて子どもさん方の子育てにあたつておられること、そしてまたそれが非常にすばらしい成果を收めつつあるといいますか、すばらしい子どもさん方に育つていかれているということを、実感として感じさせられたように私は思いました。

後ほど皆さんから、いろんな感想やご意見をいただきたいんですが、少し時間がありますので、私が

皆さん方のご質問をいただき前に、お三人の方に少しだけ付け加えていただきたいことがあります。と言いますのは、民族的なアイデンティティーというのは、やはり名前と言葉とそして文化ということによって伝わっていくと思いますし、それが特に家庭の中で大事だということがあると思うんですね。名前の問題はともかく、まず言葉の問題ですが、日本語が基本的に通用しているこの日本社会の中で、「家庭でそれぞれ母国の言葉をどの程度使っていらっしゃるか、あるいは子どもさんが意識的に話をうとされているかいなか、そのあたりのところを少しお聞かせいただければと思います。まず、許さんからお願ひできますか。

許 私の子どもの場合は民族学校に行っていますので、言葉はもしかしたら私たちより上手だと思うんですが、私も十一年間民族教育を受けてきましたけれど、使わないどんどんしゃべれなくなるというのが現実で、日々の生活の中では、単語としてボロボロ出ることはあるんですが、八割方日本語でしゃべっています。学校ではもちろん、朝鮮語で会話をしますし、授業も朝鮮語で行っていますので、そういうことをあまり家庭の中では意識したことはありません。

仲尾 はい、ありがとうございました。では、金さん、お願ひします。

金 私自身が日本の中でも教育を受けて、改めて韓国語、母国語というものをきちんと勉強しておりますせんが、生まれた時から、アッパというのは多分父ちゃん、オンマというのは母ちゃんというような意味だと思うんですけども、子どもたちは父親母親に対してアッパ、オンマと、そういう呼び名で呼んでおります。それから本当に単語だけですね、食べ物であつたり。上の息子は韓国学園の中学を卒業して、

中二の息子は今現在通学しておりますけれども、本当に少しずつ習つてもなかなか三年間では身に付かないですが、とっかかりになつて、今度下の息子も中学に入つて勉強するわけですけれども、私なんかよりももう少ししかりと勉強してほしいと思いますし、私自身も自分のために学ぶ必要というのは感じております。

仲尾 ありがとうございました。じゃあ、朴さん、お願ひします。

朴 私の家では、日常、母は韓国語をしゃべりますが、普段の生活はほとんど日本語です。子どもたちはほとんど理解しておりません。それと私自身は、聞き取るのは大体の意味はわかるんですけども、残念ながらしゃべることはあまりできません。でも主人の方は、私よりも聞くのもしゃべるのもすい分上手だと思いますけれども、子どもたちはほとんどわかつてないようです。

仲尾 わかりました。ありがとうございます。それではもう一つ、ついでにですけれども、日本の学校へ子どもさんを進めてらつしやる金さんと朴さんですが、そのことについては戸惑いはございませんでしたでしょうか。どちらからでも……。

金 どういう面でのことでしょうが。

仲尾 つまり日本の学校へ行かせようか、韓国学園へ行かせようかという時の決断ですね。

金 いま現在、中二の息子が韓国学園へ行つていて、四月から行く下の息子も、やはり一生において韓国人として生きていく中で、歴史と言葉を学ぶチャンスとして現在行つてある子と、これから行こうとする子がいると思います。それで、韓国学園に行つての生活を見ていると、伸び伸びしているなどいう印象を大変強く持ります。ですから、その中の甘えであつたりとかもあるのかもしれませんけれども、同胞だからという甘えばかりではなくて、やはりそういう体験をして、自分の成長の中での意識づくりの上ではいいのではないかという気がします。

日本の学校に対しては、さつき十分に説明がいかなかつたんですけれども、歴史の授業の中で、担任の先生によつてずい分歴史の教え方に差があるのではないかという印象を、三人の息子たちの成長を見て感じました。国によつて事実についての認識がずい分違うし、その先生の勉強の仕方であるとか、歴史に対するところの方について、伝え方がずい分違うなどという印象が強くあります。

仲尾 ありがとうございました。それでは、朴さん、お願ひします。

朴 私の家では、主人は中学は韓国学校に通いましたが、子どもたちを就学させるにあたりまして、どちらの学校にするかということは、正直に言いまして悩みませんでした。自然と、特に下の男の子一人に関しましては、やはり地元の子どもとたくさんの方達ができる関わっていくのがいいというふうに最初から思つておりましたので、そういう意味で地元の学校に通わせて良かつたと思つております。

仲尾 ありがとうございました。私があらかじめ確かめるというような意味もありまして、少しお考えを聞いたんですが、後は皆さん方から今までと同じように自由にご質問を出していただいて、それを

お三方にまたお答えいただくという形でのセッションを続けたいと思います。それでは、今からご質問を書いていただぐこと兼休憩ということで、何分まで取りましょうか。

司会　ええと、三時十分位……。

仲尾　では、三時十分までに質問をお書き込みいただくこと、並びに休憩、そしてその整理の時間とさせていただきます。それでは三時十分頃に、もう一度ここへお戻りください。

司会　今、先生のほうから言われましたように、手元に「ざいます」意見、あるいは「質問用紙を、この箱をこちらの方に置いておきますので、休憩の間にお入れください。それを基にしまして、第一部で質疑応答に移りたいと思います。それではよろしくお願ひします。

第一部

質疑応答

司会　大変お待たせいたしました。それでは先程から皆さまから「ざいました」意見、「質問用紙を基にしまして、第一部の質疑応答に移りたいと思います。先生、よろしくお願ひします。

仲尾　長らくお待たせしました。今回はどういうわけか、質問の出方のスピードが遅かつたもので、それをお待ちしていたのと整理で少し時間が遅れました。全部で六人の方から「質問並びに」感想をい

ただいております。最初に、ご感想だけのものをご紹介させていただきます。

一、「三人の方のお話、大変力強いものであると思いました。特に、金さんがおっしゃった『説明書きのない自分でありたい』という言葉が印象に残っています。誰もが、一人一人全員が説明書きのない自分でいることのできる地域を作つていきたいのです。」

「こういうご感想です。これについては、金禮秀さん、ご感想を含めて何かおっしゃりたいことがあるしたら……。」

金 「説明書きのない自分」というのは、私自身が自分に問い合わせたい、そして子どもたちにも伝えたいなど思うところではあります。人間と人間が出会つた時に、使い分けをしないということを、日本人と会つたからこうする、韓国人と会つたからこうする、他の国の人と会つたからこうするではなくて、やはり自分であることの意味と、自分が胸を張つて生きられる私になるために生きていきたいと思っております。

仲尾 ありがとうございます。その次は、言葉の学習の問題についてのご感想です。これは特に質問ではないんですが、読み上げますので、三人の方々、この方に対しても意見やご感想があれば、おっしゃつていただけたらと思います。読み上げます。

二、「日本に生きる在日の方々にとって、母国語の必要性をあまり感じない方もおられるかも知れないが、やはり言葉は命であり、自分のアイデンティティーを探る時にも、言葉は大いに助けとなると思

う。私は、昨年の四月からハングルを学び始めた。言語の学習を通して、韓国の習慣、文化などにも興味を持つようになつた。日本人の私がそうであるなら、ましてや民族の血が流れている在日の方々にとつて、母国語の学習は大きな意味があるに違いない。家庭教育の中で、子どもたちに言葉を学ぶ大切さを教えてあげてください。そして誇らかに日本人の子どもたちに、韓国・朝鮮語がどんなものであるかを伝えられる人になつて欲しいと願う。」

「こういうご感想兼ご意見です。先程も少し申し上げましたけれども、今の日本社会は、在日の方が一言も母國の言葉を知らなくとも生きていける社会に、よかれ悪しかれなつていています。よかれ悪しかれという表現もおかしいんですけれども、とにかくそういう社会であることは間違いない。そういう中で、言葉の学習を積極的にやろうというのは、それなりの意気込みと言いますが、あるいは努力がなければ、なかなかできないということもわかりながらのことでの申し上げたいんですが、三人の方、もしこのことについてご意見、ご感想がありましたら、一言ずつおっしゃっていただけますでしょうか。

許 今ちょっと聞きながら、子どもがお習字を習いに行つていて、そこでの出来事を思い出しましたのでお話をしたいと思います。お習字に行つたら、漢字で名前を書きますよね。うちの子は、キム・タカヒデと書いてキム・リュンスと読むんですけど、お友達が「タカヒデ君」と呼ぶから、「ぼくの名前はリュンスです」と、朝鮮語での読み方を教えたんですね。そしたらその子が、「すごいね。かつこいいね」と言つて、自分の名前も是非、朝鮮読みにしてくれと言つたそんなんです。小さい時からリュンスで通していますから、本人には違和感はなかつたんですけど、そういう反応をされたのがとても嬉しくて誇らしかつたのか、勇んで帰つてきて、とにかくこの名前を朝鮮語で読んでくれと言つたことがありました。息子にとつて朝鮮語が話せるという事は特別の事ではなく、生活の中で「く当たり前の事となつ

てると思ひます。

仲尾 ありがとうございます。それじゃ、金さん。

金 このいただいたメッセージは、私自身へのメッセージだと思って、受けとめたいと思っております。

仲尾 ありがとうございます。では、朴さんどうぞ。

朴 私も金さんと同じで、ある程度聞き取りができるんだったら、本当は私も話すことができればいいなどいうふうに思いますし、またこれからも機会があれば、そういうふうにしていきたいと思います。そしてまた子ども自身も、これから成長していく間に自分で自分の母国語をしゃべりたいという意識が出てきましたら、また学ぶ機会もたくさんあると思いますので、それは子どもたちの成長を見守っていただきたいと思っています。

仲尾 ありがとうございました。言葉の学習の場合は、先程のご意見を書いていたいただいた方にあるようには、一つは自発性といいますか、やろうというご自身の意思ですから、子どもさんが成長していく中で、学習の機会を見つけられることがあるかと思います。最近は、テレビ、ラジオ、それからいろんな教科書、小さなサークルや塾のようなところも含めて、朝鮮語・韓国語を勉強できる機会が少しづつ増えてきました。大学のほうでも、少しづつ朝鮮語の講座を増やすところが増えてきています。私の

大学で申しますと、今から六年前に作りました。先生は必ず在日の方になつていただいていますが、そこへやはり在日の学生がやつて来まして、今まで通名できていて全然言葉をしらなかつたけれども、韓国人・朝鮮人として生きねばならないことははつきりしているんだから学ばないとだめだと。朝鮮語を今からでもよろしいですかということで、クラスに入つてきた学生がおります。そういう訳ですから、必ずしも家庭、あるいは小学校の中で、無理やりに子どもさんに教えるということじゃなくても、先程も朴さんがおつしやつたように、家庭の中での何らかの民族教育があれば、子どもさん自身が自然に目覚めるということもあるかもしれません。そういうことも含めて、私も大変素晴らしいメッセージをいただいただと思ひます。どうもありがとうございます。

その次の質問です。

三、「民族学校では、保護者のネットワーク、例えばPTA活動はどのような仕組みになつてているのですか。」

こういう質問です。これは、PTAの仕組みだけではなくて、どんな取り組みがあつて、大変うまくなつていてるとか、こういうことがネットワークだと、そういうことを含めてお話しただけたらと思います。これもやはり朴さんからお願いします。

許 私は今、京都朝鮮第二初級学校に通つていますけれど、京都には第一、第二、第三と小学校とあります。他の学校ではどのようにされているのかといふことはよくわからないんですが、私どもの学校では、日本の学校で言えばPTAですが、それを私たちオモニ（母親）会と呼んでいまして、各クラスから二名ずつ出て、幼稚園もありますので、そちらからも二名、計十四人の役員で活動しています。

私自身も、幼稚園と小学校との役員をかれこれ五年ぐらい務めたことがありますので、オモニ会に入つてから、民族学校をよりよく知ることもできましたし、活動内容も深く理解し、積極的に意見も出せる様になりました。

仲尾 ありがとうございます。今、第一の「」経験ですが、連合会のようなもので、京都の三校あるいは四校を含めての「」活動もなさつてはいるわけでしょうか。

許 役員さんたち、会長、副会長が各学校から集まって、自分たちの経験を話し合うところもあります。

仲尾 その場合ですね、父親（アボジ）たちはあまり参加しませんか。

許 主に理事という形でお父さん方は活動されていると思います。オモニ会の会長、副会長になりますと理事会にも参加するらしいんですが、私は参加したことがないので、具体的にどういうふうにアボジたちが動いているのかと聞かれてもちよつとよくわからないんですが、オモニ会だからオモニ達だけ参加してるのでなく、アボジ達の理解があつて初めてオモニ達が活動出来てると思います。

仲尾 はい。それでは次に韓国学園のほうで、金さん、「」存知のところを教えてください。

金 韓国学園ではもちろんPTA活動はあります。私も以前、日本の小学校の中で育友会活動をさせ

ていただいた経験から比較してみると、ずい分密度の濃いものではないかと思います。バザーであつたり、コーラスであつたり、お母さん同士の絆を、韓国学園に子どもを通わせていることによつて、なかなか韓国人同士が会話をすることや場を持つことができないのを、学校に来ることによつて、お母さん同士が絆を深めているのかなという印象を持つております。私自身も、子どもの小学校のPTA育友会活動の本部役員というのをさせていただきまして、日本のお母さんというのはおかしいんですけども、そこで知り合えたたくさんの方たちと、いい体験、感激するような体験を通して、本当にたくさんの方を貸していただけましたことは、私自身が社会的成長の力と経験にもなつたと思います。

仲尾 ありがとうございます。先程、控室でお話を伺つたんですが、朴さんは西院地域の日本の学校へ子どもさんを通わせておられます。PTAの役員もなさつておられるようです。日本の学校で、在日としてというよりも親として参加されているわけですが、そこでのご活動のご感想、あるいはPTAの中で在日に対して日本人の親たちがどのように見ているか、そんなことももしありましたら合わせて教えてください。

朴 私は、先程おっしゃったように、今、西院の小学校でPTAの役をさせていただいて、「これで五年になります。最初のほうは本部の役をさせていただきました。別に役員をしておる上で、子どもたちに関わる事では、在日であるからどうこうというような日常的な問題はなくて、ただ同和問題としていろいろな形で取り組むということはありました。他の方の中にも、やはり在日の方で役引き受けている方は、西院の場合は、本部の中でもそれ以外の役の中でもたくさんいらっしゃいますし、それは皆さん同じような条件で協力し合つてやつております。

そしてまた私の場合は、そういう役をしていらっしゃる方に家に来ていただいてお話をすることもあるんですが、そんな時には、子どもがいないお昼の時間帯でしたら、韓国料理で手軽にできるものがあれば、それを皆食べながらお話をしたりというふうな交流も持っております。そういう時は、ほとんど韓国料理を紹介するというような形で、今でしたらチヂミ（韓国風のお好焼き）を焼いたり、トック（韓国風のお雑煮）をして食べたり、また今は韓国ラーメンというのが子どもたちの間でもずい分人気がありますし、それを親のほうも作って、「一度食べてみて」というような形で紹介してみたりしています。

別に韓国人であるとか、日本人であるとかという隔たりなく、自分たちがお互いに持つていて紹介しあえるものは、自然にお互いが受け入れているというような感じになつております。

仲尾 ありがとうございました。実は、私は多少意外だつたんです。というのは、在日の方々が日本の学校でP.T.Aの役員になられるということは、あまりないんじゃないかと思つていたんですが、今お聞きしますと、かなりたくさんの方が、特に西院の場合は参加されている。もう一つの集住地区である南区あたりではどうかなというようなことは、またの機会にお聞きしたいと思つておりますが、いずれにしても、そういう地域社会、あるいは学校というところで、在日の方々が、在日として日本社会の一部に参画されてご活動されているということは、これから共に生きる社会を作つていく上で、大変大切な役割を担われているんじゃないかという気がいたしました。

それでは、次の質問に進めさせていただきます。

四、「日本の公立学校について。比較的プラス評価の5が多かつたのですが、マイナス評価の5、悪口を聞かせてください。要望でも結構です。」

、こういうご質問です。どなたからでも結構ですが、これは個人的な先生の悪口ということじやなくて、要するに日本の学校でもうとこういうことがあってもいいんじゃないかと、そういうご要望を聞かせていただきたいというふうに受け取りまして、率直にお聞かせいただけたらと思います。どなたからでも結構です。どうぞ。

金 今、いろんなところで一般的に言われていますが、やはり人数が多いことであるとか、先生が忙しそぎることであるとか、それから総体評価によつてその子を判断する通知表の在り方というのもあると思います。親の側もやはり、通知表を一過性のものとして見ないで、通知表によつて親の機嫌が良くなつたり悪くなつたりといふこともあるのではないかという気がいたします。やはり何よりも、先生が忙しすぎることと、子どもが忙しすぎることと、親もそうでしょうし、人間が育つ、人が育つということは、ずい分時間がかかることだなあというのを私自身実感しておりますので……。本当に今、いろんな意味でいい機会ではないかと思いますので、たくさん見直していただきたいと思います。具体的には言えませんけれども。

子どもがいろんな面で反発したり荒れるというのは、当たり前のことではないかという気がいたします。あの中に飲み込まれていつたら、生きていられなくなると感じる子が出てきても当然のような気がします。

仲尾 というご感想です。朴さんはいかがでしようか。

朴 先程も公立の学校でもその地域によってずい分先生たちの対応が違うといふこともお伺いしまし

たが、西院の場合は、やはり在日の方もたくさんいらっしゃるということもあると思ひますし、それと私たちが韓国籍であるということをオープンにしておりますので、いろんな意味で、先生たちの率直な意見もお聞きすることができます。私たちがそういう形をとつていてることで、逆に先生たちはいろんな話をしやすいというふうな感じを受けるんですね。ですから、どうでしょう。今のところマイナス評価というようなことを、子どもが通学している間も感じ取つたことはありません。いろんな意味で行き届いているというふうに思つております。たまたま担任を持つてくださった先生がそうだったからかもわかりませんが、いろんなフォローを目に見えないところでもしてくださつているような気がしますし、実際に子どもたち自身が、そのことで今のところ悩みを持つていてるということがないので、学校側にどうこうどうふうに、今のところ感じたことはありません。

仲尾 ありがとうございます。許さん、地域で日本の子どもたち、許さんのお子さんのところに遊びに来ている子どもたちを見ていて、何か日本の学校教育についての感想のようなことがありますから、おっしゃつてください。

許 別にありません。

仲尾 そうですか。で、この問題については、まだまだ深めねばならない個々の問題は多數あると思うんですが、またもう一度、次回、同じく小学校から高校までのお子さんを持つ親御さんにパネラーとして来ていただきますので、その時にまた少し深めることができたらと思います。

その次は、実はかなり難題であります。ちょっと読み上げてみます。

五、「今、日本の社会では、学校、特に中学でのイジメ問題が、社会でのネットとしてクローズアップされている。また、国会をはじめ種々の教育行政の面でも、国をあげての大きな悩みの種となっている。」自身が民族学校に、またお子さんも民族学校に行つておられる許福美さんに主とてお伺いしたが、民族学校でもイジメ問題は存在するのか。もし、イジメ問題がほとんど民族学校には存在しないのなら、日本のマスクミあたりに、在日の民族学校にはイジメがないのに反して、なぜ日本の社会はこの問題で悩んでいるのか、というようなことを討論の種にする姿勢を示してほしい。」

これはまあ、マスクミに対する要望であります。ありがとうございます。

「」こらあたりは、仲尾先生のご意見などもお願いしたい。私の考えだが、日本でもイジメ問題がクローズアップされているのは、大都会、およびその周辺のベッドタウンの学校だと思つ。朴姝姫さんのお話だつたが、京都府下の小さな町に育たれ、イジメ問題はほとんどなかつたように聞いた。そうするとやはり、故郷を思う気持ちの欠如が、日本の学校教育の欠点になつてゐるのではないか。この辺についても、仲尾先生を中心にご意見を聞きたい。」

「」いうお尋ねでござります。私の感想を申し上げる前に、具体的に許さんと朴さんに対するご質問でもありますし、韓国学園のこととも金さんからお聞きしてもいいと思いますので、今の質問の大の方の主旨をくみ取つていただいて、」感想、」意見をおつしやつてください。

許 イジメといふことなんですか、もちろん子どもの中にはある種の遊びといふか、今日はこの子にちょっとこんなことを言ってみたりとか、そういうことはあるかもしれません、日本全国に朝鮮の学校はありますけれど、他の学校はどうなのかという実態ははつきりわかりませんので、私の子どもが通つています学校のことで言つならば、学校をあげて問題になるようなイジメは今のところありません

ん。もちろん、人数が少ないと、いろいろあるのかもしれません、私が常に新聞等でイジメの問題が出る度に考えることは、私たちの民族性で、年上の人を尊敬するという事を、生活の中で自然に学んできています。特別に躊躇しているわけではないですが、それは本当に残っていると思います。

私の主人で言いますと、結婚してもう十二年ぐらいになるんですが、いまだに私の実家の父の前では煙草も吸いませんし、お酒を飲む時も面と向かって飲まないで、横を向いてバツとビールを飲むという感じです。そんなことしなくてもいいのに水臭い、と思う方もいらっしゃるかもしれません、やはりそういうふうに育つてありますので、子どもたちも両親を尊敬するという気持ちはとても強いと思います。そしてそういうことも、子どもたちを育てるにおいては、とても大切なことではないかと思います。

学校を見てみましても、自分の子一人を育てているという感じじやなくて、保護者の方は皆を育てているという感覚をすごく持っていると思います。あるお母さんが、「一人だけいい子は育たない。賢い子も育たなければ、天才も育たない」と思う。十五人いれば十五人が競つてこそ、いい子が生まれるんじやないか」とおっしゃったお母さんがいて、ああそうだなと私も思いました。やはり、そういう思いを皆がそれぞれ持つてるので、例えば学校にふと行つた時に、素通りして挨拶もしない子がいたら、「挨拶は? こういう時はちゃんと挨拶するでしょ」と教えますし、よその子だから叱らないということは本当にありません。家に遊びに来ても、悪いことをした時は叱ります。

子どもたちにも皆で育つてているという意識がありますので、誰かを特別いじめるということもあります。ですから、そんな大きな問題は今のところは出でていないと思いますし、今こういう保護者の考え方であれば、イジメという大きな問題は出でこないんじゃないかなと私なりに思っています。

仲尾 ありがとうございます。では、金さん、お願ひします。

金 「韓国学校では」というふうに言われますと、自分の子どもが果していじめているのか、いじめられているのか、喧嘩などは度々、毎日のようにしてきているようですし、わからないですけれども、日本の学校のように根深く陰湿なというものは多分ないと思います。今、お話を聞いていて感じたんですけども、やはり親がよく学校に行っていること、それから文化祭やバザーなんかにも、本当にお母さんたちが惜しまずによく働きます。そういうことで、子どもに対して田も届きますし、声もよく掛けます。やはり朝鮮のお母さんやお父さんというのは、子どもにとつてはちょっと怖い存在、叱つて当たり前。逆に、どこまでしたら叱られるのかなというので、子どもが親を試しているような気もいたします。ですから、親が子どもに対しても自分たちに對しても何をしていいのか、何をしたらいけないのかというような規範といいますか、決まりみたいなものが培われたらいいなと思います。そういうものが日本の学校や社会よりは、まだ残っているのではないかと思います。

仲尾 ありがとうございます。朴姝姫さん、子どもの頃のご経験、あるいはお父様のご経験なども含めてありましたら、おっしゃってください。

朴 先程も少しお話ししましたが、田舎町というのは、最初に両親が行きました時には、本当に在日の方が少なかつたもので、例えば買い物に行つてもちゃんと売つてもらえないとか、いろんなことがあってもそこから外されてしまうとか、やはり少ない中ですごく孤独感を味わつたこともありますし、それは大変な思いがあつたようです。でも、いま振り返つてみると、逆に田舎だから良かったというの

は、その町に溶け込んでしまいますと、私の両親の様に生活の基盤がそこできちんと築き上げられると、都会と違つて受入れられやすいという面がすごくあると思います。ですから、私たちが育つていく間にあまりイメージがなかつたというのは、やはり両親が築き上げた生活の上で私たちが成長をしていくことができたから、あまりそういう経験がなかつたということもありますし、子どもたちがいろんな意味で自信を持つて生きしていくようにという教育を両親がしてくれたからだと思います。最初は両親は、そういう立場で地元に住みましたけれども、何十年と生活している間に、逆に頼られる立場になつて行きました。そして、私たち兄弟は皆、比較的ものをハツキリ言う性格でしたので、学校に行つている間でも、兄弟は仕切るのが上手というか、好きというような性格で、学校の中でもほとんど学級委員をしているというふうな状態で、兄弟四人が学生生活を過ごしました。ですから、逆に受け入れられれば受け入れられやすいし、住みやすいのかもしれないなというふうには感じました。

仲尾 ありがとうございました。そういうわけで、今、お話を聞いておりますと、民族学校は少人数であるということと、一つは先生の目が行き届きやすいということがある。目が行き届くということは丁寧な指導ができるということ、それからもう一つは、家庭教育の在り方。そしてもう一つは、親御さんが学校への愛着を持つておられて、非常に学校に参画されていることが多いということ。それから、地域性の問題があるかもしれませんけれども、先程のお話を聞いていても、今のお話を聞いていましても、朴さんの場合でも、親御さんの学校への関わりが非常に度合いが高い。そういうところから、子どもへの目配り、子どもが学校でどういう状況に置かれているのか、あるいは子どもが親に学校での状況をきちんと伝えているかどうか、そういうところが行き届いているのではないかという感想を持ちました。

私自身は、小・中・高の現場を持つたことはありませんし、教育学方面の専門家ではないので、何もお答えする資格はないんですねが、教師の一人として思いますが、まず第一に、先生が子どもに心を開いているかどうかと。これは非常に大きな差が出てくると思います。大学でも同じなんですね。大学だから講義だけしていればいいというものではないと私は思っています。やはり教師というのは、見方を変えれば一つの権力のわけです。その権力性を自分の中でできるだけ外して、そして一人の人間として一人一人の学生に向か合うということが大切だと私は思っておりまますし、できるだけそのように努めているつもりですけれども、そういうことは小学校でも中学、高校でも同じことなんじゃないか、と思っています。

それから二番目には、先程から何人かの方がおっしゃっていますように、やはり子どもの世界というのは、大人の世界の反映であるということは間違いないと思います。そういう意味では、親が子どもの心をどのようにつなげているか、ということが問われているんじゃないかな。よく、家庭で何も問題のない子が、学校でとんでもないイジメの対象になっているというようなことも聞きます。ですからそういう点で、実際には子どもを見ているようで見ていない親が多いのではないかということ、これが第二のイジメ問題の要因ではないかと思います。

第三はですね、やはり日本の社会の中では横一列主義と言いますか、集団主義と言いますか、仲間外れが怖い。これは特に、会社なんかに入るとそういうことになるわけですが、そういうふうな集団意識が、少し変わった子、皆とは少し考えが違った子、あるいはそういう行動をする子に対するイジメという形で出てくるんじゃないだろうか。自分がそれに加担しないと、自分自身が頼りなく思われる、あるいはいじめられるほうに回ってしまうという恐怖心ですね、そういうものがあるのではないかと思います。しかしあ昨今、日本の企業社会もそういったやり方の行き詰まりが指摘されてきております。

そういう中で、今本当に日本社会自体が大きく変わらないと、こういった子どもの世界のイジメの問題が解決しないんじやないかと、そういう危機意識だけは私も持っております。

都会と田舎との関係などについては、私は何ともお答え申しようがありません。はつきり言つてよくわかりませんけれども、いずれにしても、これは非常に大きな課題でありますから、特に民族的マイノリティである在日の方々や、その他の外国籍の子どもさんを日本の学校は迎えているわけですから、それがそういったイジメにつながらない形で、問題が解決していくことを心から願わざにはおられません。そういうことで私に対するご質問は勘弁させていただきます。

最後にご感想があります。これについて、まとめの意味で、お三人の方々から一言ずつおつしやつていただきまして、今日の会を終わりたいと思います。読み上げます。

六、「三人さんとも素晴らしい話を聞かせていただきました。皆さん、自分に自信を持った生き方をされているので、子どもたちも素晴らしい子どもさんに成長されているのだと思います。皆さん、その毅然とした態度や、その強さはどこから来るのですか。いろいろ悩まれたりした経験や、民族に対する誇りから生まれたのでしょうか。大まかな質問ですが、教えてください。金さんの、先生が子どもに与える影響の大きさの話は特に印象的でした。」

「こういう意見兼ご質問です。それぞれ三人の方、一言ずつでも結構ですから、今のご質問に対してもお答えいただけだらと思います。まずは許さんからお願ひします。

許　まだまだ私はもつと強いオモニになりたいと思ってるので、自分がそういうふうに思つたことはあんまりないんですけど、やはり民族心というものをとても持つてゐることは確かですし、そのよ

うに育ててくれた両親にとても感謝しています。人としてやはり自分のことをよく知るということが、自分の自信にもつながっていくと思います。自分に自信が持ててこそ周りもよく見え、一人一人を認めていくことができるんじやいかなと思います。そういう意味では、もっともつと自分に自信をつけていきたいと思いますし、子どもを育てながら子どもを通して、例えば今日のようなこういう考えてもいかつた経験をさせていただいて、これでまた一つ強くなれたかなと思っています。このような場に出られて、とても幸せだったと思っています。

仲尾 ありがとうございました。それでは、金禮秀さん、よろしくお願ひします。

金 これは夫の言葉なんですけれども、子どもたちに、この日本に在日の韓国人として、マイノリティーとして、選ばれて生まれている自覚を持つてほしいと思います。韓国に生まれた韓国人ではなくて、日本に生まれた少数派の韓国人として自覚を持つて生きるというのは、私自身の課題でもあります。私の三人の子どもたちが、それぞれに小学校の時に、素晴らしい先生と巡り会えたことは、人間に対しての信頼、そして大人に対する信頼、多分これは日本の社会に対しての信頼になつたのではないかと思います。先生という職業を選んでいらっしゃる方々は、自信を持ってプロ意識で教壇に立つていただきとを強く望みます。

仲尾 ありがとうございました。それでは最後に朴さん、よろしくお願ひします。

朴 私も今一緒に生活しております母の後ろ姿を見て、そしてまた私たち親の後ろ姿を見て、子ども

たちは成長しております。もちろん、韓国人としてどうあるべきかということも大切なことです。でもそれは、これから子どもたちが成長する上において、子どもたち自身がいろいろなことを体験しながら、人ととの関わりも自分たちなりに吸収していくながら、韓国人として、また一人の人間として、どう生きていくかということが大事なことだと思つております。

民族的なことは、例えば言葉のことからいろいろございますが、言葉のことにして民族意識にしても、やはり家庭で教えられる範囲内のこととは、子どもたちのためにも教育をしていきたいと思つていまし、これから子どもたちが成長する上で、まだまだ先生たちとの関わりもたくさん、いろんな意味で持つことと思います。たまたま私の場合は、子どもたち三人が、学校の先生との関わりもスムーズにいきこ事ができます。韓国人としてそれを自然体で受け止めて、今、成長している過程です。ですから、そういう気持ちをこれからも自分たち自身が大切に持つて力強く、この日本の国でこれから先どういう道を選択していくかはわかりませんが、たくましく生きていくてほしいと思つております。

仲尾 ありがとうございました。三人三様に思いを述べていただきましたので、私がまとめる必要もありません。この三人の方の最後のお言葉を、私たち日本人がどのように受けとめるかということがこれから課題かと思います。

次回は、実はパネラーは一人とも男性、アボジたちをお招きしております。というのは、前回、今回と共に、今までお母さん、オモニたちばかりでした。やはり、男性がどのように関わっておられるか、つまり子どもさんの学校教育についての思いが、お父さんとしてどうであるかというところを、この次にたっぷりと聞かせていただこうと思いますので、次回も是非、お誘い合わせの上、お集まりください。それでは今日のセッションはこれで終わらせていただきます。どうもありがとうございました。

司会 ありがとうございました。次回は三月十一日、このパート2ということで、同じテーマで開催いたします。同じ「」の場所で二時からですので、まだの方はお申込みの上、またお越しください。本日はどうもありがとうございました。

第三回『小・中学校に通う子を持つ保護者、その2』

パネリスト

白金 明石 氏
(在日三世・団体役員)

吉雲 氏
(在日二世・司法書士)

コーディネーター

仲尾 宏氏
(京都芸術短期大学教授)

一九九九年三月十二日実施

第三回『小・中学校に通う子を持つ保護者、その2』

第一部

司会 お待たせしました。前回の『小・中学校に通う子を持つ保護者、その1』に続きまして、今日は『その2』についてお話をさせます。本日は、前回のお母さん方に代わりまして、お父さん方にお越しいただいております。本日のパネリストは、まずお一人目の方が金明石（キム・ミヨンソク）様でいらっしゃいます。金明石様は、在日三世の方です。お二人目の方が白吉雲（ペク・キルウン）様です。白吉雲様は、在日一世の方です。それでは早速始めさせていただきます。先生、よろしくお願ひします。

仲尾 皆さん、こんにちは。前回に続きましてたくさんお越しいただき、ありがとうございます。いま、司会のさんから説明がありましたように、今までオモニパワーでしたので、今回はアボジパワーで行こうといふことで、お父さん一人に来ていただきました。それでは、早速始めさせていただきます。お手元に配りました資料については、お一人の話が終わりました後で少し説明をさせていただきます。

それではまず、在日の三世でいらっしゃいます金明石さんからお願ひいたします。

金 金明石と申します。紹介になりましたように、私は在日三世です。ハラボジ（祖父）・ハラモニ（祖母）が、今から八十年前、一九一九年の時に日本に来まして、私は大阪で生まれました。連れ合いは名古屋出身なんですが、こちらも三世で、子どもが三人おります。中学一年生と小学校五年



金 明石氏

生と二年生の三人です。女の子、女の子、男の子という形になつております。大学は京都の立命館大学、二年浪人しまして八年行きましたけれども、卒業はできませんでした。今でも、「領収書はどないした」というふうに、連れ合いからかわれております。仕事は、豊中で

学習塾を自営していて、数学の教師です。

今日は、子どもに民族名のみを付けた理由ということで、まず最初にお話したいと思います。三人の子どもに民族名だけを付けました。一番上がサリヨン、二番目がカリヨン、三番目がキヨンと言います。漢字で言うと、サリヨンというのは、サはさんずい扁に少ない（沙）と書きます。リヨンはおう扁に命令の令（玲）です。そういうふうな形で漢字があります。こんな名前を付けたんですけど、名前を付けるのはなかなか大変なんです。

私が考えたのは、漢字が暗くなくて画数が少なくて、日本語読みがなかなかしづらい、それから韓国語読みが割合きれいな、そういう漢字で名前を付けたんですけど、日本と違いまして、韓国は漢字一文字に読みが一つしかないんです。そうすると、すごく限られるんです。日本は、一つの漢字でいろんな読み方がありますから、それでいろんなバラエティーができるんですが……。ですから、中国とか韓国とかいうのは、難しい漢字がいっぱいあるんじゃないかと思つてしまふくらい、漢字で名前を付けるというのはすごく苦労しました。一人目は簡単にできただんですけど、二人目、三人目は非常に苦労しました。

そういうふうに通名でなくして名前を付けた理由は、私自身の小さい頃の民族差別の体験というのが大きいだろうと思います。といつても私は三世ですし、親は二世で、親を見てもほとんど日本人と変わらないわけですし、大学まで行かせてもらつたように比較的に裕福などところで育ちましたから、面と向かっ

ての差別体験というのは本当にないんです。三世の一つの特徴かもしませんけれども。ただ、やはり小学校の頃に、親しい友達が私にじゃなくて、囃し歌というのが昔あつて、「……チヨーセンの山奥で確かに聞こえるブタの声 ブー ブー ブーブー」というような、こんな歌を歌つて朝鮮人を馬鹿にするというような子どもはたくさんいました。

私の名前はキム・ミヨンソク（金明石）ですが、母親は一世ですから、このミヨンソク（明石）の「石」の一字を取りましてアキラという名前を私に付けました。通名カネダ・アキラと言います。今は全然使つてないですけれども……。それから私はかなりイシ（意思）が弱くなつたんじゃないかなと思っています（笑）。

ですから、日本人の振りをして隠れて、絶対に出してはいけない、出したらこんなにいじめられるんだという、そういう恐怖感は非常にありました。だからそういうのは一切、友達にも言わなかつた。

ただ、どうしても駄目な時があつたんです。健康保険証を病院に出す時です。まだその当時は、本名しか駄目だつたんです。ですから、本名をその時だけは呼ばれるんです。キンさんと呼ばれるんです。それが恐くて恐くて仕方がなかつた。ですから、いつも窓口の横に立つているんです、すぐに答えられるように。中学一年生の時、私はリュウマチ熱という病気になりまして、6ヶ月入院しました。ベッドの枕もとの名札は、やはり本名で書いてありました。いつもそこにタオルを掛けるんです。自分を隠さないといけない、それが私自身の被差別体験なんです。高校時代にも、親しい友達に自分の出自を言えなかつたんです。親友になれなかつた、作れなかつたです。そういう体験がありました。

それから大学に入りましたが、立命館大学といふのはいい大学で、本名しか認めなかつたんです。仕方なく本名で大学に入りました。その中にもサークルがあります。韓国学生同盟とか韓国文化研究会というところなんですけれど、そこで在日の友達の中にいると何かとてもスーッとするというのがあつた

んです。それから本名を名乗つて生きていいくという形になりました。

あともう一つ、先輩なんですけれども、その頃から、子どもを本名で育てる、学校に本名で行かせる、民族名という意味なんですかけれども、そういう人たちがそろそろ出てきました。民団系の話なんですねけれどもね。総連系の人達は民族学校があつて以前からされていましたが、民団系ではほとんどなかつたんです。それが少しづつ出てきまして、先輩の中にもそういう方がいらつしゃつた。だから、自分の子どもが生れた時には、本名というか民族名だけを付けようという気持ちを持つことができました。自分からではなくて、そういうことがあつたからというふうに思います。

あともう一つには、お話ししていくちょっとわかつたかもしませんけれども、私は、自分自身が自分のことを差別していたんです。自分のことを差別していたという加害意識というのは、やつと大学時代に持つことができるようになりました。私は、小さい時に人にものを教えるのは好きだったので、教師になりたいと思いました。でも、物心付く六年生、中学生くらいになると、もうそれは駄目なんだとかきらめてしましました。自分であきらめさせたわけです。朝鮮人、韓国人は教師にはなれない。医者になるか、それがいやなら家業のスクラップ業を手伝いなさい、これしか選択肢がなかつたんです。それを自分に言い聞かせる。でも、そんなことはないんですよ。弁護士になることもできたわけです。公務員になろうと思えばできたかもしれない。自分で自分を、できないんだ、できないんだということで、差別していました。これが大事なところなんです。そこで子どもには自分に対する加害者にはなつてほしくない、自分のありのままを認めてほしい、そういうようなことが願いとしてありました。

自分を隠したり、自分がこういうことしかできない、そういうふうに自分の可能性を狭めない。そういう願いがあるんです。自分を認めて、それを楽しんでもらいたいというような気持ちを持つています。最近好きな言葉ができまして、「この世は自分を見つけにきたところ」という言葉です。生まれてきて、

自分が一体何者か、自分がどういうふうにするのかというのを見つけていたいなど、子どもにも見つけてほしいと思つております。

その次に、私の家の民族教育のことについてお話をします。どういうふうな民族教育をしているかといふことなんですけれども、私自身の子育ての基本といふのは、信頼と自立といふところにおいています。これは、新聞で見たんですけれども、あるお母さんがこんなことをおっしゃっていました。「むやみに物を与えない」「なるべく何でも自分でさせる」「距離を置くけれども不安にはさせない」、これは、自立ということを強調していく、しかも信頼関係も持っていくというよくなことに重きを置いているという点で、すごく参考になつて、小さい子どもと接する機会がわりと多いので、自分でそういうふうにしたいと思つております。

民族教育のほうは、そういうことも含めて、九二年、今から七年前から二年に一度、韓国へ家族旅行をしています。これは、自分の国といふか、韓国を好きになつてもらいたいという気持ちがすごく強いからです。向こうへ行きますと、ロッテワールドへ行つたり、買い物に行つたりという、まあそういうたわいもないことなんですけれども、すごく向こうの人たちが親切にしてくれる。だから余計に嬉しくなつて、行きたいという感じであります。そういうことが民族教育になるんじやないかと思つております。

それから後は、私の連れ合いがチャンゴ（打楽器）をやつたりしますので、それを教えたり、ハングルを少し教えたり、ノレ（歌）を教えたりといふことは、家庭内でしております。やはり、子どもたちはもう四世ですから、韓国人的な部分といふのは非常に小さくなつてきてますので、そこを攻撃されると困るんですね。小さすぎて、対抗できない。ある程度、対抗できる程度には大きくしたいと思うのが、民族教育で私の考へている大事な点の一つです。

その他にも、各種の民族交流会に参加したりといふようなことを、家庭ではやつています。私自身、大阪府の韓国民団福島支部の支團長をしております。そういうこともあるんですけれども、教育というのは、地域としての民族教育というのも非常に大切なんですね。すぐ近くにじいちゃん、ばあちゃんがいて、子どもたちがいる。そういうような意味で民族教育というので、民団支部ではいろいろな子どもたち用の催し物をやつております。クリスマス会とか、サマーキャンプとかにできるだけ参加してもらっています。

後は、学校教育に対する私なりの意見というのを、ちょっと言いたいと思います。一番上の中学一年生の子が小学校四年生の時ですから、今から四年近く前にあつたことなんですけれど、彼女が隣のクラスの男の子と喧嘩した時に、最後に言わされたのが、「何や、韓国人のくせに」という言葉だつたんです。私は、それを聞いて、涙がボロボロ出てしましました。

親二人は三世で、私の親なんかは例えばPTAでも、会費を他の人が十口だつたら二十口、三十口出します。教師につけ届けしたりもしていました。町内会でも、できるだけいろんなことをやる。そういうことで、子どもが差別されないようにと、親がすごく守っているわけです。そして、できるだけ大人しく大人しくして。私の母親は、子どもに本名を付ける時に、民族名だけを付けることに本当に反対しました。なんでそんなややこしいのを付けるんだ、というふうに。私たち自身は、「面と向かって本当に差別をされたことがない。それが子どもには、本名を付けた、民族名を付けているということで、面と向かって「何や、韓国人のくせに」と、大きいツラをするなと言いたいのかもしれません。そういうことを言われた時に、非常に心が痛んだんすけれども、本人自身は、家庭で民族教育をやつているといふこともありますて、言い返すことができるんですね。「何、一体、韓国人のどこがわるいんねん」と、言いい返すことができるんです。だから、彼女自身は傷付いてはいないんですけども、私自身は傷付きま

した。

これは去年のことですけれども、一番下の子が学校から泣いて帰つてきました。「キムチ、キムチ言うて馬鹿にすんねん。僕が韓国人やと思って馬鹿にする」。この子はすぐやさしい子ですが、ただ言葉が少し遅いんですよね。二年生なのに、一年生の複数の子にいじめられて帰つてきて、親に涙を見せたいけないということで、別の部屋に行つて泣いていました。おかしいな、どないしたのかな、今日帰るのが遅かつたしなと思い、見に行つたらボトボト、ボトボト……と涙を流していました。今、大阪市立の中学校と、小学校に入れておりますが、そこでそういうことがありました。

実は、私たち夫婦は、そういうことが多分あるだらうということで、一番上の子が小学校一年生に入る時には、前もつて校長先生に、「こうこうこういう形で、うちの四世の子が入ります。民族名だけを名乗っています。それについて何か対策を練つてほしい。また、学習会をしてほしい」というような要望をしました。私自身は、仕事が学習塾という夜の仕事で昼間は空きますので、できるだけ学習参観とか各種行事には参加しました。団地に住んでいますので、団地でもできるだけ他の子どもたちと一緒に遊んだりしています。民族名だけで子どもを入れているわけですから、そういう親の責任としてやつています。

また、一番上の子が中学に入った時も、学校始まつて以来の本名の子どもということで、大分気を使つていただきました。その学校がいろいろ問題がある学校で、新聞沙汰になつたこともあります。私もちょっと心配しまして、私自身がPTAの実行委員長になるというようなこともやつていました。できるだけ子どもを守らなければならぬというふうに思つているんです。そんなふうにしていても、子どもの問題は出でます。そういうことで、学校での民族教育というのを願うわけです。ただ、大阪のほうでは、民族学級とか民族クラブとかが公立のほうでありまして、民族教育促進協議会とか、在日

コリアン人権協会というところが講師を派遣して、民族学級の中ではいろんなアイデンティティに結び付くような活動をしております。

そういう中で、私自身も子どもたちも日本人的な部分も大きいなと思いますし、韓国人の部分もあるなと思っています。両方の部分がある、いわゆるダブルという感覚を、私自身が持ちたいと思っているんです。二世の方である私たちの先輩たちは、わりと自分のことを考える時に、アイデンティティ的に、自分は日本人でもないし韓国人でもない。どちらでもない、一体何者なのか。そういう辛さを持っていたと思うんです。私はどちらも認めよう、それがごく自然なんだ。でも韓国人の部分はなかなか学校教育ではできないし、家庭や地域社会というところ全体で育てていかないといけないなと思っています。

だから、アイデンティティを確立じゃなくて確かめる。いろんなアイデンティティがついていいんです。というのは、民族的な自分らしさということですから、いろんな考え方の人がいていいと思います。私は韓国人だ、三世であろうが四世であろうが韓国人だ、朝鮮人だと言う人がいても勿論いいですし、いや私はほとんど日本人だという人がいてもいいだろうと思います。ただ、否定してほしくないんです。私は日本人だという人も、出自はあるんですから、それは否定してほしくない、それも認めてほしいなどいうふうに思っています。そういうことが学校教育の中で保障されればなど、ある意味で在日外国人に対して、その外国人も自分たちの社会の一員であるという思いで、責任のある形でそういう教育がなされればいいなというふうに思っています。ちょっと大分時間が経ちましてすみません。ありがとうございました。

仲尾 ありがとうございました。子どもさんを日本の学校に行かせているだけではなくて、お父さん

自身も、PTAや地域でいろんなことをなさっているということを強く感じました。それではもうお一方、白吉雲さんにお願いいたします。在日一世の方でございまして、一世ですが、先程お話を聞いていると、一九六〇年生まれというお若いお父さんです。よろしくお願ひします。



白 吉雲氏

白 アンニョンハシムニカ。実は、僕はこの場に今日で二回目になります。前回は、阪神淡路大震災のその後だったと思うんですけど、どういう内容でお話したのかは、資料を見ないと記憶にありません。毎日忙しくしているもので、三日前に何をしていたかも覚えていませんで、予定表を見ないとわからない程、忙しくしていたのですみません。それで二回目になるんですけれども、二回もずうずうしくすみません。

私の子どもは全部、嵐山のほうにある京都朝鮮第二初級学校に入れております。上の子は現時点では四年生です。そして次の子が二年生です。三番目が京都朝鮮第二初級学校の附属幼稚園に行っています。その三番目も今年から一年生になります。三人共、朝鮮学校に通わせているわけです。

テーマが『子育てと学校教育』となっていますが、私はアボジ（父）としては失格じゃないかなと思うんです。と言いますのは、一応司法書士という法律関係の仕事をやりながら、同時に在日朝鮮人の財産権とか生活権とかを、全国ネットワークで研究をやっております。それと同時に、人権の立場から民族教育を考えたいということで、そういう研究活動もやっていまして、あまり家にはいないんです。ですから、先程のキムさんのように地域の子どもとか、自分の子どもとも触れ合いが持てなくて、そういう意味では失格のアボジだと思つんです。ただ私は、少しでも社会的環境を良くしたいなということで、

研究活動のほうに自分の三十代のエネルギーを注いできたわけなんです。

私が個人的に思うのは、やはり朝鮮民族として誇りを持つて堂々と、心豊かに生きるという点が、我々全ての在日朝鮮人に少し不足していたんじゃないかということです。ですから私は、最近、一つに誇りを持つこと、二つ目に堂々と、三番目に心豊かに生きる、これ朝鮮語では「トツトシサラカンド」と言うんですけど、そういうふうに訴えているんです。

北海道から九州まで、ほぼ日本全国制覇しましたけれども、そこでいろんな方と、いろんな層の方と、日本社会もそうですけれど、日本人の人も一概に日本人で同じとは言えないほどに多様化しています。ですから、日本人としてのいろんな多様化された生き方があるように、日本に住む朝鮮人もいろんな多様化した考え方があるんです。そこでいろいろな方の話を聞き、学び、質問も受ける。そういう中で、この四、五年の間私は、日本人とは何か、朝鮮人とは何かということを考えたわけなんです。

私たちは司法書士として京都司法書士会に、弁護士の場合は京都弁護士会に、法律で強制加入になるんですね。そこで、いろんな日本の司法書士の方と一緒に、人権擁護活動とか無料相談とか、そういう場に、可能な限り積極的に参加させてもらっています。そのうちに、日本社会とか、日本人が抱いていた悩みとかもある程度理解できましたし、日本人とは一体何なのかを考えたわけなんです。それは結局、裏を返せば、朝鮮人とはということと答えは一緒じゃないのかなと思ったんです。私が思ったのには、大きく二つの要素があるんじゃないかなと思います。

一つは、これはよく在日朝鮮人の前で言うんですけど、日本人とは何か。それは歴史の上に成り立つ社会的存在である。決してアメリカナイズされていない。アメリカナイズされた現象が一部には見られるけれども、そうではない。言語・歴史・風習等の文化的、総合的教養の育成、蓄積がある。我々も同じだ。住んでいる場所は関係ない。まして昔と違って情報化社会、インターネットの社会、そ

ういう情報化・コンピュータ化の社会ですから、地理的概念はあまり関係ない。そして文字通り国際化の中で、朝鮮人は朝鮮人で日本人と同じように、言語・歴史・風習等の文化的、総合的教養の育成、蓄積が必要ではないかと思うわけです。そしてこれが朝鮮人の体であると思うんです。

母国語や朝鮮の歴史、近代朝鮮民族の歴史や、文化を正しく学ぶことが大切だと思います。これは何も復興主義ではないんです。昔のものが全ていいというような。ですから私は、個人的には一世が全て民族心豊かだとは思いません。逆に我々は、現代的、近代的と言いましょうか、情報化の中での民族的素地というか要素を培つていて、体系的教育も受けてきました。私は、小学校から高校までが兵庫県で朝鮮学校に通いました。大学だけは立命館大学経済学部の二部夜間でお世話になつたんですが、我々も絶えず母国語や朝鮮の歴史、近代朝鮮民族の歴史、文化などを正しく学ぶ必要があると思うんです。

そしてこれだけでは駄目だと。やはり、服が必要だ。人間は裸では暮らせません。そこで、日本に住む朝鮮人の服が必要だと。高度に発達した日本社会で、朝鮮人として生活し、活躍していくために、日本語、日本の常識、産業技術と言いましょうか科学・文化的知識の育成、蓄積が必要ではないか、これが日本に住む朝鮮人の服である。ですから在日朝鮮人は、体と服の二つの要素が必要であるというふうに思います。

このように私がお話ししたところ、大多数の在日朝鮮人の方、特にお母さん方、お父さん方から支持を得ました。「そうだ。何か今までモヤモヤしていたことを、白さんがある程度まとめてくれた」というふうに言われたんですけども、そういう意味で、朝鮮人の体と日本に住む朝鮮人の服、この二つの要素を絶えず育てる、蓄積が必要です。

今、日本人の人もそういう問題が起きているんですよ。海外日本人の問題ですね。ビジネスマンが海外へ行きます。子どもが五歳頃から海外で育つて、十八歳くらいで帰つてきたら、日本国内で育つたのと

はちょっと違っている、そういう問題もあるんです。ですから、これは在日朝鮮人だけの問題ではないんです。皆さんにも起こりうることですよ。皆さんのお息子さんが企業に勤めて、結婚されて、三十歳で例えば海外に行かれて、その子どもが二歳から十五年くらい海外にいたら、十七歳になつて帰つてくるということですね。そしたら日本人としてのいわゆる民族として少し変わつてくる。……、日本人は民族という言葉を使うと右翼と勘違いされるんでちょっと危険なんですが、別に右翼ではないんをご理解ください。日本人はあまり民族という言葉を使わないので、私も使いたくないんすけれど、日本人としてのそういう問題が出てきているんです。そういう悩みがよく新聞に出ていて、帰国された子どもたちの心理的問題のカウンセラーが必要だと出ています。そういうことから、別に我々在日朝鮮人だけの問題ではないと思うわけなんです。

そういう意味で、私は子どもを朝鮮学校に行かせているんです。実際、良かつたなど今でも思っています。もちろん問題点として、今、財政的に苦しいし、朝鮮学校を支えている在日朝鮮人たちの経済的負担というのは非常に大きいのですが、このお話は後ほどにします。父親失格の私が言えば家内から怒られるかもしれません、私は個人的にいいなと思うわけなんです。

私のオモニは武士の娘のようなオモニとして、何か間違つたことをしたら、江戸時代の武士の娘のように、ハチマキをして剣を持つて敵が来たらパチンと殺すような、そんな感じのオモニとして、そういう意味では厳しかった。厳しいというよりも鋭かつたようです。小さい時に言わっていました。「お前たちは、朝鮮のことと日本のこと、二つ勉強しないといけないよ」と。近所に、日本学校に行つている朝鮮の子がいます。トンネと言いまして、朝鮮部落があつたんです。今日、三十年以上過ぎたので大分変わつてなくなっています。私が育つたところもいわゆる小さな朝鮮人部落（トンネ）でしたが、そこで日本学校に行つている子もいました。だから小さい時に、「いいなあ、君らは日本の一つだけ勉強したら

いいけど、僕らは二つ勉強せなあかんから、しんどいわ」と、小学校ながら何も知らずにしゃべってたんですけども、大きくなつて、特に今の司法書士という法律関係の仕事をするようになりまして、自分は良かったと親に感謝し、また、朝鮮学校を支えてくれたいろいろな同胞の方とか、日本の友人に感謝するようになりました。

去年の秋頃ですか、私の子どもが行つてある京都朝鮮第一初級学校の授業参観に行つて、後ろでずっと見ていました、「国際化、国際化と言われているので、なかなか朝鮮学校つて面白いぞ」と思いました。というのは、小さいけれどキラリと光る学校と言いましょうか、それで日本語と朝鮮語二つ使って、これはなかなか面白いぞと。要するに、朝鮮学校は日本社会の一つの肯定的面の現れじゃないのか、寛容性と言いましょうか、総合的に認めるというような面で、これは在日朝鮮人も民族教育の認識を新たにしないと駄目だぞと、なかなか面白い存在になるんじゃないのかなと思つたわけなんです。

現に出でてきているんです、日本人で。最近、私の子どもが行つてある第一初級学校で、日本人を招待して、いわゆる公開授業とか座談会を、私が知つてはいるだけでも一回やりました。そして、今年の二月にあつた学芸会のことですが、日本学校では今どういう言ひ方をしてはいるのかわかりませんが、朝鮮学校では学芸会という言ひ方をしています。そこに松尾小学校の子どもたちも来まして、最初は朝鮮学校の全生徒が朝鮮の歌を歌つて、一曲目の時は松尾小学校は数がちょっと多いので六年生だけで、「この木なんの木」という日立のスポンサーの時に流れてはいる、あの歌を合唱していました。ああ、これはいいな。そうすると国際性も身に付くし、この朝鮮学校の校長先生はなかなか面白いことをするなと思いました。冗談ながら「提供は日立です」ということで、財政的に援助をしてもらつたらどうですか」とアボジたちの間で言つていました。こういうふうにやるものなかなか面白いなど感じました。

そして、最近、朝鮮学校・民族学校のために活動してくれてゐる日本人の人も非常に増えていまして、

朝鮮学校をよく理解している人が多いんです。全国的に見まして。そしてその中から、「日本人の子どもは朝鮮学校に行かせられないか」という質問が出たんで、朝鮮学校の先生方はびっくりしました。高校まで朝鮮の学校へ行つても、皆さんご存知だと思いますが、受験資格がないのは国立大学だけですよね。立命館、同志社はあります。公立もほぼ半分以上あるんです。だから高校まで朝鮮学校を出ても、日本の大学へ十分に入れるんです。それで、日本の親の人が子どもを朝鮮学校に入れようかなと。何故かと聞きましたら、ちょっと前に私の尊敬する長い間朝鮮学校で教師をしておられたシ・ソンジ先生という方とお話をしていたんですけど、朝鮮学校を訪ねてくれた日本人の人は全て共通的なことを一つおっしゃるんです。「懐かしい」と。これはどういう意味なのか。二つ目は、「親が一所懸命だ。それが羨ましい」と言つうんです。

私は「えつそうですか」と、朝鮮学校はまだまだ足らないところばかり、不足ばかりで改善しないといけない点がいっぱいある。そんな状態なのに、このようなことをよく言つてくれるんです。もしかしたら、日本学校が失つた何かがあるのかもしれません。だから懐かしいとか、親たちのバックアップが一所懸命だと、それを言われているわけなんです。ですから、日本人に「子どもを朝鮮学校に入れたらどうなるんですか」と言われた当の朝鮮学校の先生方がびっくりしてました。

そういうふうには、八九年度頃から非常に状況が変わってきたと思います。特に、人権の見地から民族教育を捉え直していくだけのよくなつたわけなんです。それが『朝鮮人学校の資格助成問題に関する人権救済申立事件』ということで、日本弁護士連合会人権擁護委員会から、九七年十二月に調査報告書ができましたら、この資料をまとめたものをお見せしたいんですが、「ここに人権の立場から問題があると。自己の民族の文化を維持承継する権利は何人も侵してはならない『神聖不可侵の権利』であるとか、この権利が不可侵の権利であるということは、この自己の民族の文化を承継することに対してもどの

ような不利益も与えてはならないということです。ですから重大な人権侵害があるということで、日弁連に判断していただいたんです。このように、本当に八九年くらいから状況がいい風に変わりつつあるのです。そういう点も、皆さん当然ご存知だと思いますので、確認したいと思います。

ですから私は、「小さくともキラリと光る学校で」とか言つてしまふと、某政黨のキャッチフレーズのようで駄目なんですが、これはなかなか面白いなと思つています。失礼しました。

仲尾 どうもありがとうございました。民族学校の実情にも触れて、いろいろお話をいただきました。

それでは、最初に申し上げましたように、今日お配りしました資料1の説明をさせていただきます。今日のお二人のうち、後のほうでお話いただきました白さんの子どもさんは民族学校へ行つてらつしやる。それから金明石さんの子どもさんは日本の学校へ行つてらつしやるというわけですが、今の表から申しますと、京都市内の京都市立の学校に行つている外国人の数が、左手のほうに国籍別で出ております。左の表の下のほうに、「校種別・国籍別外国人」というのがあります、そこを見ますと、幼稚園から養護学校を含めて高校までが二七二一人、これが京都市立の学校に行つている韓国・朝鮮籍の子どもさんであります。

外国人総数は一番下のところで、三〇五九人となつておりますが、韓国・朝鮮籍の人は二七二一人というものの、先程もチラッとお話に出していましたように、いわゆるダブルの子どもですね、お父さん、お母さんのいずれかが日本人であればその子は日本人であるという、日本の国籍法に基づいて日本国籍になつてしまつている子どもさんたちが、この他におられるということと、それからすでに日本籍を取つてしまつている人、いわゆる帰化している人の子どもさんは、ここにはカウントされていない。けれども、民族的には朝鮮人の子どもさんとして、この日本に生まれ育つて、日本の学校に通つていらつしやる

資料1 教育調査統計 (京都市教育委員会事務局集計)

11 外 国 人

(1) 小・中学校

区分 学年別 校種別	國籍・民族						その他の外國人						総合計									
	1年	2年	3年	4年	5年	6年	合計	1年	2年	3年	4年	5年	6年	合計	男	女	計					
	男	女	計	男	女	計	男	女	計	男	女	計	男	女	計							
小学校	北上京	11	19	11	16	15	24	53	43	96	3	3	1	2	5	7	55	48	103			
	中京	5	6	10	3	10	7	25	16	41	1	2	1	4	5	6	11	30	52			
	南京	9	9	17	10	14	11	40	30	70	2	2	2	1	3	5	8	43	78			
	西京	4	5	6	3	6	6	19	15	34	1	5	1	1	2	8	2	10	27	44		
中学校	北上京	48	40	63	48	76	73	169	169	338	3	3	2	2	2	2	6	8	14	175	177	352
	中京	18	23	22	26	26	20	71	70	141	8	11	12	10	10	6	38	19	57	109	89	198
	南京	2	3	3	1	5	4	13	5	18				3	2	3	2	5	16	7	23	
	西京	10	9	12	12	14	15	37	35	72	1	3	2	1	3	1	7	4	11	44	39	83
校	右京	30	22	41	40	50	53	119	120	239	5	2	3	1	5	6	11	124	126	250		
	西京	23	32	37	31	36	37	103	93	196	2	1	1	1	2	4	6	105	97	202		
	伏見	42	40	41	55	47	55	129	151	280	8	16	14	10	20	20	44	50	94	173	201	374
	計	202	208	256	245	201	313	778	747	1,525	29	47	46	37	41	40	123	111	234	901	858	1,759
中学校	北上京	10	21	13				25	19	44	2	1					1	2	3	26	21	47
	中京	4	7	3				7	7	14		1	2					3	3	7	10	17
	南京	12	14	16				19	23	42	4	2	3				6	3	9	25	26	51
	西京	13	20	30				12	51	63	2	7					2	7	9	14	58	72
学年別	北上京	59	73	71				124	79	203	2	1	1				2	2	4	128	81	207
	中京	22	22	22				38	28	66	1	6	2				4	8	12	42	36	78
	南京	2	2	5				4	5	9	1						1	1	4	6	10	
	西京	12	11	10				19	14	33	1	1					2	2	21	14	36	
校	右京	48	57	61				89	67	156	1	2	2				3	2	5	92	69	161
	西京	36	35	35				51	49	100	5	2	1				5	2	7	62	51	113
	伏見	45	59	67				82	89	171	17	19	18				33	21	54	115	110	225
	計	263	321	323				476	431	907	38	36	36				58	61	109	634	482	1,016

(2) 校種別・国籍別外國人

国籍	中国		アメリカ	フィリピン	イギリス	エジプト	ロシア	オーストラリア	ベトナム	アルメニア	イスラエル
	幼稚園	小学校									
幼稚園	5	1									
小学校	1,525	189	11	8	4	3	3	2	2	2	2
中学校	907	91	5	9	1	1	1	1			
高等学校	269	1								1	
義務学校	16										
合計	2,712	273	16	17	5	4	3	3	3	2	2

国籍	ペルシャン		ブルガリア	マレーシア	ルワンダ	インドネシア	イラン	カザフスタン	ガーナ	スペイン	スードン
	幼稚園	小学校									
幼稚園	2	2	2	2	2	1	1	1	1	1	1
小学校						1					
中学校											
高等学校											
義務学校											
合計	2	2	2	2	2	2	1	1	1	1	1

国籍	ドイツ		ペルシャン	合計
	幼稚園	小学校		
幼稚園			0	
小学校		1	1,759	
中学校			1,016	
高等学校	1		282	
義務学校			16	
合計	1	1	3,059	

1 校(園)数、学級数、児童・生徒数

(平成10年5月1日現在)

校種別	校(園)数	学級数	性別	学年別 幼児・児童・生徒数						合計
				1年 (3歳児)	2年 (4歳児)	3年 (5歳児)	4年	5年	6年	
幼稚園	18	57	男	130	213	246				589
			女	128	243	207				578
			計	256	456	453				1,165
小学校	182分3	2,489	男	5,775	5,877	5,906	6,381	6,285	6,500	36,724
			女	5,501	5,622	5,552	5,640	5,770	6,303	34,888
			計	11,276	11,499	11,458	12,321	12,055	12,803	71,412
中学校	80分1	1,108	男	8,165	8,453	8,472				18,090
			女	5,501	5,903	6,044				17,508
			計	11,666	12,418	12,516				38,598
高等学校	9	224	男	1,225	1,169	1,136				3,530
			女	1,110	1,081	1,128				3,317
			計	2,335	2,250	2,262				6,847
定時制学校	4	48	男	304	161	151	144			760
			女	58	23	39	27			147
			計	362	184	190	171			907
養護学校	5	67	男	22	24	21	28	19	28	140
			女	13	15	12	21	9	19	89
			計	35	30	33	49	28	45	229
中学校部	6	47	男	31	28	32				91
			女	15	23	25				63
			計	46	51	57				154
高等部	5	80	男	61	68	75				204
			女	38	36	55				129
			計	99	104	130				333

(注1) 校数の分校は別掲。

全校種別

校園数

295分4

(注2) 児童・生徒数及び学級数には複式、育成、二部学級を含む。

児童生徒数

117,645

というわけですから、そういうことを考えますと、この数字はもう少し増えるとみていただいていいでしよう。

さて、左のほうですが、これは京都市内の校種別の学校の生徒総数です。一番下の右下に児童数が一七七、六四五人と出ております。このうち韓国・朝鮮籍の子どもが、一二七一一人ということになるんですね。今、京都市内では全人口の三%が外国人でありまして、そのうちの八割が韓国・朝鮮籍の人という比率ですから、ある意味ではその比率を反映したような数字になつております。

ところが、これは京都の市立だけでございまして、左の校種別のところをよくご覧いただくと、不思議なことがあります。幼稚園には、韓国・朝鮮籍の子がたつた五人しか行つていないとことになります。これは公立の幼稚園でありまして、私立の幼稚園を入れますと、非常に大きな数字になつてくるであろうと思われます。

それから高等学校も非常に少なくて、一二五九人です。これはひよつとして、ほとんど全部、中退しているんじゃないかと。そうではなくて、京都市内に府立高校は十いくつありますが、それが入つております。そういうわけで、幼稚園と特に高校ですね、それを増やしますと、一二七一一人は、先程のダブルの子や日本籍の子を別としても、もつと増える。おそらく高等学校生の数は、中学生の数とあまり変わらないであろうと思われます。そしてまた、いわゆる私立学校もこの表に入つておりますから、そういうことを考えますと、おそらく三五〇〇人くらいの子どもが、幼稚園から高校までに（養護学校を含めて）在籍していると、そのように考えていただいていいのではないかと思います。それがこの表の説明であります。

民族学校のことについては、ご存知の方も多いと思いますし、今までのパネラーの方が何人か触れていらっしゃいましたけれども、京都市内には朝鮮学園の経営する学校が四校、それから韓国学園の経営

する中学・高校だけを対象にした韓国学校が一校ござります。昨年五月の生徒数の統計は、朝鮮学校が四校で八〇六人という在籍数、韓国学園が七二人という在籍数で、合計八七八人ということになります。ざつと三五〇〇人くらいの子どもが日本の学校へ通っているんですが、それに対して八七八人の人が民族学校へ行つてゐる、こういう数字になつております。

民族学校の子どもたちが少ないという背景につきましては、これはもう何回かパネラーの方がおつしやいましたように、大変遠いこと、それから全額といつていいほど保護者の方々の負担になつてゐる、つまり学費が高いということ、それから大学受験資格の制限が非常に強くて、いまだに国立大学が認可をしていないということを含めて、低くならざるを得ないという背景があるかと思います。そういうわけで、お二人のお話の背景には、こういつた全体の実情が含まれてゐるというようにお考えください。

それからついでに申し上げますと、日本学校と民族学校の関係ですが、敗戦後、朝鮮の人々にとつては解放ですが、一九四五年に日本の敗戦、そして朝鮮の人々の解放があつたわけですが、その翌年の四年九月に、『京都朝鮮人教育会』というものが設立されました。これを母体にして今の民族学校ができてきたわけですが、最盛期の四八年には、全国で五万六千人の在日の子どもたちが、民族学校に通つていいたという記録がござります。

ところが、こういつた朝鮮人学校・韓国人学校は、占領目的に合わないということで、G H Qが閉鎖命令を出しました。そして日本の政府が、具体的には警官を動員して閉鎖に当たつたということがあつて、四八年には阪神教育闘争と言われる非常に大きな事件が起つて、民族学校を守るという朝鮮人の人々や日本人が、約二千四百人逮捕されるということがありました。それでも民族学校のほうは、在日の方々の大変な熱意でもつて復興して今日に至つております。

先程申しました阪神教育闘争と言われる事件の直前に、日本の文部省は「日本の学校に朝鮮人の子ど

「そもそも行かせなさい」と、就学義務があるという政策をとつていたわけです。そのために、無理やり日本の学校に就学させられたという人も少なくありませんでした。ところが、「一九五一年、サンフランシスコ条約が発効し日本が独立回復した時ですが、このとき、方針は一転して「朝鮮の子どもたちは日本の学校に行く義務がない」と、就学義務がないんだということを、逆に通達によつて打ち出します。そうなると、朝鮮の子どもたちは行き場を失うんですね。

そういう中で、民族学校を自分たちで、もつときちんと作つていこうじゃないかという動きが、在日の方々の中から生まれました。日本の学校には就学義務がないわけですから、就学通知がそれぞれの家庭に届かないということがあつた。それから届いたとしても、いわゆる学籍簿の中に在日の子どもたちを加えないというようなことがありました。実は、この「就学義務がない」というのは、文部省は今もその通りだと言つております。この通達は生きているというのが文部省の見解です。それで、各地の教育委員会ではそれに代わる就学案内というものを、それぞれ外国人登録者の中で満六歳の子どもさんのおられる家庭に送つて、「日本の学校に行かれるについては、四月一日からこうこうです」という、そういう手続の案内が行きます。案内という名前が掲げられているのは、もちろん民族学校へ子どもを通わせる権利もありますよという含みがあるわけです。そういうことがございました。

それで日本の学校に行くという子どもが、五〇年代後半からどんどん増えてきました。ところが、それを受けとめる学校や教師のほうで、どうしていいかわからない。あるいは放つたらかし、というようなことがあつたわけです。そこで、日本の学校の先生方の中で、「在日の外国人の子どもたちの教育を考える会」というのを作ろうという動きが、七〇年代ぐらいから始まりました。京都でもそういう会ができました。そして教育委員会、つまり教育行政の担当者に対し、このように日本の学校に朝鮮・韓国人の子どもたちがどんどん来るようになつた。だから、それをきちんと保障するような体制を作つてほ

しいというような運動ができました。

いろんな経過はあったんですが、京都市では一九九二年に『京都市立学校外国人教育方針』（資料2）という、主として在日韓国・朝鮮人に對する民族差別をなくす教育の推進について、という方針が出まして、現在、施行されております。その中で、小学校・中学校の場合は、『外国人教育研究会』というのを先生方が組織されて、公務の一つとして運営されております。そのあたりの実態については、またいろいろとご質問に応じてお答えしていきたいと思いますが、基本的に日本の学校における在日の教育としての流れはそのようになつております。

以上のところを、お二人のお話の背景にあることの説明とさせていただきます。今から十五分くらい休憩をして、その間にいつもと同じように、質問箱に皆さんのが意見、が感想を書いていただき、そして質問をしていただくということにしたいと思いますので、よろしくお願ひします。

司会　お話ありがとうございました。白吉雲さんは今回で二回目ですけども、四年前、一九九五年に、『在日韓国・朝鮮人の誇りと将来』というテーマの中で、『民族教育の中から生まれた在日の心』についてお話をいただきました。

今、コーディネーターの仲尾先生がおっしゃったように、ただいまから休憩に入ります。休憩の間に、皆さんのお手元にあります意見・ご質問用紙に書いていいだいて、こちらの意見箱に入れてください。これに基に、二部の質疑応答に移りたいと思います。三時十分に第一部を始めさせていただきたいと思います。それではよろしくお願ひします。

仲尾　それから、どちらの方へのご質問か特定される場合は、「白さんに」あるいは「金さんに」とい

資料2 京都市立学校外国人教育方針（平成4年3月）

～主として在日韓国・朝鮮人に対する民族差別をなくす教育の推進について～

国際化が進展する中、日本人児童・生徒はもちろん、すべての児童・生徒に自らにかかわる民族や国に対する自覚と誇りを高め、国際的な広い視野のもとに、他の民族や国の主体性と尊厳に対する認識を深め、国際協調の精神を養う教育は極めて重要である。

しかし、日本の社会には、今なお、近隣アジア諸国等の人々を軽視したり、蔑視したり、忌避したりする等の意識が存在している。とりわけ、在日韓国・朝鮮人については、日本の植民地政策等の歴史的・社会的背景から民族的偏見や差別が根強く存在しており、その解消に向けての取組は本市教育の重要な課題である。このような認識の下、京都市立学校においては、これまでから在日韓国・朝鮮人に対する民族差別をなくす教育を推進してきたところであるが、今後ともこの教育の一層の拡充が必要である。

外国人教育推進の経緯と現状（略）

外国人教育推進の視点

こうした現存する在日韓国・朝鮮人に対する民族的偏見や差別の実態については、その歴史的・社会的背景から日本社会の人权問題としてとらえなければならない。したがって、その解決は日本の社会における人权の確立と民主主義社会の形成に欠くことのできないものであり、在日韓国・朝鮮人に対する民族的偏見や差別をなくす教育は、人权教育における重要な課題として、他の人权問題にかかる教育とともに、一層推進しなければならない。

更に、外国人教育は、国際理解を深め、国際協調の精神を養う教育の一貫である。すなわち、それぞれの民族・国の文化や伝統を価値あるものとして互いに認め合い、社会をより豊かにするものとして尊重する教育の取組である。これは、よりもなおさず国际人权規約等の理念を具現化する営みでもあり、日本に存在するすべての外国人の主体性や民族性を尊重し、その人权を確立することにつながるものである。

今日、国際化が著しく進展し、様々な国の子供たちが本市立学校に在籍するようになりつつある一方、外国人と日本人との婚姻や外国人の日本国籍の取得が進行するなどの状況においては、国際的な広い視野のもとに、自らにかかわる民族や国に対する自覚と誇りを高め、かつ、共に生き、共に発展していくことの大切さを理解させる教育は極めて重要である。

外国人教育は、こうした認識に立って京都市立学校に在籍するすべての児童・生徒を対象とし、すべての学校で組織的、計画的かつ継続的に推進しなければならない。

1 目標

外国人教育を推進するため、次に掲げる目標を設定する。

- すべての児童・生徒に、民族や国籍の違いを認め、相互の主体性を尊重し、共に生きる国際協調の精神を養う。
- 日本人児童・生徒の民族的偏見を払拭する。
- 在日韓国・朝鮮人児童・生徒の学力向上を図り、進路展望を高め、民族的自覚の基礎を培う。

外国人教育は、人権普遍の原理である人権を確立し、すべての人々が民族や国籍の違いを認め、共に生き、共に発展していく社会を創造することを目指すものであり、とりわけ、在日韓国・朝鮮人に対する民族差別をなくすことを目指す教育である。

すべての児童・生徒に、民族や国籍の違いを認め、その相互を超えて互いに理解し合い、共に生きる國際協調の精神を養うことは極めて重要である。そのことが、互いの民族や国の文化・伝統の多様性や異質性をそれぞれ価値あるものとして認め合い、社会をより豊かにするものとして尊重し、共に生きる社会の形成者を育成していくものである。

日本人児童・生徒に、今なお日本の社会に存在する近隣アジア諸国等の人々を軽視したり、蔑視したり、忌避する等の意識を払拭させることが重要である。

とりわけ、在日韓国・朝鮮人に対する民族的偏見や差別を払拭させることが重要な課題である。そのためには、社会の中にある差別の実態に着目させ、韓国・朝鮮人の在日及び民族差別の歴史的政治的背景を中心とする日朝関係史を正しく理解させるとともに、朝鮮民族の文化や伝統について学習させることが必要である。そのことが、民族差別の不当性について気付かせ、相互理解の必要性及び朝鮮民族の主体性と尊厳を認識させることにつながるものである。

在日韓国・朝鮮人児童・生徒に、学習への意欲を高め、目的意識をもって主体的に学習する能力や態度を育てること、更に、民族の歴史や文化の価値について認識を高め、民族としての誇りをもたせることが必要である。そのことが、学力向上を図り、進路展望を高め、民族としての自覚の基礎を培うことにつながり、日本の社会に存在する民族差別に打ち克ち、自己実現を図る大きな力となる。

日本の植民地政策等に起因する民族差別の歴史的・社会的背景の中で、今日、日本に韓国・朝鮮人が多数在住しており、また、そうした状況の中で日本の社会には、二つの名前に象徴されるような民族の主体性にかかる矛盾が存在している。

これは、止むを得ず多数の韓国・朝鮮人が日本に在住し日本人らしく生活しなくてはならないという実態を示しており、また、そのことは、客観的な事実として日本人が在日韓国・朝鮮人の民族としての主体性を認知していないということである。そして、在日韓国・朝鮮人にとっては、民族としての主体性を主張し得ない状況に置かれているということである。

一般に、民族とは、歴史的運命、言語・習慣などの文化的伝統を共有する集団であり、民族的自覚や民族意識の形成は、その言語・習慣などの文化的伝統を通してなし得るものといわれる。したがって、民族の手による民族教育の場は十分尊重されなければならない。

しかし、在日韓国・朝鮮人の多数の子供たちが日本の公立学校に在籍している現実を踏まえるとき、日本の公立学校として、これらの子供たちに民族的自覚の基礎を培うことは、日本人児童・生徒に日本人としての自覚を育てることと同じく重要な教育課題である。

2 内容

学校の教育活動全体を通じて、次の内容にかかる指導を推進するとともに、保護者啓発を進める。

- (1) 人権にかかる学習を中心に、人間の尊重についての考え方を深めさせるとともに、国際的な広い視野から、他の民族や国の文化や伝統を尊重することの大切さについての学習を通して、その違いと主体性を認め、互いに理解し尊重し合い、共に生きることが

大切であることを認識させる。

- (2) 日本とアジアの近隣諸国との近現代史を正しく理解させ、明治以降太平洋戦争に至る日本の侵略がこれらの国々に多大な損害を与えたことを踏まえ、今日の日本がこれらの諸国との友好親善を一層進めることが大切であることを認識させる。
- (3) 日本が行った植民地政策等の歴史的事実について学習させるとともに、固有の文化をもち独自の発展を遂げた朝鮮の歴史と、古くから日本と政治、経済、文化等の面で深い交流があった朝鮮の歴史が日本の歴史に大きな影響を与えたことを学習させ、日本との歴史的な関係について正しく認識させる。
- (4) 日本の社会に存在する在日韓国・朝鮮人に対する民族差別の実態に着目させ、民族的偏見や差別は人権尊重の立場から許されないことを認識させて、在日韓国・朝鮮人児童・生徒と日本人児童・生徒が相互の主体性を尊重し、高め合い、共に生きる態度を育てる。
- (5) 各教科、特別活動等において、朝鮮の文化・芸術、生活等に触れる学習の機会を計画的に設け、豊かな朝鮮文化について正しく認識させる。
- (6) 民族学校等の児童・生徒や在日するその他の外国人との交流の機会を拡充し、相互理解を深めさせる。
- (7) 在日韓国・朝鮮人児童・生徒には、教育活動全体を通じて指導の焦点化を図る中で、
 - ①基礎的・基本的な内容の指導を徹底し、自己実現を図るために主体的に課題を解決していく能力と態度を育てる。
 - ②日朝関係史や朝鮮文化の学習を通して、民族の歴史や文化の価値について認識を深め、民族としての自覚と誇りを高める。
- (8) 民族差別の不当性と社会の中からすべての差別をなくすことに関し、保護者の認識を高める。

3 推進体制

京都市教育委員会は、以上の目標及び内容を踏まえ、すべての学校の教育課題として、全教職員の共通理解の下に、組織的、計画的かつ継続的に外国人教育を推進する。

(1) 校務分掌

各学校においては、外国人教育の担当の校務分掌を位置付け、外国人教育に係る指導、研修等の企画・運営に当たる。

(2) 指導計画

この方針に基づき、各学校においては、地域や学校の実態及び児童・生徒の発達段階を考慮して、指導の効果を高めるよう指導内容を系統的に組織するなど、創意ある指導計画を作成し、実施する。

(3) 進路指導

在日韓国・朝鮮人児童・生徒の進路指導の充実を図るため、学級担当、進路指導主事、外国人教育の担当、学年主任等との協力体制を強化する。

更に、進学・就職に関する差別を排除するため、関係機関との連携を密にし、啓発に努める。

(4) 研修・研究

外国人教育に関する教職員研修を拡充し、朝鮮の歴史、文化・芸術、生活等に直接触れる機会を設ける。

各学校においては校内研修に外国人教育に関する内容を位置付け、その充実を図り、実践力を高める。

小・中・高等学校別に、全市的な研究団体を組織し、相互の連携を図りながら研究を推進する。

(5) 保護者教育

外国人教育の内容を人権啓発の年間計画の中に位置付けるとともに、広報紙による学習資料の提供を行うなど、学校教育との連携を図りながら啓発を推進する。

4 指導に当たっての留意事項

公教育としての使命・理念に立脚し、教育の中立性を堅持するとともに、次の事項に留意し、国際的な広い視野に立って、外国人教育を推進する。

- (1) 国際的な広い視野から、それぞれの民族や国の文化や伝統を尊重し、その違いと主体性についての認識を深めることによって、国際協調の実践的態度と世界平和に寄与し真の民主主義社会の形成者としての資質の育成を図ること。
- (2) 日朝関係史や朝鮮文化の学習においては、日本との古くからの友好の歴史と密接な関係について理解を深めさせるとともに、朝鮮の歴史が独自の発展を遂げ、固有の豊かな文化を持つことに着目させること。
- (3) 民族差別については、その歴史的・社会的背景からだけでなく、日本の社会に現存する人権問題としてとらえ、その解決は人権の確立と民主主義社会の形成に欠くことのできないものであるとの認識のもとに指導に当たること。
- (4) 在日韓国・朝鮮人児童・生徒にかかる生徒指導、進路指導等の教育上の問題については、民族差別の観点からとらえる必要のあることに留意すること。
- (5) 在日韓国・朝鮮人児童・生徒が通称名（日本式氏名）を名乗ることについては、当然視することがあってはならない。民族差別がもたらした民族の主体性にかかる矛盾としてとらえ、在日韓国・朝鮮人児童・生徒が自ら本名を名乗ることができる学校づくり、学校づくり等を推進するとともに、基本的には本名を名乗ることに向けて保護者・本人と十分な話し合いを行うこと。
- (6) 在日韓国・朝鮮人児童・生徒の進路指導については、今なお差別のある現実を踏まえつつ、関係機関との連携を図りながら、的確な情報を提供し、相談活動等を重ねるなど、その充実に努めること。
- (7) 在日韓国・朝鮮人児童・生徒の個々の指導課題の的確な把握と、その解決に向けての理解と協力を得るため、家庭訪問を緊密に行うなどして保護者との連携を深めること。
- (8) すべての指導・生徒への指導をより確かなものとするためにも、保護者の外国人教育に関する理解、認識を深める啓発を推進するよう努めること。その際、児童・生徒が学習する内容である韓国・朝鮮人の在日及び民族差別の歴史的・社会的背景を中心とする日朝関係史等を取り上げるなど工夫すること。

うふうに、最初にお名前を書いておいてください。特に指定がない場合は、お二人に答えていただくということになります。よろしくお願ひします。

第一部

質疑応答

司会 お待たせいたしました。ちょっと時間が過ぎていますけれども、早速始めさせていただきたいと思います。先生、よろしくお願ひします。

仲尾 今日は五人の方からお尋ね、ご意見をいたいたんですが、いずれもかなり長文なので、読みこなして整理するのに少し時間をとられました。申し訳ございません。それでは早速始めます。最初の方ですが、お一人にそれぞれ名指しでご質問があります。必ずしも教育問題だけのご質問ではないんですが、お二人のアボジの地域との関わり合いや仕事のことに関連しての質問がありますので、まずこれから答えていただきます。

一、「私は長い間、「在日の韓国・朝鮮の人は、ギラギラした不平不満に燃え盛った戦闘的な人々」との誤った日本人の先入観に、たとえ一〇〇%でもとらわれていたかもしません。しかし、市民新聞により『チョゴリときもの』なる連続フォーラムが行われているのを知り、このフォーラムを時間が許す限り聞くようになり、在日の人々は至つて平和的な紳士・淑女の方々が大部分であることを確認でき、大きな喜びを感じております。冒頭に述べた誤った日本人の先入観に、たとえわざかでもとらわれていた

」とを深くお詫びしたい気持ちです。従つて、今日のところは、今述べたような感想だけにしたいと思います。ただ枝葉末節の質問で、今日の在日の子どもに対する教育という点から大きく外れますが、一つ二つ質問させてください。

金明石さんは学習塾を経営されていますが、日本が歴史始まって以来の深刻な不況に喘いでいる今日、また少子化傾向が具体的化してきた今日、学習塾経営上の苦労はありませんか。学習塾に通う子どもたちには日本人もいるのですか。この辺について感想をお願いします。」「ふう」とですので、金明石さん、お願いいたします。

金 経営は苦しいです。実は、もう何年か前にイジメ自殺というのがかなり出てきた時に、もうたまらなくなつて、塾を辞めたいなという気持ちをずっと持つっていました。ただやはり、今、子どもたちが非常に大変なところにいるというのを、ひしひしと感じていますので、その大変な子どもたちのすぐ近くにいてられるのは学習塾じゃないかという気がして、何とか続けてやつていこうと思つております。もうそろそろ、今度は子どもではなくて、お年寄りがこれから増えてきますから、ホームヘルパーなんかのお年寄り相手の仕事をすることができないかと考えております。今年、私は九月から六ヶ月間、韓国に留学する予定をしております。帰ってきてから商売替えを考えたいというふうに思つております。それはそれとして、前段階の内容のことですが、日本社会というのは、例えば一九四〇年一月一日、紀元節を機に『創氏改名』を行つてきました。今までのフォーラムの文章も読みましたが、名前について少しだけ述べたいことがあります。名前というのは、記号というような形だけではなくて、すごく大きな意味があると思います。例えば落語家の襲名披露とか、そういうのを見てもそうですが、これはやはり、その人間を縛るぐらい、「呪縛する」そういう大きな役割を持っているんじゃないかと思います。

一九四〇年と言いますと、第二次世界大戦が大分混沌を深めていた時代です。その時になぜ創氏改名をしなければならなかつたのかというと、やはり台湾人とか朝鮮人とかいう人たちに鉄砲を持たせる必要があつた。戦争に行かせなければならなかつた。でも鉄砲を持たせて、自分たちに向けて鉄砲を撃たせてはいけなかつたわけです。天皇の赤子（せきし）として従順である、そういうことが必要だつた。そのためにも名前を日本式の名前にして、誇りなども傷つけてやつていつた。そのぐらい大きなものがあつたんじやないかと思います。また実際に、日本がアジア諸国を侵略する時に、日本人とその人たちが対等の立場であつてはいけないので、見下す必要があつたというふうに思ふんです。中国で戦争をする時に、やはり日本は優秀であつて、優秀でない人たちを自分たちが導いていくんだと、そういう上下関係や見下す必要があつたと思います。

そのような教育をずっととしてきて、それがそのまま残つてゐる。この人がおっしゃる先入観というものは、今までにずっとすごく時間をかけて培われたものです。歴史家とか大学のえらい先生なんかを動員してまで培つてきたものです。すごく計画的にされてきたものだと私は思います。それがすぐに何もしないで変わるかというと、変わらないです。それと同じくらいの、またはそれ以上の努力をしないと。創氏改名についても、今も八割、九割のほとんどの人たちが通名です。本名を名乗るということの努力をしなければならない。その責任を果たさなくてはならない。そういう責任は、本人たちだけじゃなくて、日本社会全体でゆつくり時間をかけて、国家予算的にもすごくお金をかけてでもやらないと、なかなか本名を名乗れないというふうに私は思います。

日本の社会で一段見下すというのが本当にまだ残つていますので、そのための民族共生教育というようなことをしていくために、いろんな所でいろんな形ですごく時間をかけて、どうすればいいのか討議してやつていかないと、そのままこういう形で再生産されてしまうのではないかと思つております。

仲尾 ありがとうございます。それともう一つ具体的な質問で、「学習塾に通う子どもには日本人もいるのですか」という質問ですが、そこを少し……。

金 学習塾では、私は営業ネームを使っております。明石というのが名字になつております。もちろん、日本人相手です。なぜ本名を使わないかと言われますと、そんなに私自身が強い存在じゃないということもあるだろうと思いますし、在日のほとんどの人たちがそういう形でやつてはいる、その痛みを私自身が味わわないといけないということもあります。その中で、一緒に本名で経済活動ができるような社会になればな、というふうに思つております。

仲尾 ありがとうございました。白吉雲さんにも、同じようにお仕事に関係する質問です。

二、「司法書士をなさつているペク・白吉雲さんは、仕事の上で顧客、クライアントは日本人の人もおられるのですか。」
という質問です。

由 日本の方もおられます。京都司法書士会では、司法書士法というのがありますて、第一条で『国民の権利の保全に寄与する』となつてはいるんですけども、司法書士会内部での多数説は、その国民の中にはいわゆる在日外国人も入つてはいる、人権擁護の立場と言いましょうか、そういう点では司法書士会としては意見の一一致はみてはいるではないかと思うんですね。そして四年前から、京都司法書士会の会長が古田先生という若手の先生になられまして、より市民の中に積極的に入ろうということで、まだ

皆さんからしたら「何をやつて いるんだ」と怒られそうなんですねけれども、無料相談会とかシンポジウムとか常設相談とかを、弁護士会もやっていますし、我々司法書士会もやっています。私もそこに参加しています。

私は、日本の法律関係と北朝鮮、南朝鮮、三つの法律には比較的明るくて、中国、アメリカはちょっとわかりませんけれども、日本と南北の法律に一応精通していることになります。ですから在日の方が来られても対応できます。ついこの間、二十年位前に韓国から来られて、日本語のまだたどたどしいところが残っている方が来られて、特に私は言葉ができますので、朝鮮語を使いましたら非常に喜んでいただきました。私は毎日必ず、どんなに残業で遅くなつても、日本の新聞と『朝鮮新報』という朝鮮総連が発行している新聞を読んで、朝鮮語を忘れないように努力しているんです。ちょっとと下手なところもありますけれど……。それと日本の資格ですから、日本の法律ももちろん精通しています。そういう意味で、日本の方もおられるということです。個人的には、「若い」ともあるんですねけれども、「京都一、日本一の司法書士になるぞ」くらいの抱負を持つてやっています。

私は、仕事はこの名前でています。漢字で。漢字の日本読みでやつて いるんですが、ペク・キルウンであろうがまあ漢字でいいだろうと思つていまつたら、在日朝鮮人留学生同盟の学生活動をやつて いる大学生から「先輩、駄目じゃないですか。ペク・キルウンと朝鮮語読みにしなければ」と指摘を受けました。が、一応、漢字のハク・ヨシクモでやつています。

それと個人的には、在日朝鮮人もそろそろ通名とオサラバする時期じゃないのかなと最近思つて います。別に弱者の気持ちがわからない、そんな意味ではありません。私も年代のわりには苦労しました。大学も夜間に行つて、自分で学費を稼いで、学生の時から親に仕送りをしていましたので、決して弱者の気持ちがわからないんじゃないんです。けれど、いつまでも通名を使うというのは、逆に日本人に対する

侮辱じやないのかなと思うよになつたんです。というのは、日本人全部、一億三千万人が差別しているのかと。そうじやないでしょ。私にも、日本のいい友達がたくさんいます。だから、戦後五十三年、もうそろそろ通名ともオサラバしてもいいんじやないか、これは逆に日本人に対する侮辱だと思うんです。だから日本人の人も、外国人が通名を使つていても、これは日本人に対する侮辱ぐらいに思つてもいいんじやないかと思つわけです。

例えば私たちが白人とか黒人ならどうなるんですか。肉体的に似てゐるから、ごまかせるわけなんでしょう。私はもうそろそろ、戦後の平和憲法のもと、個人的には日本国憲法は非常にいいと思っていまして、そういう時期にきてもいいんじやないかなと。帰化手続もそうなんです。私は言つてゐる。「あなたたち帰化する人は、本当の日本の友達がいないのでは？」と。帰化しなくとも十分に暮らしていきますよと。私は説教するつもりはありません。だからそれだけ言つうんです。「私は個人的には寂しい。ただ、帰化しようとしているあなた達には本当の日本の友達がいるのですか？」と聞くわけなんです。私は日本の友達とお互いに喧嘩もしますし、また仲良くなつて、そういう日本人たちは阪神大震災の時に、朝鮮学校が大変な時に助けてくれた。そういう日本の友達がいる。そんな日本の友達を見ていると、全然帰化する気もしない。逆に、帰化も日本に対する侮辱じやないのかぐらいに、個人的には思うんですけれど……。

仲尾 ありがとうございました。次の方の質問も少し大きな質問です。今も関連したお話の中で、お二人の思いをそれぞれ聞かせていただきましたが、そういうところにも少し絡まるようなご意見とご質問です。

三、「元私学の教師です。在日の生徒たちに關わる部署に着いていたことがあります。国籍を隠しているのに、その問題について無理に話すように強制されたこと、ある生徒に誤解され苦しんだ記憶があります。在日の方もいろいろな立場、考え方があると思いますが、教師も在日のことについては触れたくはないしり込みする人も多かったです。それではいつまでたっても在日の方々との交流は進んでいません。私は、日本の社会が、自分を隠さなければならぬ社会であつてはならないと思います。交流の前進のために日本人が、また在日の方々がどうあらねばならないか、ご意見をお聞かせください。」

こういうご意見兼ご質問です。どういうお答えをいただいてもいいんですが、日本の学校や日本の学校の先生方にどういう要望があるかといふことも、併せてその中でお答えいただけたら、今日のフォーラムの主旨とも合うのではないかと思いますので、それも折り込んでお話いただけますでしょうか。金さん、よろしいですか。

金 在日の若い子なんかが寂しく思うのは、自分が日本人の人たちからは見えない存在というのでしょうか、透明な存在である、透明人間のような存在だと、そういうふうに思うことがあるんです。それはどういうことかと言つと、通名を名乗つていたりすると、自分が在日であると相手にはわからない。だから、自分が認められていらないというふうなことを思う人がいるんです。私自身もそういう部分があるんですけど。例えば、私は保護者として学校に行つたりしますと、卒業式とか入学式の時には、ソウルで買つてきた自慢のパジ・チョゴリを来て行くんです。すると、声を掛けてこないんです。そういう部分を認めてほしいなということです。できたら、なぜ在日が日本にいるのかということを知つてもらつて、その上で尊重してほしいなということを思います。これは要求が大きすぎるかもしませんけれど、も……。

ただやはり、大多数は、この子どものように自分を隠して隠して触れられたくない、芸能人にもいつぱいいるようですが、触れられたくないという人たちだと思います。さつきも言いましたように、そういう人たちには、ある意味では自分を差別している人たちだと思つています。そして、差別させている社会があるといふふうに思います。

そういう中で、学校の先生たちに何を要望するかと言ふと、うちの子どもたちが行つた時には、最初にクラス全員で「ムグンファ ムグンファ」（韓国の代表的童謡、ムクゲの花のこと）というよくな歌を習つたり、朝の挨拶を「アンニヨンハシムニカ」という形でやつたり、そういうよくな形である意味で注目してもらつて、ここにこういう人がいる、だからこういう人がいるということを尊重しようというような感じでやつてくれまして、すごく嬉しかつたですけれど、そういうことがやはり必要じゃないかといふふうに思つています。

ただ、さつきの私の学習塾のこととも関わりがあるんですが、今の日本の学校、学級崩壊というよくな問題もありますけれども、非常に大変で、この現状をどうして行くんだという危機感があつて、学校現場の先生たちも、在日の問題どころじやないといふふうな感じです。逆に、そのような今の学校を作つてきたのが、例えば在日の問題についても、本当にちゃんと取り組んでこなかつたといふふうな部分があるからではないかと私は思つています。

例えば、『日の丸、君が代問題』があります。私自身、そのことについて深入りはしませんけれども、ただ法制化というのはそんなに反対することはないだらうと思いますが、強制はすべきではないと思うんです。日本の社会の伝統的な子育てというのに、『だます、脅す、金で釣る』といふふうな部分があります。『だます』といふのは、言いくるめるといふふうな部分もあるかと思います。例えば、憲法九条があるにもかかわらず自衛隊がある。これは合憲であるといふふうに言いくるめる。君が代の歌詞を読んで、この『君

というのは『天皇』を指していないと言いくるめる。または、『脅す』というのは、君が代を齊唱しなければ、校長を解職するぞということです。沖縄でも、そういうような脅しというのがありました。『金で釣る』、もし原発をここに持つてくればこれだけのお金を落とす。私は、日本の社会がやっているような子育てといふんですか、それを国家的にやつているのではないかと思います。それを親が知らず知らずのうちに身に付けて、実際に子どもを育てる上で、子どもをだまして、脅して、そんなことをする子はうちの子ではありませんよと強制して、どうしようもなくて金で釣つて育てる。そういうところで、今学校教育でのいろんな問題が出ているのではないか。自分たちで考えて、自分たちで決定して、それがなし崩しにされるという、そういうのが私は良くないのではないかと思つています。

仲尾 ありがとうございます。白さんの場合は、子どもさんは民族学校に行つてらつしやいますが、日本の学校の先生、あるいは日本の学校の状況は、地域・周りの日本人の方や、マスコミ報道のことでもよくご存知だと思いますので、お答えになれる範囲でお答えください。

白 私は個人的には、日本学校の先生たちにお願いするのは筋違ひな話ではないかなと思います。私はいつも、まず自らが自立しなければならないと思うわけです。これは私の考えで、最近、在日朝鮮人の中から非常に支持者が増えていきます。日本社会とか言う前に、まず我々が自立しなければと思います。私は本多勝一先生（現在は『週刊金曜日』の編輯委員）を尊敬していますが、あの方の本を読みますと、「ひとつの民族が、抑圧され、差別され、植民地化され、奴隸化されてゆく過程の中で、恐らく最後を飾るのは精神の奴隸化であろう。」と。だから私は、我々は精神の奴隸化から解放されねばならないと思います。そして、そういうふうに我々自身が解放されなければなりません。

そういう意味で、私はよく大学生の朝鮮人学生の勉強会に講師で呼ばれた時に、あらゆる劣等感、コンプレックスを放棄せよ、そして可能性、自信を、人間は自惚れは駄目だけれどできるんだという自信を持とうと。北朝鮮を支持する人とか、南朝鮮・韓国を支持する人とか、中立とかを問わず、在日朝鮮人全ては、可能性・自信を持つべきだと、いわゆる精神の解放と言いましょうか、それを強く訴えるわけです。私ももちろんそのために頑張らないといけないと、個人的には努力していますし、そういう面で、在日朝鮮人の人達全てに精神の奴隸化から解放されてほしい。そう考えれば、帰化なんて本當にする必要はないと思います。客観的に、社会的に、法律的に分析したところ、今は帰化する必要はありません。四十年前ならいざ知らず、私はそう思います。

本当にそういう意味で、一方的に日本社会が悪いような、そういう言い方はおかしいのではないかと思います。子どもを朝鮮学校に行かせてるので、子どもは朝鮮語もしゃべるし、日本語もしゃべる。私も朝鮮語も日本語もしゃべるので、本国の人はびっくりします。私はピヨンヤンへ二回行きましたが、「日本にある朝鮮学校はすごいな、朝鮮語をここまでしゃべれるのか」と驚かれました。南朝鮮から来た人も、我々と会つたらびっくりするんですよ。言葉をしゃべれるし、風習も結構知つてているから。そして現代的センスも持つていて。本当に驚いています。学生時代は本国に帰るうかなと、自分の親はなぜ北・南問わず本国に帰国しなかつたんだろうということで悩んだこともありました。そういうのは過去のこととして、私はそう思います。

日本社会とか、日本の先生とか、私から言うのは恐れ多くて言えません。ただ一つだけ思うことは、こういうことを言うと怒られるかもしれません、日本人の人が戦後の日本の良さを今、忘れつつあるんじゃないかなということです。戦前は確かにアジア・朝鮮半島・中国に侵略しました。けれど戦後、北朝鮮には正式な謝罪はしていません。それは置いておいて、日本としては平和憲法のもとで平和的にやつ

てきたわけです。こういうことは世界的に見ても珍しいようです、人を殺していない。戦前はいざ知らず、戦後は。だから今こそ、日本は世界で尊敬される国になる可能性を持つています。にもかかわらず、それを日本人達は気付かず、「やれ隣の朝鮮半島で戦争が起きたらどうする」「ミサイルが飛んでくる」そういう馬鹿げた危機感ばかりある政治家に脅かされて、踊っている。

私は正直に言つて、日本人は世界的に見ても、平均的に知識水準は高いと思います。だから、そういう嘘を見抜いてほしい。平和国家として本当に尊敬されています。その良さを忘れつつあるんではないのかと。そういう意味で日本人の戦後のいいところを失わずに持つてほしいと思います。失礼しました。

仲尾 ありがとうございました。今、少しお話を出たことに関係するんですが、次の方の質問はこういうものです。

四、「白さんの言われた、朝鮮人の体を日本で生きるための服という表現は、本当によくわかります。前々回に、立派な朝鮮人を育てるために、現段階では目的が違うから一緒に教育できないという話がありて、立派な朝鮮人、立派な日本人とは何なのかと思っています。」

こういうことです。これは、朝鮮学校は朝鮮人を育てる、日本の学校は日本人を育てる、それを一緒にできないか。別々にというのは、ちょっとおかしいんじゃないかというような意味合いからのご質問だつたのですが、それに対しパネラーの方が、民族学校の目的からして一緒に教育することはできないでしょうと、そういうふうに答えられたんですが、そのことをここで改めて言われております。ご質問は、それとまた一八〇度違いまして、

「テレビ・ニュースで時々耳にする北朝鮮への感想について、差し支えなければお話しください。」

「うことなので、テーマとは外れますけれども、もしお二人それぞれ一言ずつ、何かお考えがあればおっしゃってください。なければ、「ない」でも結構です。」

金 立派な朝鮮人、立派な日本人ですか。韓国系の民族学校でも、やはりそういう言い方をしますね。こちらでは、立派な韓国人を育てるのが目的であると、そういう言い方をします。実は、私が子どもたちを公立の日本の学校になぜ入れてているのかということと関係するんです、私自身の持つていてる民族教育というのは、アイデンティティを確かめるための教育と民族共生教育、そういう二つのものがほしいと思います。アイデンティティを確かめるための教育というのは、何とか家庭でできると思ってます。民族共生教育というものは、これはもう日本の社会の中でどういうふうに自分たちを高めていくか、または引き上げてもらえるかということと関係するものだと思いますので、日本の学校でもいいんじゃないかというふうに思っています。

民族学校というのは、ちょっと私からすると民族主義的な民族教育、または国民教育というんですか、そのことが私自身引っ掛かりまして、それで実際に行かせなかつたんです。友達には、「日の丸と太極旗（テグッキ）ではどちらがいいのか」というように言われたこともあります。私は日本の学校が国民教育ということではなくて、市民を育てる教育という形で本来あるべきだと思つていますから、そういう意味で自分の子どもを日本の学校に入れているということです。

あともう一つ、北朝鮮の感想ですけれども、はつきり言って日本の人々に悪口を言われたくないという気持ちが強いです。私たち自身で悪口を言つたりすることもあるんですが、あなたに言われたくないという気持ちがすごく強いということだけです。

仲尾 ありがとうございました。民族教育の在り方、希望、そういうことをいろいろお話をいただけたと思います。それでは同じ質問内容について、白吉雲さんのほうからお願ひします。

白 初めの質問に対しても、先程私からお話をさせてもらいましたが、朝鮮人の体として異国である、外國に住んでいますから、やはり自然には身に付かないんです。ですから、朝鮮人の体としての言語・歴史・風習などの文化的な総合的教育の育成・蓄積・教育の場なので、そういう意味で前々回の方の言い方がそうなつただけだと思います。先程申しましたように、今年の二月の朝鮮学校の学芸会で松尾小学校の子どもと一緒に合唱した時に、ああいいなあ、本当にいい風になつてきてくれていると、ものすごく嬉しかつたです。友達のお父さんに聞きましても、だいたい皆喜んでくれていましたし、そういう感じで交流を深めていったらいいなと思っていますので、立派な日本人、朝鮮人という意味はそういうふうにやわらかくとつていただきたいらしいんではないかと思います。

特にこの概念は、日本に生まれて日本にずっと住んでいる人には、なかなか理解してもらえないところがあるんです。先程も言いましたが、海外で二十年くらい暮らして二歳の子が二十一歳になつたというような親の方は分かつてもえらるわけです。京都の弁護士の方にもおられまして、女性の方ですが、フィリピンで育つて最近戻つてきたということで、大変話が通じました。「白さんたちの気持ち、すごくよくわかります」という感じで、理解があると思つていたら、やはりフィリピンで長い間、十五年くらい育つっていたんですね。そういうものではないかと思いまして、別に変に悪意にとらないようによろしくお願いします。

二つ目に北朝鮮の感想は、先程お話ししましたことが答えではないかなと思います。日本人が、戦後の『平和國家』という財産を奪われるためには、誰かの悪口を言わないといけない。昔はソビエト、そ

の後は中国、今は北朝鮮。ただそれだけのことだと思います。国民の皆さんのお育水準は高いので、そういう政治家の嘘の発言と言いましょうが、間違っていることは間違っているとの確に判断していただいたらいいんじゃないかと思います。

仲尾 ありがとうございます。あと一つあるんですが、そのうちの一つは大変嬉しい感想を書いていただきましたので、ご紹介させていただきます。

五、「私自身、親として、また子どもに觸れる仕事を通じて、最近、自分自身に問うことが多くなりました。自分なりに一所懸命生きたし仕事にも取り組んできたはずなのに、何か違う。自分が触れる世の中や、仕事、わが子が見えなくなってきたのです。そんな中、このフォーラムに参加して、生き生きと話をされる姿に触発されました。私はどちらかと云うと、古典的な考え方を持つているように思います。それは育った環境、生い立ちに負うものが大きいと思います。抽象的な表現ですが、いつも心のどこかで、『親を失望させたくない。でも自分の思い通りにも生きていきたい』と葛藤していたようです。それが今の世の中、自分のことだけという人が多いように見えて少々落ち込んでいました。でも、お話を聞くことを通じて、もう一度頑張ろう、自分を大切に自分らしく、家でも職場でも素直にあるいは率直にと思うことで、少し好転してきたように思います。うまくまとまませんが、私の感謝の思いを書かせていただき、また明日への糧としたいと思います。」

「こういう感想が寄せられています。司会者としても大変嬉しいです。あと一つのご感想は非常に長文です。これは今回の『チョコリときもの』とのテーマとは違いますが、折角ですのでご紹介させていただきます。それは、今、配付が始まりました『地域振興券』に関する問題で、外国籍の方々にど

いう問題が生じるのかということです。

六、「小・中学生の親である人たちに關して、特に国籍の異なる親子について、ある問題をお話します。今話題になつてゐる『地域振興券』が、国籍の違う親子には与えられないという問題です。例を挙げます。在日本一世の韓国籍男性と結婚したニューカマー（ニューカマーというのは、一九五二年以降に日本に来た韓国人とお考えください）の韓国人女性が、子どもができる後に離婚し、母親が子どもを引き取つて暮らしている場合、『地域振興券』はもらえません。なぜなら所帯主である母親が永住権を持つていないからです。京都市も自治省も、初めはこういう場合にももらえると言つていました。永住者、特別永住者、すなわち在日の人という条件は、子どもの条件だと言つていたのです。しかし後になつて見解を訂正して、永住者は所帯主の条件であるとしたのです。その結果、このお母さんには初めはもらえると言つっていたにも関わらず、通知は出しません。抗議の電話に対しても『もらえる』と言つて、その翌日に『貰えません』と返事をしたのです。こういう例は他にもたくさんあります。

所帯主、親が日本人で子どもが外国籍の場合、京都市は通知を出していません。一方、子どもが日本人なら、親が永住権のない非永住者外国人でも通達状はもらえないのに、京都市は日本人の子ども宛にもらえるという通知を出しているのです。理由は、京都市は、日本人向けの住民票も外国人向けの外国人登録も、それぞれコンピュータ化しているが、制度が異なるのでリンクしていない、結び付けていないということです。これは嘘です。確かに住民票と外国人登録は別制度ですが、電算化の時に混合所帯としてデータを結び付けることができるのです。それがなくても、所帯主の統柄を調べたり、親子どもらかが日本人であれば必ず戸籍で確認できます。その努力を怠つてはいるのです。努力しようという行政の人もいるのです。要するに、国籍による差別が行われているのです。官僚とはこういうものなのでしょ

うか。

外国人登録のコンピュータ化は、地方参政権を見据え、行政の内外人平等を実現するためにやつたのではないかのでしょうか。外国籍住民の行政施策大綱の精神は、どこへ行つたのでしょうか。今、平等に振興券をもらえるよう話し合いを続けていますが、まだ解決に至つていません。民団の人も総連の人も行政の人も、声なき声に耳を傾けてください。国籍の異なる母子家庭は、今の日本で最も弱い立場におかれていると思います。抗議できる人は強い人です。弱い人の声に耳を傾けてください。」

こういう長文のインフォメーションをいただきました。それと同時に、別にワープロで『定住外国籍住民に対する地域振興券交付に関する問題点』ということを列記していただきたものも付けていただいております。これにつきましては、私も非常に気になっていることがあります。例えば国民年金をもらえない無年金の在日の一世の方がおられます。その方が、市民税を払わなくてもいい非課税所帯であれば、【地域振興券】の調査と配付の対象になるのですが、もし子どもさんたちと同居されていて、非課税所帯ではない課税所帯の一員であつたら、もれてしまふ可能性があります。そういうことについて、実はこの【地域振興券】を提案した政治家の人们にも聞いたんですが、全然気がつかなかつたということなんです。

私はことある毎に、市の行政の方、区役所や市役所の方に、「こういう問題がありますよ」と言い続けておりますし、今日はまたこれで、どちらかの親が外国籍で永住権がなく特別在住でなければもれてしまつという、新しい事実も知りました。従つて、このことにつきましては、私のほうから京都市の担当部局のほうに、こういうご意見と問題点が出ているということを確かにお伝えしたいと思います。皆さん方も、それぞれの地域で、そういう方がひよつとしたらいらっしゃるかもしれない。もしそういうことにお気付きでしたら、どんどん声を挙げていただければ、問題が非常にはつきりすると思いますの

で、併せてお願ひしたいと思います。以上が、本日寄せられました五の方々からのご意見とインフォメーション、並びにご質問でした。

金 ちょっと、そのことで。

仲尾 それでは、一言お願ひします。

金 今のことですけれども、私は民団福島支部という、大阪で三十六支部あるうちの一、二を争う小さな支部で、一五〇世帯ぐらいしかない所なんですけれども、その中には七十歳以上のお年寄りが六十人いらっしゃいます。そのうちの七割が一人暮らし、または二人暮らしで、ほとんどが年金がない方ばかりです。年金がない方ばかりですから、老人ホームにも入ることができません。そういうこともありますて、福島支部では高齢者対策をできるだけやっていくことで、デイサービスを始めたり、バス旅行に行ったりという形でやっています。

実際にその時にすごく思いますのは、在日が見えていないということなんです。頭の先にないといふんですか、ある意味では見なくてもいい。責任がないですから、無視することができる存在だというふうに、日本社会はまだまだ考え方でいるところがあります。というのは、例えば、在日の七十歳以上のお年寄りで日本語をしゃべれない人は、言葉の壁があつて、老人福祉センターに行つていろんなサービスを受けるということができないんです。デイサービスも、福祉のところに行つて受けるということはしません。一度行つたら、嫌がつて帰つてしまいします。老人クラブにも参加できないんです。いろんなクラブがあるので、そこに一度でも行くと、もう一度と行きたくない。そういう人たちが一人暮らし、

二人暮らしでいるわけです。年金がないんですよ。

大阪では、一万円の特別給付金というのを、やつと一昨年からもらえるようになりましたけれども、今は大不況で子どもからの仕送りが本当に少なくなっているんです。その中で生活をしていかなければならぬ。かといって、生活保護は受けたくない。また、受けられるかどうかもわからない。そういう情報が入つてこない。子どもとしては、なかなか親に生活保護を受けてくれとは言えないし、親も自分からは言い出しにくいということで、生活保護もなかなか受けられない。そういう方々がたくさんいらっしゃつて、ちょっと怪我をして病院に入つたら、たらいまわしにされてそのまま死ぬという、そういうのを最近すごくよく目にします。

そういう現実がある中で、在日の人も日本の社会の一員であるということだったら、いろんな対策を行政がやらなければならない問題だと思うんです。でも、それができない。これはやはり、参政権がないということと大きくリンクしている問題だと思います。参政権がある人ということは、その社会の一員であつて、その社会が責任を持たなければならぬ人たちである。しかし、参政権がなければ無視することができるということです。「何かしてあげる」というのは恩恵なんです。してあげているんです。そうじやなくて、そういうことが当たり前の権利として、もらえないといけない。だから私は、参政権というものは絶対に在日のためになるし、当たり前のことだというふうに思つております。

仲尾 ありがとうございました。今、老人問題が出たわけですが、白さん、何かござりますか。よろしいですか。この『チョゴリときもの』の新しいテーマが、また一つ見つかったようにも思います。少し時間が超過いたしましたけれども、本日のフォーラム、大変実りの多かつた内容であったと思います。どうも皆さん、それからお二人のパネラーの方、ありがとうございました。

司会 非常にいいお話をしました。ありがとうございます。次回の「案内を申し上げます。今までにお父さん、あるいはお母さん方にお越しただいてお話をいただきましたが、最終回の三月二十六日は、当事者として今現役の高校生の方に出ていただいてお話を聞いていただきます。「高校生の思い」というテーマで、この場所で、同じ時間、二時からまた開催いたします。先程の受付のところに、再来週の受付名簿が置いてありますので、お帰りの際にお申込みください。本日はお忙しいところありがとうございました。

第四回 『高校生の思い』

パネリスト

新井宏受氏
（在日三世・高校生）

李史良氏
（在日三世・高校生）

大佑氏

（在日三世・高校生）

コーディネーター

仲尾

宏氏

（京都芸術短期大学教授）

一九九九年三月二十六日実施

第四回 『高校生の思い』

第一部

司会 長らくお待たせしました。前回に続きまして、子育てと学校教育の最後としまして、本日は高校生の方をお招きしております。『高校生の思い』というテーマでお話いただきますけれども、今回のパネリストは、まず最初に新井宏受（アライ・ヒロツグ）さんです。もう一人の方が李史良（イ・サリヤン）さん、最後の方が李大佑（リ・デウ）さんです。現役の高校生の立場でお話いただきます。コーディネーターは仲尾宏先生です。よろしくお願ひします。

仲尾 皆さん、こんにちは。お足元が悪い中、よくぞお出ましいただきました。

いま司会の方からご紹介がありましたように、今年は『子育てと学校教育』というテーマで、第一回目は学齢前の子どもさんを持つた親御さんのお話、二回目は小・中の子どもさんを持つたオモニたちのお話、三回目は同じく小・中の子どもさんを持つたアボジたちのお話をいただきました。それで、高校生をどうするかということだったんですが、今までのペネラーやの中にも、すでに高校生になられたお子さんをお持ちでそういうことも含めてお話をいただきましたが、高校生ともなると親御さんが代弁するというより、自分で自分で語れる、そういう年齢に十分達しているだろうということで、今年はこのフォーラム始まって以来初めての試みで、大変イキのいい高校生の皆さんをご紹介するということになります。どうぞ楽しみにお聞きください。

今までの方は、主として民族学校に子どもを通わせているという保護者の方が多いつたんですが、今

日の高校生の三人は、いずれも現在は日本の学校に通学している高校生であります。厳密に言うと、こうして三人並んでいたただいた中の一番年嵩の李大佑さんは、すでに高校をこの三月に卒業して、大学進学が決まっているというわけですが、三月末までは学年としてはまだ高校生という扱いで（笑）、本人にとっては、もう大学生として扱つてくれというところかも知れませんが、今日は高校のO.B.というような格好かな、そういう立場で話していただこうと思います。

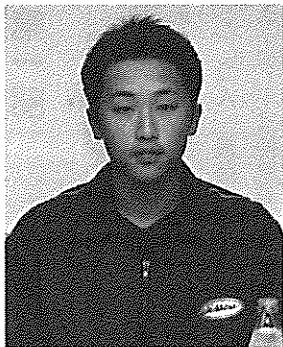
まず三人のうち、どういう順番にしようかということになつたんですけれども、やっぱり若手から話ををしてもらつて、最後、李大佑君に締めていただく、という順番でいこうと思います。

それではまず最初に、新井宏受（アライ・ヒロツグ）君を紹介します。新井宏受君は、京都市立洛陽工業高校の一年生ですね。それで在日三世ですが、野球を一所懸命やつてることです。では、まず新井宏受君からお願ひします。

新井 初めまして。いま紹介していただきました新井宏受です。これは通名で、小さい時から今まで使つている名前で、本名はパク・ケンスといいます。

いま紹介していただきましたけども洛陽工業高校に通つていて、今度、二年生になります。今日は今まで、まだ十六歳ですけど、今まで僕が小学校・中学校・高校に入つて、在日として、どのように周りの人と今まで接してきたか、これからどのようにしていきたいかを少し話したいと思います。

まず、自分が在日であること、在日の韓国人であることを知つたということですが、これは本当に「



新井宏受氏

く自然に、小さい時から家でのお父さん、お母さんがたまには韓国語でしゃべっているのを聞いたりとか、食卓に日本の漬物の代わりにキムチが出てきているとか、韓国料理がたくさんあるとか、そういうふうな中から自然に身についていたものと思うんです。だから親から真剣な話で「お前は韓国人なんや」とか、そういうふうに言われたこともないのに、ごく自然に、自分が在日の韓国人なんだということは身についたと思います。

本名を知ったのは、初めて韓国に行つたのが幼稚園の時で、その時に、「向こうに行つたらこういうふうな名前で呼ばれるんや」っていうので本名のパク・ケンスというのを幼稚園の時に初めて聞いたと思います。

幼稚園の時に初めて韓国に行つたんですけど、初めて行つていろいろと驚いたことがたくさんありました。小さい時ながらも、今はつきりと覚えているのが、お箸とかスプーンとかが、日本でそれまで使っていたのとは全然違つてちょっと使いにくかつたとか……。あとお墓参りに行つたんですけど、お墓が日本のと全然違うというのとか、部屋がオンドルになつていてすごく暖かかった、冬に行つたからよけい、暖かくて、いいとこだなあと思ったのを覚えてています。幼稚園の時にはそれぐらいです。

小学校にあがつてから、僕の住んでいるところが西九条なんで、いろいろと在日の人が他の学校に比べて多いと思うんです。学年は二クラスあつたんですけど、三人か四人ぐらい在日の人がいました。小学校三年生が四年生の時に、道徳の授業か何かの時に、お母さんのチマ・チョゴリを学校に持つて行って、担任の先生が女の先生だったので、みんなの前で着て、「これが韓国の民族衣装ですよ」みたいなことで紹介したことがあつたんですけど、なかなか他の学校ではこんなんしてるとこはないなあ、とその時に思つて、ちょっと得意氣でしたね。こんなきれいなんがあるんやぞ、とか……。着物もいいですか、チマ・チョゴリは軽くてきれいな色が多いので、なんかその時の心境としては、すごく得意氣でし

た。

小学校の時であともう一つ覚えているのが、小学校六年生の時に、韓国中学のほうから「来ないか」というような手紙を先生からもらったような気がするんですけど、その韓国中学からの手紙を読んで、僕は初め「韓国中学に行きたい」というふうに親に言つたんです。でも親に「韓国中学に行きたい」と言つたら、「韓国中学に行くのもいいけど、なるべく普通の公立の中学校に通つて、日本人の人とお互いに、こちらからは韓国のことなんかを教えて、向こうからは日本の文化とかいろんなものを教えてもらつたら、もっと幅が広がるんじゃないか」っていうようなことを言わされて、結局、中学は普通の公立の中学校に通つことになりました。

中学では十二月に「人権月間」ということで、十二月の最初の人権週間に時に、学校でいろんな人権学習がありました。一年生の時には、体の不自由な身体障害者の人たちの授業をして、車イスに乗つてみたり、実際に目隠しをしてみて目の見えない人のことを体験してみたり。一年生の時に在日韓国・朝鮮人の問題を勉強して、三年生の時には部落の問題について学校の先生が授業をされたわけです。

昨日なんですが、在日の、二年生の時に勉強した『消えた国旗』という物語を読んで、先生がいろいろと前で授業されて、授業が終わつた時一人ひとりに、どう思つたかという感想をみんな書いたんですけど。昨日ちょっと中学の時の『学年だより』を読み返していく、日本の人たち、周りの僕の友達がみんなどういうふうにその授業を受けてたのかなあというのを。その時は全然気にならなかつたんだけど、今日ここでしゃべることになつて、やっぱりとても気になつて見直してみたら、もつと在日のことについて勉強していかなければならないとか、勉強したことをその場だけで止めておくんじゃないなくて、これからもつと広げていかななければならないとか、自分たちにできることが何かあるんだつたらしていかなければならぬとか、そういう前向きな感想を書いてくれていた人がとても多くて、もし韓国中学

に行つていたら、こういう日本の人の意見というのが、もしかしたら聞けていなかつたんじゃないかなあと昨日ちょっとと考えたんです。そう思つと、普通の公立の中学校に通つてすごく大事なことを学んだんじゃないかなあと思いました。

中学三年生の時に一人、在日の女の子がいたんですけど、その子と同じクラスになつて、今まで話すことがなかつたんですけど、同じ在日ということいろいろ法事のこととか、自分とこのキムチの味はどんなんやとか、そういうことを話したりして、在日同士で自分たちにしかわからないことを話すのも、結構楽しいことだなあというのを中三の時に初めて思いました。

それから高校に行つて、高校生交流会とか、こういう場とかにたくさん呼ばれて、少しづつ、自分が在日でこれからどうしていかなければならぬとかいう問題を、家でも話をする時間が多くなつてきました。両親と話することもありますし、上のお姉ちゃんと一緒に話する時もありますし。でもやっぱり、まだまだ自分自身知らないことが多すぎて、その話をしている中でも、理解できていないことが結構あります。だからこれから将来、まだ十六ですけど、高校を卒業して大学に行けるか、そのまま就職してしまうか……。もし就職したら、本当に差別があるんだろうかとか、そういうふうなことを考えていると、やっぱり自分が在日ということを考えずにはいられないというか……。今までよりも、もっと真剣に自分が在日であるということを考えていかなければならない、と最近考えるようになつてきて、今日この場に来て、この場を通して、これからこういうふうな場にもいろいろ参加して、自分の考え方をどんどん膨らませていければいいなあと考えています。

つい二日前か三日前なんんですけど、クラブの帰りに友達と一緒に帰つていて、「今日ここに来ないとダメだからクラブを休む」というふうなことを言つたんです。その人は僕が在日の韓国人であることを全然知らなくて、「なんでそんなんに選ばれたん?」って聞かれて、「僕は在日で、ちょっとお誘いがあつ

て、今日しゃべってみないかっていうのを言われた」と言つたら、その人は小学校・中学校の時も周りに全然在日がいなくて、初めて外国人が周りにいるということを知つたみたいでごく興味を持つてくれて、「実はこの新井宏受というのも通名なんだ」と言つたら、「ああぜひ本名も知りたいなあ。興味ある」とか言つてくれて。すごく些細なことなんですが、最近そういうことを考え始める僕にとっては、とても嬉しい出来事でした。周りのみんながそういうふうに興味を持つてくれてるというのをダイレクトに聞けたということが。みんながどう考えてるのかなあと。まあその人だけかも知れないので、結構同じ年代の人つてこういうふうに考へてくれるんだというのがわかつて、とても嬉しかったです。

学校でもいろいろと授業とかをしていて、在日のこととかも授業をしたんです。その時にクラスの何人かの人には、自分が在日であるということを話したりしたんですけど、結構先生とかが思つているより、みんな素直に受け入れてくれるというか、別に何の偏見もなく、「あ、そうなんや。新井君つて在日なんや」って。そうしたら絶対みんな「名前は? 本名は?」って聞かれるんですよ。だからその時は、ちゃんと「本名はパク・ケンスつていうねん」とか。するとそれからはその名前で、冗談っぽくですけど、名前を言うてくれる人もいたりとか、結構みんな興味を持つてくれてるんで、もっと学校でそういうふうなことをしたら、みんな結構興味を持つて勉強してくれるんじやないかなとか思つていま

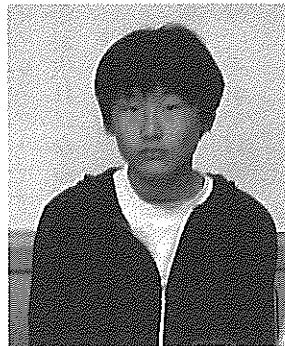
す。これからいろいろなことがあって、その度に、在日として考えていかなければならぬこととか多いと思うんですけど、本当にこういう場とかをたくさん利用して、自分の考え方や意見を膨らまして、将来のためとかに役立てていきたいなあと思っています。これで自己紹介プラス今まで僕が周りの人とどういうふうにしてきたかという話を、わかりにくい話だったかも知れないですけど、これで終わらせていただきます。

仲尾 ありがとう。全然わかりにくくなかったよ。非常にわかりやすかった。今の『消えた国旗』という授業だけど、それは社会科？ それとも道徳だつたっけ？

新井 人権学習です。

仲尾 『消えた国旗』というのは、戦前、確かベルリンオリンピックの時だったと思いますが、朝鮮半島出身の日本から出場したマラソン選手がおりました。ソン・キテさんだつたと思いますが、それで入賞したんですね。ところが、当時、植民地であつたために韓国・朝鮮の国旗が出ずしに、日本の国旗を胸につけて走ったわけです。それで入賞した。その写真が新聞に出ました。日本ではその当時の丸がそのまま出たんですが、ソウルで発行されております『東亜日報』では、その日の丸の部分が、墨で消されたものが紙面に出たんですね。これは当時、もう日本国内で大問題になつたんですが、『東亜日報』の編集部はソン・キテという選手の思いを代弁して、日の丸の選手、つまり日本の選手として扱つてほしくないと、そういうことを貫いてやつたわけです。その話が話題として取り上げられたわけですね。そういうことです。年配の方はよくご存じだと思いますが、若い方は、ベルリンオリンピックなんて遙かお生れになる前のことですから、一応念のために紹介しました。

それでは二番目は李史良君です。京都府立城陽高校の一年生で、三世ということですが、厳密には三・五世ということになるようです。彼は韓国中学校へ行つて、そして高校は城陽高校に進んだ。城陽高校はサッカーが有名だそうですが、彼はラグビーと社研（社会科学研究部）をやつてるということです。それでは李史良君、お願いします。



李 史良氏

李史良 アンニヨンハシムニカ。こんにちは。僕は李史良といいます。僕には通名がありません。生まれてからずっとこのイ・サリヤンという名前で生活してきました。名前は父親と母親がつけてくれたんです。が、父親と母親には通名があつたんです。が、結婚してから両方とも通名は使わなくなつて、自分の本名で生きることにして、そして僕が生まられてきて、僕は通名がなく自分の一つの名前で生活をしています。

僕は、小学校は家の近くの公立の小学校だったんですけど、そこは宇治市北横島小学校というところで、そこには在日の子は僕以外にいなかつたんですね。だけど、一年から六年までいい先生にあたつて、六年生の時には真剣に在日の歴史とか、朝鮮通信使の話をしてくれたり。そのために僕にいろいろ聞いて、僕も教えてもらつて、そして僕の知つてることも、「こういうことなんだよ」と言つて。「そういうことなんや」と友達が僕にまた聞いてきて、「こういうことなんだよ」と。それで友達とそれ以上に仲良くなつたり、友達の輪が広がつたりしました。

中学に行く時、韓中（韓国中学校）に行くのはもう小さい頃から「韓中に行くんや、行くんや」と言つていたので、韓中に行くのは自然に行つたんですね。そうなつた理由は、父親が韓中で先生をしていました。だからスンナリと、というか普通に「韓中に行くんだ」と言つて韓中に入りました。

韓中では授業が、英語と日本語以外に韓国語がありまして、だから授業数も多いんですけど、日本の公立の中学校ではちょっと学べないようなことを学べる。そういう意味では行つてよかつたかなと思います。あと韓国の歴史も習つたり、韓国のカヤグン（琴のような楽器）とかチャンゴ（打楽器）とか、そういうのも習つたりしました。

韓中ではサッカー部に入つてたんですけど、韓中というのは東山の東福寺の山の上のあるんですね。だから山の上なので遮るものがないなくて、夏はサッカー、もう暑くて暑くて（笑）。半脱水状態みたいになつたり……。それでも頑張つて一応三年間やりました。

韓中では文化祭があるんですけど、その文化祭では韓国劇といつて、すべて韓国語でやる劇があつて、韓国語の先生に「やってみないか」と言われて、それで一年から三年までやつたんです。その劇はすべて韓国語で、僕は今まで韓国語をしゃべるつてことは余りしてこなかつたんです。まあ名前とか、アボジ、オモ二ぐらいは何とか知つてるんですけど、しゃべるということまでは余りしなかつたので、クゴ劇に出てそのような台詞をしゃべるのは、最初はすごく「できるのかなあ？」と。台詞を見て「ちょっと多いな、できるかなあ」と思いながら、二週間ぐらい練習して覚えたんですけど。やっぱり、その劇に出たということは自分にとつてプラスになりました。「韓国語をこんなけしゃべれるようになるんや」と自信もつきました。

中三の時にはウリマルの弁論大会に出ました。自分の書いた原稿を先生がクゴに全部訳してくれて、それを覚えて出たんですけど、やっぱりそういう場では慣れない韓国語でしゃべっているのと、人が多くてすごく緊張して、途中からは原稿を見てしゃべつてしまつて、うまくいかず恥ずかしかったという思い出があります。

クゴというのは自分の母国語でもあるんですけど、やっぱり今まで使つてきたのは日本語だから、日本語を覚えていて中学へ入つてから英語を覚えるような感じですね。難しい。自分の母国語だから「やらなアカン」というものもあるんですけど、「うまいこといかない」というのがあります。僕も今はほんとに挨拶程度しかクゴをしゃべれません。ちょっと恥ずかしいな、というのはあります。自分の母国の言葉をしゃべれないというのは、自分にとつてすごく悲しいことだと思っています。だからこれからはクゴ

をもつと覚えて、しゃべれるようになりたいと思います。

韓国に初めて行つた時は、韓国中学の修学旅行で行つたんです。あまり日本と変わらないなあと思いました。でも飛び交う言葉がクゴなので、「ああ、ここは韓国なんだ。自分の母国なんだ」と思いながら。それで、ソウルとキョンジュとプサンに回つたんですけど、キョンジュに行つた時に、道端にゴミが一つもなくて、バスガイドさんが「みんなできれいにしている」と言って、「あ、すごいな」と思った。ほんとにゴミが道端のどこにも落ちてないんです。キョンジュは日本でいうと京都みたいなところなので、景観とかを守るためにきれいにしているんだと。「ああ、そうなんだ」と。そしていろいろ見ていくと「ああ、これが母国なんだ」と。建物を見たりして「これは日本ではないな」と。やっぱり自分の母国に来ただんだというので、すごく嬉しかったです。

僕はいま城陽高校に行つていますが、なぜ城陽高校に行つているかというと、単に家に近かつたから通学するのにラクだと思って行つたんです（笑）。城陽高校では、いま僕はラグビー部とあと社会科学研究部をやつてるんですけど、その社会科学研究部というのはほとんど活動していないんですが、九条マンの時に焼肉を焼いて、その利益で、たとえば、この間は神奈川へ全朝教の大会に行つたり、そういう活動をおこなっています。

社会科学研究部で、他の高校の在日の人なんかと集まつてチジミを焼いたり、鍋をしたりして、一緒に作つて食べて、そのあとに自分のいま悩んでいることとか思つていることをいろいろ語り合つて、すごくいい場を持つて、それがまた自分にとってとてもプラスになる。タメになる。自分以外の在日人の話も聞ける。自分にとって、社会科学研究部に入つて良かったなと思うのはそういう時です。

あともう一つラグビー部に入つていまして、ラグビー部は、あまり言うほどは強くありません。だけどみんな頑張つて練習して、やっぱり勝つたりすると楽しい。今までやってきて良かつたと。スポーツ

をやっていて良かったというのはみんなそういうことだと思います。

今は公立の高校に通っているんですが、差別の学習とか、この間は学校に在日のオモニの方が来てくれまして、みんな一年生は体育館に入つて話を聞いたんですけど、そのオモニの話は、自分の子どもが大学に入つて、京都の大学に入つたから部屋探しをしている時に「在日です」と言つたら、「あ、無理です」と言つられて、「在日の大丈夫なところだつたら、ここだつたらありますよ」と。そういう入居差別とうんですか、そういうのがあるんだな、まだそんなのが残つてゐるんだ、というのを知りました。

その前の時に、先生が僕のところに来て、「在日のことについてしゃべるから教えてほしい」と。僕もあんまり人にものを教えるほどはたくさん知らないんですけど、自分の知つている限りのことを言つて、それをクラスでやつた時、終わつたあとで女子が「私たちに関係ないのになんでするんやろ」と、そういうことを言つうんですね。こんなことをなんで言えるんだろうと僕は思いました。在日の僕がクラスにいるつていうのは、もう自分たちに関係ないつていうのとは違うんですね。僕が在日として居る以上、「関係ない」というのは普通はあまり言わないと思います。同じクラスで勉強している仲間が一人在日だと。男子はそういうことは言わないです。やっぱり友達だから。在日韓国人だというのをあまり区別してとかじやなくて、イ・サリヤンという人間と対等に、対等というと変ですけど、同じように日本の友達としやべつたり遊んだりしてゐる。で「俺、在日やで」と言つたら、「あ、そうやつたんや」と。それで在日であることをあまり意識せず遊んだり勉強したりしてます。その女子が言つた言葉を聞いて、やっぱり中学とか小学校でそれまで機会がなくて、そういう勉強ができるなかつたんだな、可哀相な人だなあと思ひます。

小学校の時に韓国人だということでイジメられたんですよ。三人ぐらいにイジメられてて、他の子は、大多数の子は友達で、そんなことは言わないので、「在日だ、韓国人、韓国帰れ」と言つられました。

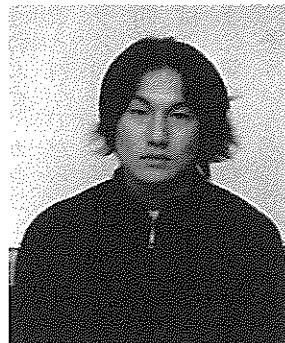
それを言われて、僕は、なぜ韓国人が日本にこんなに住んでいることを知らないんだろうと思いました。その原因は在日に対する教育がまだ行き渡っていない、みんなが知っていない、ということがそういうことに繋がるんだと思います。

これから僕は高二になろうとしているんですが、大学に行きたいと思っています。そして特に歴史の勉強をしたいと思っています。単に歴史が好きというのもありますし、あと自分の、在日の歴史をもつと知りたいっていうのもあるし、あと世界の歴史、なぜ在日がこのようにして日本にいるのか、というのをもっと詳しく知りたい。だから大学に進学したいと思っています。だから今から勉強も頑張りたいと思っています。これで僕の話を終わります。

仲尾 非常に率直にいろんな思いを語ってくれました。コメントは差し控えます。むしろ皆様方がお聞きになつて、いろんな感想、あるいは感動を持たれたと思いますので、それを後程また感想や質問の形で表わしていただきたいと思います。

では三番目。 shinがりは、李大佑君です。漢字で書けば、同じ「李」だけでも、李史良君のほうは「イ」、李大佑君は「リ」と名乗つてます。これは、もともとこの漢字の「李」は「リ」という音だつたようですが、現在の韓国では、これを「イ」というように音の上で表現するというのが一般的でして、それで李史良君の場合はイ・サリヤンですが、今度話してもらう李大佑君は「リ」というように発音して、それを自分の本名としているということです。

李大佑君は伏見工業高校を卒業して、そしてこの三月めでたく花園大学の社会福祉の専攻のほうに入学したということであります。それでは締めをよろしくお願ひします。



李 大佑氏

李 大佑 こんにちは。まず、こんな場に呼んでいただき本当に感謝しています。ありがとうございます。

僕はリ・デウというんですけど、京都で生まれて京都で育ちました。父が二世で、母が日本人だから2分の1、ハーフですね。ずっとと本名で日本の小・中・高に通つてまして、中・高とラグビーをずっとやつてました。なぜスポーツをしたかというのは、いま差別とかたくさんありますけど、スポーツというのはやっぱり実力の世界ですから、特に伏見工業はラグビーが強いですからね。やっぱり実力が問われるわけですから、日本人でも韓国人でも、インド人でも、関係ありませんから。とにかく実力があるヤツがレギュラーになれる。そういうところに惹かれて、ずっとスポーツに取り組んできました。

それと少し話題になつたんですけど、大阪の朝鮮中・高級学校ですか、あそこがラグビーに力を入れてまして、大阪のテレビに映つたんですよ、決勝まで出てね。そんなこともあるんですけど、僕はなぜ伏見工業を選んだかというと、伏見工業は強いから全国ネットでテレビに映るんですね。僕はレギュラーで出られなかつたんですけど、もしテレビに出たら本名で、日本人の中で僕は「リ・デウ」と、なんてカッコイイんだろう（笑）と思いますから、こんなことは。だから僕は伏見工業で頑張つてラグビーをしてたんです。まあレギュラーにはなれませんでしたけどね。

昔から僕は、父が韓国人で母が日本人だから2分の1というのはずっと生まれた時からで意識はあつたんですけど、小学校へ入つてからなんですね、在日という言葉を知つたのも。小学校三年ぐらいですか。だから、あとから取つて付けたみたいに気づきましたから「在日と呼ばれる部類なんやな」と。あとから気づいたんですよ。だから知つた時の思いなんていうのは、全くほんとないんです。

今は「在日で良かったな」と毎日毎日思つてますね、正直なところ。僕は人と会つてしまふのが好きですから、僕自身で在日のイメージをいいものにも悪いものにもできると思ってるんで、僕と会つた人全員が、僕に会つたことで在日のことを真剣に考えてもらえるように。それは僕の問題ですから、僕自身が無茶苦茶な人間だつたら悪いものにしか思いませんし、やっぱり考えさせられる人間になりたいなど思つてます。

僕の毎日遊ぶ友達なんかは、昔、小さい時は「朝鮮、朝鮮」って文句言つ時は言つてましたけど、やっぱり僕と遊ぶようになつてからは考へてるみたいですね、みんな日本人の子どもも。知らんヤツが「朝鮮」という言葉を使つたりしたら、やっぱり「それはアカンのと違うか」と、日本人の子がみんなで言ひ合うぐらいに僕の周りの友達はなりましたからね。そういう意味では、本名で通つてて良かったなと思つてます。

名前の問題ですけど、僕は小学校の時もずっと本名なんで、はじめは笑われたりしたんですね、小一の時は。昔は僕、体が大きくて、気も強かつたんで「朝鮮」って言われたらとにかく、バカですけど（相手を）しばいてたんですね。力が強かったから。それでそのあとに「俺は韓国人やぞ。みんなどちやうねんぞ。カッコエエやんけ」と、みんなの前で言つてたんです。ほんまアホんですけどね、こんなこと言うてたら（笑）。そんなことしてまして、「朝鮮、朝鮮」って、あとから考えたらいっぱい同じクラスの中にも在日の子がいたんです。伏見やから結構いる地域なんですね。今から考えたら、イメージの問題ですけど、僕がどついた子が家に帰つて親に言いますね。それで「李（リー）や」と言つと、やっぱり今から考えたらものすごくイメージを悪くしてたな、と。なんてことをしたんだろうと、今、ほんまに気づいてね。ちょっと反省してるんですけど。

そういう感じでやつてたんですけど、小さい頃からスポーツが得意で、話をするのも好きだつたんで

す。だから気づいたら周りの友達から、もう「リー君、リー君」って寄ってきてたんですよ。中学校の時も一緒にですけど。だから小さい時の方がむしろ、ある意味で胸張って歩いていたように思います。

名前のことを考えるようになったのは、「イヤやなあ」と思つたのは高校生の時なんですよ。小・中では全然、よくある「韓国人やと言えばどんな反応されるやろ」とか、そういう経験がないというか、もう無理やりなんですね。僕の場合は、高校生になつてから、どうして名前を言う時「イヤやなあ」と思つたっていうのは、こんな場で言うのはちょっと失礼なのかも知れないと、いうか、もうなつたら男の子は街でナンパしますね、若いから。その時に、ナンパやから（相手が）ひつかかつたら名前を言うんですね。遊びに行きますから。それで名前を言うと、「エツ？ 自分、朝鮮なん？」て言われたことが何回かあったんですよ、イヤな、イヤな顔でね。もうその時に一瞬で何もかもヤル気を失くしましたけど。だからそんなことを一回言われてから、ほんまに一週間ぐらいナンパできんようになります……ナンパもというか、そんなことしなくていいんですけど。だからなんなんでしょうね、その時は、ほんとに初めてでしたから。僕がそんなことを在日の子に言うと、（僕は）稀なパターンで、小学校の小さい時に名前を言うのが恥かしいと思うのはまあよくあるパターンらしいんですけど、高校生になつてからそんなことに気づきましたから、本名がイヤやなと少し思つた時期がありましたから、「稀なパターンやな」と言わされました。僕も「そうか」と、最近思うようになりました。

あと、無知な日本人に最近よく会うんです。僕が「バルケ」というゲームセンターでアルバイトをしてた頃があつたんです。もうクビになつたんですけど。その「バルケ」で働いてた時に従業員の女の人が言つてますよ。バルケと書いてくれと言つた時に、「ハにルにケで、ハには丸を付けるのや」って。もう全然わかつてないんですね。在日という言葉を知らないというか、ほんまに無知なんです。だから僕は当たり前ですが、日本語を流暢にしゃべるのに、最近韓国から日本に来たんだと思つてる。ほん

とに無知なんですね。もう二十近いオネエサンが……。この国はなんなんやろ、とその時は思いましたね。

でも、そんなイヤなことばかりじゃないんですよ。本名を使つてまして、伏工ラグビー部は八十人前後いるんですけど、結構在日の子が多いんですね。七、八人から十人近くいるんです。だから一割は在日韓国人なんです。それで後輩の子が、僕が本名でラグビー部にいますから、「今まで本名を言えへんかったけど、友達に言えるようになった」と。僕のお蔭で。僕のお蔭と言うてもあれですけど、まあ僕のお蔭で「自分は韓国人やねんぞ」「在日やねんぞ」と胸張つて言えるようになつたと言われた時は「わあ良かつたな」と。こんな僕もいいことしたな、と思つようになりましたね。

家庭の中の在日、ということですが、言葉は僕は全くしゃべれませんし、聞いても全くわかりません。兄貴が韓中に通つてたんですけど、兄貴とも僕はあんまりしゃべりませんから、ほんとに全くわかりませんね、言葉は。情けない限りです。

食事も、母が日本人なので、やっぱり日本食が多いんですね。たまにキムチとかトックとか、それぐらいいしか出てきません、ほとんど。法事につきましても、僕はクラブをやつてたものですから、小学校の時にチョコチョコと法事に行つたぐらいで、中・高と全く関わつてないので、法事というのに何の関心もありませんし、知りませんね、法事についても。

日本の社会に望むこと、というかやっぱりまだまだ差別は根強いでしょしね。僕の場合は、どれだけ僕がたくさんの人と会つて、存在感というか、しっかりと考え方させられるような人間になりたいなど思つております。今から生きていく上でたくさん差別はあるでしょしね。社会に出たら今まで以上にあると思うんですけど、まあ頑張つて、胸張つて生きていこうと思ってる今日この頃です。今日はありがとうございました。

仲尾 ありがとうございました。三人三様、それぞれに今までの生い立ちの中での在日体験を率直に話してくれましたので、いろんな思いが伝わったかと思ひます。どうぞ皆さん、今日の三人の若い在日本の男の子から聞いた感想・感動を、前回同様に、たくさんお寄せいただきたいと思います。そういう率直な、お聞きになつた感想が三人を励ましてくれることと思います。もちろん質問も大いにしていただいて結構です。休憩に入る前に一つだけ資料の説明をさせていただきます。

前回、京都市教育委員会から出ました「外国人教育方針」のことを少し申し上げましたけれども、今日はその概要の文章を教育委員会のほうで用意していただきました。今から七年前の三月に出た「京都市立学校外国人教育方針——主として在日韓国・朝鮮人に対する民族差別をなくす教育の推進について」というものであります。実はこれの七年前のさらにおよそ十年前に、この外国人教育方針の試案というのが教育委員会で練られておりまして、それが今から七年前の三月に実を結んだというわけです。ご覧いただきましたらわかるように、

「今の日本の学校の教育の中で在日韓国・朝鮮人の子どもたちがたくさんいる。そういうた在日の人々に対する民族的偏見や差別の実態については、日本社会の人権問題であるという観点から取り組まねばならない。そして、全ての学校で組織的・計画的に、継続的に推進しなければならない」と、こういう方針ができました。

その結果、具体的にいま取り行なわれている授業は、それぞれの学校、京都市立の学校で、公務文章として外国人担当者を置くということ。それから年に一度「民族の文化にふれる集い」ということで、民族文化の行事を取り上げて日本人の生徒と一緒に観賞しようということがあります。それから、教職員の先生方にハングルの勉強をしてもらおうということで、ハングルの講座をやる。その他、いろんな取

り組みがあります。そして今、三人のお話からも出てきましたように、やはり日本人のいい先生にも三人とも巡り合つてきてると思うんですね。非常に熱心な先生方が小・中・高校におられて、そして在日の子どもたちと共に学校の中で語り合い、支え合つてはいる、という関係があると思います。しかしながら、まだ全市的に見れば、そういう取り組みはそれほど十分とは言えない側面もござります。

もう一つの問題は、京都の高校は市立の高校が少なくて、府立高校のほうが多いんですが、京都府の教育委員会ではこういう取り組みが、つまりこういう方針が出ておりません。

それから、市域外に転校したり、他の都道府県に行つた場合には、やはり取り組まれてないということがあります。大阪府・市などは在日の子どもたちが非常に多いといふこともありますが、そうでない都道府県も非常に多いということで、地域差もつともつと熱心に取り組まれておりますが、それでない都道府県も非常に多いということで、地域差が非常にある、ということをいろいろ問題を生じております。

今日の、李史良君が行つては城陽高校は府立高校ですね。府立高校にはこういう方針が出されていないということで、ここはもう先生方の個人的な努力といいますか、それによつて支えられていると、そういうこともあります。

また後程これもゆっくり読んでいただき、基本的に、京都市教育委員会では熱心に取り組む姿勢を確立されている、ということを併せて申し上げておきたいと思います。

それでは一度この辺りで打ち切りまして、質問・ご感想・ご意見を書いていただき、次のセッションに進みたいと思います。

司会 ありがとうございました。皆様お手元に「ご意見・ご質問用紙」が置かれていると思いますけど、それにご意見あるいはご質問などを書いていただき、それを元に第二部の質疑応答に移りたいと

思います。

では、三時十五分ぐらいに第二部の質疑応答を始めさせていただきます。大変申し訳ございませんが、三時十分ぐらいまでに「ご意見・ご質問用紙」をこの前の意見箱にお入れください。よろしくお願ひします。

第一部

質疑応答

司会 大変お待たせいたしました。それでは早速始めたいと思います。では先生、よろしくお願ひします。

仲尾 長らくお待たせしました。今回も十数名の方からご意見・ご質問をいただきました。まず最初に私あての質問があります。

「今日の出席者に民族学校生が一人も含まれていませんが、その理由を教えてください。」ということがあります。

これは今まで、これで二回今年は続けて参りましたけども、三回の保護者の方は子どもさんを民族学校、幼稚園を含めて、に通わせている親御さんが非常に多ございました。そういうことと、もう一つは、日本の学校に通っている在日の生徒が非常に多い。特にそういう日本の中の学校での生徒と、日本の生徒との問題をひとつテーマにして取り上げよう、重点的に取り上げようと、そういう兼ね合わせもあって、今回は日本の学校に在籍している三人の高校生に登場していただきました。

もちろん、民族学校の生徒の思いも、またそのうちに取り上げる必要があると思いますが、民族学校の在校生と日本の学校の在校生とは、重なり合ってる部分もあれば別のある部分もありますので、そういう点で、今回については日本の学校に在籍している生徒の皆さんに集中的に話を聞こうということになつております。民族学校の在校生を排除しているわけではありませんので、ご了承願いたいと思います。
それでは早速質問に入ります。まず、非常にわかりやすいところから入らせていただきます。

一、「今日のパネリストが若い男子ということもあり、スポーツの話もよくされていましたが、そこで一つ皆さんにご質問があります。今日のテーマと全く関係ない馬鹿げた質問ですが、サッカーあるいはラグビーなどで、よく『宿命の対決』として、日本対韓国の戦いがありますが、今日のパネリストの皆さんはどうちらの応援をされますか。」（笑）というご質問です。

「というのも、私の友達の同胞（キヨツポ）の何人かに質問したところ、みんなそれぞれ複雑なようです。」この方は在日の方のようですね。「もちろん韓国」という者もいれば、「アカンかもわからんけど心の底では日本」という者もいました。『日本が韓国と戦う時だけ韓国、その他は日本』という都合のいい者もいました。在日という立場は、ある種こういうところでも複雑なこともあるようです。」

ということですが、まず三人にですね「どちらを応援しますか」ということですが、もうこれは単純明解に「こうやつていうことを言つてください。順番は話してもらつた順番でいきましょうか。まず、新井くんからですね。

新井 これは、はつきり言つて日本を応援してしまいます。

仲尾 理由をちよつとだけ言って。

新井 そんな深い理由はないんですけど、やっぱりテレビ見てもサッカーの人やつたら出でる人は日本人しか知らないんで、韓国の試合を見てもなんかちよつと最後まで見られないというか。日本人の人だったら常日頃から知つてゐる人とかもいるから、やっぱり日本のほうをどうしても応援してしまいます。

仲尾 では、李史良君。

李史良 僕は韓国を応援するんですが、でも、都合のいいつて言つたらそうですが、日本が別の国と対戦していく、日本が頑張つていれば応援しますね（笑）。

仲尾 （笑）はい、李大佑君。

李大佑 答えになつてないんですけども、あんまり僕はスポーツでもよっぽど友達が出でているとかじゃない限り、他人を応援する余裕がないので。答えになつてしませんが、すみません。どちらも応援しないです。

仲尾 ということでした。では次の質問にいきます。

一、「三人それぞれ、親から直接・間接に民族性についてどのようなことを学んだかということを、

もう少し話してほしいと思います。」

「そういう質問です。民族性という言葉は私なりに置き換えて、『在日らしさ』というように置き換えて話してみてください。じゃ、新井君から。

新井 これはもう常日頃、毎日生活している中で……。常日頃のことだから、質問で聞かれたら、どう答えればいいのかわからないんですけど、もう毎日の生活の中で、生活の全て教えてもらつてのなと感じます。

李史良 僕もたぶん日常生活の中だと思います。たとえば、お父さんのことを「アボジ」と呼んだり、お母さんのことを「オモニ」と呼んだり、そういうクレバを使うことも民族性だと思います。あと法事とかをする時に、「これはいつするんやで」と教えてもらうのも民族性を学んでいると思います。

李大佑 僕の場合は母が日本人だから、必然的にアボジから民族性を学ばないといけないんですけど、僕のアボジは全く、ある意味では僕のことを他人だと思ってるから、押し付けはしないので、「こういうことがあつた」とか「こんなことがあるけど、どうや?」としか言わないので、あんまりそういう話はないですね、どつちかと言ふと。

仲尾 あのね、李大佑君。お父さんの思つてゐる文化、お母さんの思つてゐる文化に違いがありますね。そういうことを子どもとして考えてみて、二つの文化が家庭の中にあるということですが、そういうことについて、あなた自身はどう思いますか。

李大佑 そうですね。僕が在日であるというのは名前でしか証明できませんし、自分の中では在日だと思います。カギは名前だけですからね。文化も、ほとんど日本の暮らし方、日本式ですしね。別にいいと思いませんけどね、日本人と韓国人……日本の文化、別にインドの文化でもベトナムの文化でもなんでも入つてくれば。別に日本やから、韓国やからっていう気持ちはありませんね。

仲尾 ありがとうございました。つまり一つの文化が家庭の中にあるということは、いいことだということですね。

李大佑 はい。

仲尾 では、その次の質問に対する答えにいきましょう。

三、「小学校には民族学級が設置されているところがありますが、いま通われている高校では在日朝鮮人に対する配慮などがあるのでしょうか。たとえば、民族クラブがあつたり、担任などが普段の生活の中でサポートしてくれたり、といったことですが。」

「そういう質問です。そのあと言葉の問題について感想があります。

「それから、朝鮮語が話せないことにについて引け目を感じておられるようですが、日本で今まで暮らしてきたのですから、話せなくて当然だと思います。周囲の人などで朝鮮語を話せない人のことをどうかく言るのは、在日の現状を知らないからではないでしょうか。」

こういう感想を添えて質問があります。民族学級が設置されているのは京都市内で三校だけです。あとはそれぞれ先程の、京都市の教育委員会の方針の絡みでいろんなことがあるかとも思いますが、何かそれぞれクラブや何かのことについて、それぞれの体験の中で「こんなことがあった」「今こんなことをやつてる」というそういうことがあつたら、また新井君から順に一言ずつ答えて下さい。

新井 クラブっていうのは一応あるみたいなんですけど、活動してないんです、洛陽では。でも、その代わりに人権教育室というのがあって、そこでいろいろと話を聞くこともあります。

仲尾 ということは、人権教育室では在日の問題、あるいは日本と韓国・朝鮮の歴史、そういうことをかなり取り上げる機会があるわけですか？

新井 はい。人権教育室へ行つたら、いろいろビデオを見せてもらつたり、借りたりとか。本を借りたりとか、そういうふうなことです。

仲尾 ありがとう。洛陽工業高校の場合はそういうことだそうです。では、その次。

李史良 城陽高校では、さつき僕がお話した社会科学研究部の顧問をしている土肥先生が、たとえば奨学金の話であつたり、そういうことについてはサポートしてくれます。

あと、この下に書いてあることなんんですけど、韓国語がしゃべれないっていうのは、僕の中で、やっぱり自分の母国語をしゃべりたいというのがあるから、韓国語を話せないことが恥かしいと思つてゐる。

仲尾 はい。では次。

李大佑 伏見工業は、朝鮮文化研究会みたいなのがあるみたいなんですが、活動はしません。担任というか、そういう認識の深い先生と話をすることは、たまにはあります。それから下の質問ですけど、朝鮮語を話せないことについて引き目を感じているのではなく、朝鮮語を「学ぶ気がない自分」に引き目を感じているだけであって、別にこのことは全く引き目を感じていません。

仲尾 今それぞれがいる学校でのことですが、小学校、中学校ではどうだったかということを、もしか記憶に残っていること、印象に残っていることがあつたら、それぞれ言つてくれますか？

新井 小学校、中学校の時は、そういう民族学級とか何もなかつたので、授業の中で日本人と一緒に勉強していくぐらいしか機会がなかつたです。

仲尾 中学校は？

新井 中学もいつしょです。

李史良 僕も小学校は担任の先生が、たとえば差別の学習なんかでそういうことをみんなと一緒に勉強する。中学は韓国中学だったので、何と言つたらいいのか、その中で生活をしているので、そういう

」とはあんまりないです。

李大佑 僕もあんまり……。あつたのかも知れないと記憶にありません。中学校の時はたぶん、全くなかつたんじゃないかなと……ちょっと記憶にないので答えられないです。

仲尾 ありがとうございました。いま皆さんお聞きのように、学校によつて非常に取り組みの差がある、と。それから非常に熱心な先生もいらっしゃれば、そうでない先生もいらっしゃるらしいし、そして人権教育室ですか、そういう組織が設けられているところもある、と。様々なんですね。

そういう学校での取り組みの差が、それぞれの在日の子ども、生徒たちに対する教育的な配慮、あるいはどういう教育をしているかということの差になつて表れてきているように思います。

その次は、就職に関するご質問です。

四、「三名の人のお話を聞いていると、民族差別によるイジメをさほど経験していないのは、やはり社会の進歩、日本人の倫理感の向上に基づくものと、結構なことだと思います。今回は、今後ますます経済情勢が厳しくなる日本の社会において、就職をしたり、社会人生活を切り拓いていかねばならないと想像しますが、それに対し何らかの不安とかをお持ちですか。どのような考え方を、就職ということに対し今からお考えでしようか。お三人さんどのなたということとなしに、お考えがあればお答えください。」二人は高校生でこんど二年生になる、それから李大佑君はこんど大学一年ということで、それぞれ時

間がまだ少しありますが、何かこのことについて考えがあれば、ざっくりばらんに言つてみてください。

新井 次、高校二年生なので、真剣に進路をどうするかというのを考えていかないといけないんですけど、ほんと在日の人が就職したあとで差別を受けるとか、そういうなことをほんとに余り知らないので、不安もまだ持てないというか……。在日の人で就職差別を受けた人が、どういう差別を受けたのかというのが、まだまだ勉強不足でわかつていないので。（差別が）あるらしいというのは知っているんですけど、「こんな差別があるから不安や」というのはまだ考えられないです。

李史良 僕は民族差別というのは小学校の時に受けたので、やっぱり教育が進んでいるところと進んでいないところの差がまだだいぶあると思います。僕は会社に就職したいとは思っていません。まあその前に大学に入ることを今目指しています。たぶん大学を出て、今したいと思っているのは、教師になります。たとえばそれについて研究する人になつたり、あとは法学部に入つて弁護士になるのを目指す、そういうのを考えています。

李大佑 僕も中学校の教師になりたいと思つてたんですけど、国籍条項ですか、いろいろあるみたいで、まあ四年後に僕がその立場になつた時に考えようかなと。まだあまり現実に思っていないので。そういうことです。

仲尾 ありがとうございます。いま最後の李大佑君が言つた国籍条項のことですが、公務員に関しては一般職・技術職などに採用に関する国籍条項があるということと、それから中学校の先生になりたい

と言つてましたね。中学校の先生、つまり教員については国籍条項はないんです。ところが、採用試験に合格して採用されたとしても、常勤講師という身分なんですね。教諭という身分ではない。そういう差があります。それが一つ問題です。給料は一緒だけれども身分上の差をつけてる、ということなんですね。いずれまた李大佑君がぶつからねばならない問題としてそういうことがあります。

そういう意味でも、公務員の国籍条項、あるいは教員採用に関わる身分上の差別、こういうことがありますと、たとえば、三年先までに撤廃されなければ李大佑君の進路というものが限られてくるということになるし、五年先まで解決されないと、今度二年生になる二人の進路もまた限られてくる、とこういうことになるわけですね。ですから、そういう点で一年でも早くこの問題が解決に向かうことを期待したいと思います。

次の質問は、大きな質問なんですが、なるべく簡単に答えてみてください。三つあります。

五、「三人に対しても大変伺いにくい」とですが、韓国籍とわかつても友達はなんら変わらなかつたという話でしたが、友達の親はどんな反応をしたのでしょうか。やはりなんら変わらなかつたのでしょうか。」

ですから、友達の親と接触があつて、友達の親がどんな反応をしたかという経験があれば、話してください。なければないで結構です。一番目は、

「また、朝鮮が問題を起こすとチマ・チヨゴリを切られたりする事件が残念ながらあります、三人はそんな経験はありませんか。」

この場合の朝鮮というのは、朝鮮民主主義人民共和国、つまり北朝鮮との関わり合いが多い問題ですが、民族学校の生徒がチマ・チヨゴリを切られたりする事件があります。三人は韓中へ行つた李史良君

を別にすれば、日本の学校にいるんですが、それでもそんな経験はないだろうか、という質問ですね。

三番目の質問は、

「もう一つ。いま国籍を変えられたいたら日本国籍に変えたいと思いますか。」

国籍は、今の日本の国籍法では、満二十歳になつたときにどちらかの国籍を取り、どちらかの国籍を捨てるという宣言をすれば、国籍を変わることができます。そういうことを指して言ってられると思うんですが、「今」と言つてられますので、二十歳のことは考えずに、今の気持ちをお話してみてください。じゃまた新井君から。

新井 友達の親とかに、遊びに行つて態度を変えられたりとかいうのは全くなかったです。それから、チマ・チョゴリを切られたりとかは、男性はチマ・チョゴリは着ませんので、そういう事件に関わったことはないです。

「国籍を日本国籍に変えたいと思いますか」というのは、これは絶対に変えないと思想ですね。日本国籍にしたらいろいろ考へることがなくなつてしまつとどうか、いま在日で日本にいるから、自分のことをいろいろ振り返つたりとかできると思うので、日本国籍にしてしまつたら、なんの問題もなくいつてしまいそうな気がする。在日のまま、いろいろ考へながらずっといきたいと思います。

仲尾 はい、ありがとうございます。

李史良 友達が態度を変えなくて、親が態度を変えたといふのはないですね。やっぱり、そういう子どもだったら親もちゃんと理解できる人だろうし。またそういう親だから、子どももちゃんと理解でき

る子どもになるから、そういうことは今までなかつたです。

チマ・チョゴリが切られたりした事件は知っています。僕もパチ・チョゴリは着たことはあってもチマ・チョゴリは着ません。(笑)……韓国人つて人目でわかるような格好をして街に出たことはないですし、だからそういうことになつたことはありません。

あと国籍を変えられるということは、僕は今もそつだし、これから先も絶対にないと思います。というか、国籍を変えられるということは、ちょっとおかしいと思います。

仲尾　　はい。じゃ、李大佑君。

李大佑　まず「韓国籍とわかつても友達はなんら変わらなかつた」というのは、「変わらなかつた」とは僕は言つてないんですね。僕の友達は、在日もいますが、まあ日本人なんですけど、僕と僕の持つている文化つていうんですか、ルーツですか、と日本人の子が持つてる文化は違いますからね、やっぱり僕が在日である以上。だからいい意味で意識は変わつた、と思つてます。

あと「友達の親はどんな反応をしたのでしょうか」というのは、友達の親からしたら、自分の息子が友達として（在日の子と）遊ぶのはいいみたいですが、僕の友達で結婚の時にね。だから友達としてならないんでしようけど、そのオネエチャン、オバチャンは「アカン」と。隣にいる友達だつたらいいんでしようけど、自分の娘の夫になるというのは許せないみたいな、そんなことは聞いたことがあります。

「チマ・チョゴリを切られたりとか……」よく先輩には、高校に入つてどつかれたんですけども、それはよくあつたんで、全員どつかれてましたから。僕が韓国人やから、在日やからどつかれてたのか、

もしかしたらそうかも知れないですけど、ちょっとそれはわからないですね。あと、国籍は変えません。

仲尾　はい。それじゃ、質問の最後にいきます。

六、「先週、公立の小学校の卒業式がありました。PTAの役員をしているので参列しましたが、卒業生で本名を名乗っている在日の児童が、卒業証書を受け取りませんでした。私の想像では、元号表記のせいかなと思つたのですが、今日のパネラーの三名の方、また在日の友人の中でもそういった体験はありましたか。学校側に聞くと、西暦との併記はできないと。市教委の方針のようです。せっかく卒業まで頑張ってきた在日の本名通学の児童に、気持ち良く受け取つてもらえる卒業証書であつてほしいし、なんとかしていくために、日本人の私たちができることがあれば教えてほしいです。」

こういうご質問です。

先ほど控え室で話しておりましたけども、そのことを知つてゐる人もいましたし、知らなかつた人もおりました。新聞報道で「存じだ」と思いますが、このことは、在日の保護者が、本人の生年月日を西暦表記にしてほしい、と。それから発行年月日、それぞれの学校の校長先生の名前で何年何月何日という発行年月日を入れるところを、そこも西暦にしてほしい、ということを要望されました。

それに対して「生年月日はいいけれども、発行年月日についてはそれは曲げられない」という学校側の態度がありまして、宙に浮いてるという人の卒業証書が、全部で確か十七、今ある。それは今年だけじゃなくて、三年前からの持ち越しを含めてですが、そういう事実があります。

このことにつきましては、保護者の方とかに私もお話を聞いたんですが、やはり日本でしか通用しない年号は、外国籍の子どもの親としてはやっぱり使ってほしくない。やはりどこでも通用するものとし

て、西暦表記を両方貫いてほしいと、こういう強い要望であります。これについては、背景を三人ともそれぞれわかつている人、わかつていない人もいますが、何か意見があればそれぞれ一言ずつ言ってください。

新井 僕はこのことを全然知らなくて、さつき控え室で仲尾先生に聞いて初めて知ったんですけど。もう、小学生でこういうことを考えて卒業証書を受け取らなかつたというのは、とてもすごいことやなあと思いました。初めて知つたことなので、まだこういうことについてとか、他いろいろ、こういうふうなことつていろいろあると思うんですけど、またいろいろ勉強していくってみたいと思います。

李史良 僕はこの話を聞いたことがあります。僕が小学校を卒業するときは、なんか卒業前にプリントが配られて、元号表記にするか西暦表記にするか、それが配られて、僕は西暦表記を選んだ。あと自分の名前をちゃんと正しく書いて。それで自分の誕生日を、西暦表記での誕生日を書いた。小学生でこういうきちんとした態度を取れるというのは、やっぱり自分をしっかりと持つている、というか自分のことに誇りを持っているので、偉いと思います。

李大佑 僕の場合も、クラスで在日の子だけ担任に呼ばれまして、元号か西暦かと聞かれて、僕も西暦にしました。小学生ですか、これは。素晴らしいですね。

仲尾 はい。三人三様にそういう感想を述べてくれました。」」からあとは感想です。全部紹介いたします。まず、第一番目の方。

七、「前向きな姿勢が素晴らしい。若い力があれば何でもできるよつな気になさせられました。私自身も現実から逃げずに頑張ろうと思いました。」

「」という感想です。では一人目の方。

八、「今日は、孫のような若い元気なお三人の率直なお話を聞けて、本当に感動しました。様々な差別と偏見であなた方に接してきたことを本当に申し訳なくお詫びします。どうぞこれからもお元気で、目標に向かって前進してください。私たちもまた様々なことの学習を重ねて、手に手を取って、力を合させて、地球人として世界のため、平和のために小さな力を出し合えるよう一層努力したいと思います。そして、あなた方のお国のためにも祈り続けたいと思います。本当に今日はありがとうございました。」

「」という、大変強い決意表明であります。では二番目の方。

九、「三者三様の意見が聞けましてとても良かったです。でもみんな自分というものをしっかりと持つて、これから先のいろんなことに負けないようになります。前向きな姿を持つておられると思いました。特に印象的だったのは、李史良君の人権学習の女子から言われた言葉、『自分らには関係ない』という言葉を聞いて、何も知らない可哀相な人なんやな、と思われたことです。なかなかそんなふうには考えられないと思います。その女子より、李史良君が数段上からものを見ていました。すごく偉いと思います。」

「」という感想です。四人目の方。

十、「私は家庭では三人の娘の母です。高校生の娘はいま私学に入り、中学とは打って変わった外見、姿です。心を痛める母としてわが子を見ていました。一方、私自身が下がつて見ると、やはりそれなりの考えは持っていますが、今日、目の前に現われた三人の高校生を通じて、公の場でしつかり発言される姿を見てとても頬もしく思いました。家に帰りまた伝えたいと思います。差別はとてもたくさん、また様々だと思います。私自身も家庭環境において、悔しい、悲しい思いもあります。でも、それも今は私自身の一つの財産になっています。自分が傷ついた人間は、人の痛みを知り、人を受け入れられると思います。私は今の仕事にそれが生かされているとも思っています。言葉の暴力のほうが深く人を傷つけることもありますね。本当に気を付けなくてはと考えさせられます。『関係ない』『知らん』という言葉が今の世の中は多いと思います。無責任な発言です。同じ地球の上で、同じ空気を吸つて生きているのに。私自身もまだまだ勉強不足です。賢くはなれなくても、無知な日本人、無知な母、無知な人間と呼ばれないように、また努力していきたいと思います。」

「これも、こういう決意表明です。あと二つあります。

十一、「今日は若い人たちの話を聞けて、とても嬉しく思っています。私は日本国籍ですが、在日の韓国籍、朝鮮籍、中国籍の若者たちに伝えたいことがあります。あなたたちは、それぞれの民族の文化と伝統と現在の自分の生き方を結びつけて、誇りを持つて生きていってください。私は陶芸をやっており、趣味で映画もよく見ます。日本の今に繋がる陶芸の祖（陶祖といいます）は、リ・サンペイ（李參平）という朝鮮の人です。豊臣秀吉の朝鮮出兵で日本に連れて来られ、あの桃山時代から陶芸文化を花開かせたのです。」

これは有田焼の李參平のことですね。

「陶芸において日本人から最高に尊敬されているのは、朝鮮の人なのです。映画においても今、世界最高の監督は韓国のイム・グウォンテという人で、ソ・ピョンビルですか、「風の丘を越えて」とか、「祝祭」「族譜」などを撮ったんです。台湾の『非情城市』を撮ったホ・リヤングエンも世界最高の監督の一人です。いま生きてる俳優で最高の人は、韓国のアン・ソンビという人です。イム監督のほとんどの作品に主演し、日本では『眠れる男』という作品でずっと眠っていた人です。あなたたちの民族の文化は、いま世界でも最高の文化なのです。誇りを持って生きていってください。日本の社会がどんなに差別する社会であっても、それを変えていくだけの力を、あなたたちの民族の文化は与えてくれるのです。」

「こういう」紹介がありました。では、最後の方です。

十二、「今まで学校で人権学習のときに教えてもらつてきたけれど、こうやって在日の人の話を聞くのは初めてでした。私の周りには在日的人は少なくて、わからないこともあります。が、こういう機会にたくさん触れることで、いろいろな考え方を取り入れたいと思いました。今までは先生たちに教えてもらつて考えたり、意見を持ったりすることも多かつたけれど、同世代の人にも学ぶことが多くて、とても良かつたです。高校生同士でいろいろな意見を出し合える場を、もっと作つてほしいと思います。」

「こういう」感想でした。

皆さん方それぞれなりに、いろいろなご感想を持たれたと思いますが、私が今日、三人の話を聞いていて思ったことは、やはり、それぞれに日本人あるいは在日の人を含めて、いい友達がそれぞれできているように思いました。そして中には「関係ない」と言つた女の子もいたそうですが、やはり非常に関心を持つてくれたということ、あるいは名前のことを持つて知りたいと言つてくれた、そういうこ

とが三人を支えている一つの力になつてゐると思います。もちろん、ご両親の教育も非常に大きいです。それから、いろいろな方法でもつて在日の生徒たちに取り組んでいる、先生方の力もまた大きいと思います。そういう中で、このように素晴らしい三人の若者が育ちつつあります。

確かに前途は容易ではありません。でも最後の一、三人の方のご感想にもありますように、本当にこの三人がこれから伸び伸びと日本社会の中で生きていけるよう、そういう社会に私たちはしていかなければならぬ、と改めて思いました。

そういう意味で、最後にこの三人へのこれから未来に對して、私たちが激励の大きな拍手を送りたいと思います。（拍手）

どうもありがとうございました。それではこれで、四回に亘りました今年の『チヨゴリときもの』のセッションを終わります。まだ来年、皆さんとお会いできる」とを楽しみにいたします。

司会 ありがとうございました。この連続フォーラム『チヨゴリときもの』は、今年で六回目を迎えます。六年間やつておりますけれども、六年目になつて初めての試みとして、パネリストとして高校生の方においでいただきました。

今回は、また初めて、「全国在日朝鮮人教育研究協議会京都」、略して全朝教京都といふところから協力をいただいて、本日のパネリスト三人の方をお招きすることができました。

最後に、この全朝教京都から少し皆様にご案内がありますので、もうしばらくお待ちください。

全朝教代表者（全朝教京都・事務局長 松下佳弘さん）貴重な時間をもらいましてありがとうございます。

私たちちは京都の小学校から大学まで、学校の教職員を中心にしてこうした在日の子どもたちの教育、あるいは日本の子どもたちにこうした問題をどう教えていくかということについて、この数年、細々と取り組んできております。

今日のパネラーの話にもあったと思うんですけど、そういう教師はまだまだ非常に少のうござります。しかし、少しづつそうした取り組みが広がる中で、学校の教職員もこうした方向での取り組みを少しずつ進めております。そこで私たちは、そういう取り組みを少しでも広げようということで、全朝教京都という集まりを作つて、数年前からセミナーを開いたり、そして、あそこのうしろに置いてあるんですけど、『通信』を発行したりして広がりを追求しております。

今年はそういう中で、全国のこうした取り組みをしている教職員が中心になって集まつて、そういう取り組みを京都で開くことになりました。黄色いパンフレットをお配りしたと思うんですけど、ちょっと見ていただけると有り難いんですけど、今年の五月の八日に、精華大学をお借りしまして、『多文化共生教育を考えるシンポジウム』という集まりを土曜日の午後、行います。

もう一つは、これは二千人ぐらい集まつてもらうことを想定して考えているんですけど、八月の二十一日から四日間、全朝教教育研究集会京都大会というのを開きます。これは特に京都の中でこうした取り組みを広げたいということもあって、全国の取り組みを京都に持ち寄つて、大勢の方に聞いていただき、発表していただこう、という取り組みでございます。フィールド・ワークといつて、実際に京都の朝鮮文化等を訪ねるバスツアーとか、あるいは全体会で京都の取り組みを報告するとか、あるいは分科会で大勢の日本全国の先生方に集まつてもらつて、こうした取り組みの交流をし合う、こうした非常に盛りだくさんの取り組みを考えております。私たちは行政の援助もほとんどいただかずに、自分たちで頑張つてやつています。ぜひ大勢の方に参加していただいて、大会が成功しますように、ここにいる

皆さん、興味があつたらぜひ参加していただきたいと思います。

今日は貴重な時間をいただきまして、どうもありがとうございました。

司会 ありがとうございます。四月以降は来年度になりますけど、七年目ですね。また新しい企画が決まりましたら、皆様にご案内を送りたいと思います。引き続き、来年度からもまたご参加いただけますように、よろしくお願ひします。

今日は、本当にお足元がお悪い中、ご参加いただきましてありがとうございました。お気をつけてお帰りください。ありがとうございます。

あとがき

名前、アイデンティティ、国籍、就職など、在日の子どもは成長するにつれ、悩みが多くなります。保護者の方にとつても、日本社会に生きるなかで子どもの一生にかかわる決め手になるかも知れない「教育」に悩む方々も多いでしょう。

今回は、そういういた様々な思いを語つていただきとともに、開催から第六回目になつてはじめて現役の高校生からの思いも聞くことができました。

在日のなまの声やその思いが聞けるというのが、この「チヨゴリときもの」の一つの重要な部分でもあります。今回のようなテーマについて率直に語られる様々な場をより増やしていくのが何よりも大切であることをあらためて考えられたよい機会でもありました。

十人のパネリストの方々、そして準備にあたり様々なご協力をいただいた関係者の皆様に心から感謝申し上げます。

(財)京都市国際交流協会事業課

鄭 晶根
チヨン チヤングン

アジアの風文庫 15
「チョゴリときもの」
在日韓国・朝鮮人～子育てと学校教育～
1999年8月1日 第1刷発行
編集・発行 財団法人 京都市国際交流協会
〒606-8436 京都市左京区粟田口鳥居町2の1
TEL. 075-752-3010
印刷 (株)石田大成社





財団法人 京都市国際交流協会
KYOTO CITY INTERNATIONAL FOUNDATION